

青空に

雲ひとつ

横井 秀治

目次

- 序話 あるがまま
- 第一話 誕生
- 第二話 おもちやライブラリーと九さん
- 第三話 二人のおばあさん
- 第四話 ドイツからの手紙
- 第五話 三世代一緒の生活
- 第六話 地域の一員となる
- 第七話 夏はアルプスへ
- 第八話 ある冬休み
- 第九話 父子日本旅
- 第十話 別れ
- 第十一話 作業所へ
- 第十二話 笑顔
- 第十三話 命の尊厳こそ
- 第十四話 あるがままの彼ら
- 第十五話 グループホームに移り住む
- 第十六話 小指一本が
- 第十七話 小さなよろこび、大きな幸せ
- 第十八話 寄り添う親たち

第十九話 広島からのメッセージ

第二十話 三人で日本滞在

終話 再び、共に暮らす

序話 あるがまま

「なぜ息子に、いのちが宿ったのかって？」

それは、全ての生きものと同様に、彼の命が世のなかで必要とされ、意味を持っているからなのだ。彼のような身でもね。

いや、だからこそ、周囲の人たちと一緒に生きていくなかで、彼の命は輝き光を発しているのだ。さらに、付け加えたい。そもそも彼には、「どうして」「なぜ」という語はないのだ。彼は自分なりに、あるがままにいるのだから。それをはじめて知ったのは、妻と会話した時のことだった。

「急にお腹の調子が悪くなったと言ったので、すぐこの病院へ駆けつけたのがよかったよ」

「そうね。あなたのお父さんがタクシーを呼んでくれて」

「まさか、体長十五センチの小さないのちが、きみのお腹に宿っていたとは、思いも寄らなかつたよ。流産をしないで本当によかつた。チュービンゲンから、ここ東京に来て、二週間が過ぎて、その間、きみにとっては目まぐるしい日々だったよね。緊張した日々だったに違いない。お腹にも、その影響が出たのだろう」

「そうかも知れないわ。でも、妊娠しているとは、思わなかつたわ」

「きみは、呑気なところもあるからな。とにかく、近くに病院があつたのが幸いだつたよ」

「きみにとつて、日本滞在は初めて、なにかとドイツでの食事や習慣が違うので、戸惑つたことだろう。まして、この暑さなので」

「夏のこの湿気、今まで体験したことがなかつたわ」

「きみが暮らしていたドイツの夏は、湿気がそうなかつたからな」

「そうね」

「それにしても、よくついて来てくれたね。きみと知り合つのが、七ヶ月前だったね。そのあと、結婚して、すぐ日本へ向つたのだから」

「あなたは、わたしの夫だし、一緒にいるのは当たり前だわ」

「でも、一人住まいの、きみのお母さんと別れるのは、辛かつたのでは？」

「そんなことはなかったわよ。母は、わたしの日本行きに賛成だったし」

「そうだったね。きみにとっては、まったくの未知の国だけれど、僕がいつも傍にいるから安心してほしい。とにかく、二人で力を合わせて暮らしていこう」

「もちろんよ」

「今のお腹の調子はどうなの？」

「いいわよ」

「きみに見守れながら、小さいのちは、あるがまま懸命に生きようとしたのだよ」

「そうよね。あなたにも見守れながらね。この新しいのち、うれしいわ」

「あと八ヶ月したら、産まれてくるとドクターは話してくれたね。きみは慣れぬ地なので、大変だろうが、踏ん張ってほしい」

「もちろんよ。お腹にいる新しい命と一緒にね」

そう言ってから、妻はお腹を撫でた。

翌日、四人部屋のドアを開けてから、妻のベッドサイドに寄った。

「昨日、病院から家に戻ると、母から、『きみは三十二歳、初めて子供を産むには少し高齢なので、羊水検査を受けたらどうか』と勧められたよ。母は、心配してそう言ったのだろう。でも、『その必要はない』と答えたからね」

「わたしも、そう思うわ。このお腹のなかに宿っているのち、私たちによるこびをもたらしたいのち、どんなことがあっても産むわよ」

妻は力強い声を出し、またお腹を摩った。

「とにかく、きみの体が落ち着くまでには、あと四日間ほどかかるだろうとドクターが話してくれたよ。それから退院となって、いつもの生活に戻れるとも話してくれたね」

「そうなの」

「それと、今日の朝、よい知らせが入ったのだよ。ドイツから職を求めて書き送った手紙の返事がきて、知的ハンディのある子供たちが住む施設で、指導員として採用してもよいとの内容だったよ」

「それは、よかったわね」

「うん、これでひと安心だ」

「東京から少し離れた浜松の地で、二人、いや三人の暮らしとなるな。とにかく、きみはここを退院して、実家でまた一週間ほど過ごしてから、採用してくれた職場に行くことにしたからね」

「わかったわ」

第一話 誕生

列車の座席から、外の景色を眺めている妻に、

「あと少しで、浜松駅に到着だ。お腹の調子はどうなの？」

と、訊くと

「いいわよ、もう心配はいらないわ」

と答え、彼女は急に立ち上がり、つま先立ちをした。その姿を目にしながら、

「これから、私たちの新生活となるね」

「楽しみだわ。どんなところかしら？」

と声を上げて、再び席に座った。

「まだ、行ったことのない地だから、なんともいえないが、近くにキリスト教を背景とした総合病院が近くにあるようだし、これから住むことになる職員寮の傍に教会もあるようだ」

「それは、いいわね。いろいろと配慮をしてくれて、ありがとう」

「牧師家庭で育ったきみだ。ドイツとは異なる日本の生活様式に、いくらか馴染んでくれるといいのだが。これから住む寮には、施設のお客さん用に使われていた蒲団があるだけで、家具がないとのことだった。着いたら、ソファやテーブル、それに食器類を揃えていこう。六畳と四畳半の二間、それに小さなキッチンがついているらしい」

「日本での生活となるのね」

彼女は、生き生きとした声で言った。

トランク二つを持って、浜松の三方原に到着した私たちは、先ずプレハブ造りの二軒隣の住いに入居する。

翌日簡易のソファとテーブル、それに食器類を近くのスーパーで買い求め、生活できるように整えていった。

暮らし出して、妻が困惑したことがあった。それは、トイレだった。腰かけて用を足すものではなく、しゃがんでする汲み取り式のタイプだったからである。早速、私の初任給で洋式の簡易便器を購入し、取り付けた。彼女はことのほか、よろこんでくれた。

蒲団で寝ることになった彼女だったので、畳の上で寝られるどうか心配をしたが、なんの問題も生じなかった。反対に、蒲団は押し入れに納まるので、居間兼寝室のスペースが、広くなるのでよろこんだ妻だった。

ドイツでは、幼稚園の保育士だった彼女である。お腹が次第に大きくなるにつれ、ドイツから持ってきた縦笛を、お腹にいる子に聞かせるようによく吹くようになった。その時の顔は、輝いていた。

日本の民謡や童謡を二、三回耳にすると、笛でその曲をもう奏でることができたのには驚いた。お腹の子とのコミュニケーションは、その時点でもうはじまっていたのだった。

そのような日々が続くなか、日本語をまったく話せなかった妻は、まわりの人たちとのコンタクトに戸惑いもあったが、明るい性格の彼女は私と共に楽しそうに過ごしていた。また、家の近くにキリスト教会があったので、彼女はそこへよく出かけるようになり、教会員のなかに英語をいくらか話す人がいたので、その人を家に招いたりもするようになっていった。それに、近くにキリスト教組織団体の『母の家』があって、そのシユベスターとの交わりに、よろこびを見出していた。

社会性を重んじている彼女だったので、買物などで一人出かけたりすると、すれ違う人と、かならず「こんにちは」と笑顔で挨拶を交わし、周囲の人たちと溶け込もうと心がけてもいた。

私に時間があると、日本語を教えていたが、日常会話はドイツ語だったので、彼女の日本語は上達していかなかった。それに、勤務時間が早番や遅番や当直もあった私だったので

で、困惑もしていた。

休日になると、私たち二人いや三人は近くの自然豊かな地をよく散歩するようになっていった。

ある時、私が勤める施設内で行われた秋の運動会で、パン食い競争に参加した彼女が一等賞を取ったことがあった。お腹の子に支障が出ないかと案じたが、彼女はうれしそうな表情で、「心配いらないわよ」と言っただけだった。

一人で暮らしていた義母からは週に一回ほど、手紙や電話の連絡があった。また、出産予定日の三カ月前には、義母が縫った小さな靴下や服などが届いたりもした。それを目にした時、私たちはこれから生まれてくる子のことを思い、胸が大きく膨らんでくるのだった。

そのような新婚生活が続き、出産予定日の二週間前となった。

いつものように職場で働いていると、一人の事務職員が、

「電話ですよ」

と、伝えにきた。誰かと思いつながら電話が置いてあるところに行き、受話器を取った。

「奥さんがトイレのなかで、大きな声を出していますよ」

同じ寮に住む隣人の甲高い声である。それを聴き、驚き、職場から歩いて数分の寮に駆け足で向った。

息を切らせながら玄関のドアを開けると、妻は畳の上で横になっていた。駆け寄った。

と、隣人の奥さんが、

「破水となっていますよ」

と早口で言い、

「すぐ病院へ行ったほうがいいですよ。わたしの車で運びましょう」

と、大きな声を出した。

私たちは、近くのクリニックへ向った。

横に座っている妻を見ると、お腹に手を当てながら、少しも動揺した様子もなく、

「もうじきよ」

と、言った。

病院に着くや、妻は分娩室に運ばれた。

彼女から、「産まれる瞬間は傍にいてほしい」と望んでいたのも、そのことを看護師に

伝えた。しかし、看護師から、

「緊急なので、ドアの外で待っていてください」

と言われてしまい、それに従ってしまった。

三時間ほど、落ち着かない気持ちで廊下の長椅子に座って待ち続けた。なんの連絡もない。時計の針は、一九七八年二三時四五分を指していた。待った。

少しすると、看護師がドアを開けて出てきた。

「男の児です」

それを聴き、「妻に会えますか」と訊ねたのだが、「明日、来てはどうですか」と勧められてしまった。妻の手を握り、わが子の顔を見たかったのだが、ここでも看護師のことに従ってしまったのだ。

寮までの帰り道、歓喜のあまり、叫びたい衝動に駆られ、それを抑えるのに困った。

翌朝、病院へ行き、息子との初対面となった。

ベッドで横になっている妻に、

「ごくろうさん。色が白く、ぼつちり二重瞼で整った顔だ。ありがとう。お義母さんには、あとで連絡しておくよ」

と伝え、壊れそうな息子を抱いた。彼女は、にっこりして私たち二人を見つめていた。こんな歓びがあるのだろうか、疑うほどとなった。

それから五日して、タクシーに乗って私たち三人は帰宅した。

息子の名前は、男か女かわからなかったのが考えていなかった。数日してから、妻がドイツ名でミヒヤエル、私が日本名であそぶ（遊）と名付けた。

その息子は、母乳をなかなか飲もうとしなかった。

「お乳を吸ってくれないの。一日にどれだけ飲んだかわからないわ。こうやって哺乳ビンに入れて飲ませると、すこし飲むのだけでも。ほら、このノートを見て！ 毎日、彼が飲んだ量が記されてあるでしょ」

妻は、そのノートを私に見せた。

「昨日の朝六時は、六十cc。お昼は五十cc。夕方の六時は五十cc。二四時は六十cc。合計すると一日に二百二十ccか。産まれたときの体重が未熟児すれすれの二五五〇グラムだったな。それから二週間経っても、二六四〇グラムか」

そうつぶやいたあと、彼女に、

「いや、これから毎日少しずつ飲むよ。そのうち、吸いつくように飲むさ」と、いくら大きな声で言った。

「そうよね。こうやって乳を搾り出す必要もなくなるでしょうね」

しかし、一週間が過ぎても、依然として哺乳ビンの母乳をあまり飲もうとはしなかった。その様子を目にしていると、私も心配になってくるのだった。もしかしたら、妻も同じようなことを考えているのかもしれないと思った。

「彼が、なぜミルクをあまり飲まないのかを、あの看護師さんに、家に来てもらって訊ねてみようか」

それとなく言った。

「ええ、それはいいわね。あの看護師さん、とても優しくかったわ。ミルクを飲ませる工夫が、何かあるかもしれないわね」

二日後、病院での仕事を終えた看護師が来宅した。

息子があまり乳を飲まず、体重も増えないことを話すと、彼女は何事もないかのように、

「そう心配することはありませんよ」

と言い、妻にミルクの飲ませ方などの指導をしてくれた。

看護師は一時間ほどいてから、帰ることになった。彼女をバス停まで送って行く途中、思っていることを伝えた。

「知的ハンデのある子供たちが住む施設で働いているので、察したりするのですが、もしかしたら、息子はダウン症ではないでしょうか」

「いや、そんなことはありませんよ」

看護師は、先ほどと同じような穏やかな声で答えた。暗い夜道なので、彼女の表情を読み取ることはできなかった。

「仕事柄、彼らのことはわかっていますので、本当のことを言ってください」

「いえ、そんなことはありませんよ」

同じ返答を繰り返すだけである。もうこれ以上訊ねることはできないと思い、家まで来てくれたことにお礼をのべてから、妻と息子のところに戻った。でも、看護師が言ったことを、鵜呑みにしていなかった。

妻は、電話で母と話をするのをとても楽しみにしていた。生活するだけで精一杯の給料だったので、こちらから電話をすることができなかった。いつも義母からかかってきた。見知らぬ地に住む彼女にとって、母だけが、私を除いてことばの支障もなく、心を通わすことができる人だった。あまりミルクを飲まないことを話したためか、ドイツから粉ミルクなどが届くようにもなった。

息子の体重は少しずつ増えてはいったが、他の子と較べると極端に少なく、首が四ヶ月過ぎても座らなかつた。そこで、生まれた病院ではなくて、他のクリニックで、血液を調べてもらおうとした。二週間後に、結果を知ることになった。

職場で働いていると、事務職員が、

「横井さん、電話ですよ」

と、伝えにきた。直ぐに、電話機が置いてあるところに行き、受話器を取った。

「あそぶ君の血液の結果が出ました」

ハツとしていくらか恐さを覚えながら、受話器を耳に強く当て続けた。

「検査の結果、二十一トリソミーのダウン症と判明しました」

それを耳にするや、そのようなことだろうと想像していたにもかかわらず、私の心は動転して、何かを言おうとしたのだが、声が出てこないのである。受話器の向こうで何かをしゃべっているのだが、耳に入ってこないのだった。

少ししてから、「そうでしたか。ありがとうございます」と言って、受話器を置いた。

その時、「ありがとうございます」と反射的に自分の口から出たことばが、妙に耳に残った。と同時に、生まれた病院では、なぜ教えてくれなかったのだとの思いとなった。

（外国人の妻だったからなのか。でも、そうならいずれわかるのに。あとで言おうとしたのだろうか。いや、違うだろう。出産後、直ぐに我が子を見ることができず、また、極端に乳を吸う力のなかった子だったので、担当の医師はこの子の生命力はないと思ったのではないか。だから言わなかったのだろう。そうとしか考えられない）

受話器を見つめてから、仕事場に戻った。体から力が抜け、呆然と立ちすくむだけだった。（やはりそうだったのか）と何度も心のなかでつぶやいた。家に帰ってから、妻にどのように伝えたらよいのかと考え続けた。

勤務時間が終わり、帰宅して玄関で靴を脱いでいると、いつものように妻の「おかえりなさい」の明るい声を耳にしてから、六畳の居間に入った。と、彼女が話し出した。

「今日、母から小包が届いたわ。あなたが戻ってから、紐をほどこうとしたのだけれども、待ちきれなくて開けてしまったわ。ほら、母が送ってくれた木製のおもちゃがあるでしょ。ミヒヤエルは、まだあのようなおもちゃで遊ばないのに。でも、そのうち関心を示すでしょうね」

彼女はそれのおもちゃを手にとり、立ち上がって私に見せた。話さなければならぬと思

い、妻を畳の上に座らせた。

「きみに伝えなければならぬことがある。今日、クリニックから電話があつて」

そこまで言うのと、前に座っておもちゃを動かしていた彼女の手が、ぴたっと止まった。

「検査の結果、彼は」

次にいうことばが重たくて、なかなか口から出てこないのである。

やつと声を絞って、

「ダウン症だとわかった」

と、彼女の顔を見ずに言った。

妻は一瞬、体をギクツと震わせて視線を下に落とした。そこには、義母から届いたおもちゃなどが包まれた包装紙がきちんとたたまれてあつた。なんということを伝えてしまつたのだらうと思つた。彼女を正視しなければならぬのに、自分もその包装紙に目を落とすし続けた。沈黙が流れ続けた。

二、三分もしただらうか、妻は立ち上がり、隣の三畳の寝室で寝ている息子のところへ行つた。

彼はぐつぐつと眠つていた。その顔に、自分の頬を重ねた。その彼女の肩に手をかけながら、息子の顔を見続けた。そのあと、私たち二人は居間に戻つた。

妻が小さなテーブルの上にキャンドルを灯した。

「彼がわたしを母として、あなたを父として選んだのだと思つて、彼と共に暮らしていきたいでしょう」

「そうだね。親として、私たちはするべきことはして、この子をどうしても育てていこう」
彼女の手を握り続けた。

浜松の冬はドイツと較べると明るく暖かいこともあつて、妻はセーターなしで毎日過ごしていた。

彼女は、聖隷事業団を創立した人の奥さんから借りた、竹作りの乳母車に息子を乗せ、毎日のように外に出ていた。

休日になると、私もその乳母車を押して一緒に散歩するようになった。彼女は道行く人と出会うと、親しそうに挨拶を交わし、息子をいつも笑顔で見せていた。それも、誇らしそうに。それが、私にはとてもうれしかった。

日本語を話せず、親戚や友人もいず、ハンディを抱えた子を持ち、今後どのように育ててよいのかとの見通しも立てることができない妻だったが、少しずつ体重が増えた息子の成長を、私と共によろこびながら、温暖な浜松の地で暮らしていた。

クリスマスが近づくと、彼女は近くの林から高さ一メートルほどの木を採ってきて、居間にそれを立てた。その枝に、麦わらで作つた星や月などを吊るしはじめ、十二月二十四日を待ち望んでいた。

義母からは、ドイツ製の木のおもちゃが多く入つた小包がよく届くようになった。とくに、ミヒヤエルは音のする木のおもちゃが気に入り、寝ながらそれを手に持つて一人で遊ぶぶようにもなつた。その様子を目にしたので、彼がよろこんで遊ぶ木製のカスタネットなどを作つては、彼に与えていた。

そのようなある日、しばしば足を運んでいた街の図書館で、一冊の本が目にとまった。

それを借りて読むと、学生時代から追求していた内容の本だった。妻は毎晩、寝る前には聖書をかみならず読んでいたが、私もその本と出合ってから、毎晩のように、それを枕元において目を通してから寝るようになった。

その本というのは、宗教哲学に関するものだった。学生時代から、鶴見の総持寺に座禅を組に行き、そこで寝泊りもしていたこともあった私だ。その本の内容が自分の体に入ってくるように感じられ、その著者の教えている大学へ、職場の休日を利用して行くようにもなった。

それから数カ月後、考え抜いた末、妻に話した。

「浜松から茨城県の土浦に引っ越そうと考えているのだけど、どうだろう？ 木のおもちや作り、それも知的ハンデイのある幼児たちのために、おもちゃ作りをしたいのだ。それに、時間が許せば、再び、大学で勉強したいのだが。土浦は大学を卒業したあと、すぐに働き出した地でもあるし、友人もいる。また、近くに筑波大学があって、そこで池田先生という人がダウン症のセラピー教室を開いているので、そこに彼を通わせたいのだが」

土浦が自分にとって、いかに大切な地なのかを、さらに伝えようとした。

「知的ハンデイのある子供たちに初めて出会ったのは、学生最後の年だった。そろそろ就職先を考えはじめたときだった。友人に誘われて、彼の父親が運営している施設に行き、そこで一週間過ごしたことがあった。彼らは、初めてのわたしに親しく寄ってきては、話しかけてきた。その振る舞いは明るく、素直で、とても純粋に映った。とにかく、彼らと一緒にいるだけで楽しかった。それから数週間してから、再びその施設に行き、園長に、『ぜひ、ここで働かせて下さい』と願いを出して、職員になったのだ」

さらに、続けた。

「ことばでの会話が乏しい彼らと寝泊りを共にしていると、ますます彼らに魅せられてしまったのだ。ぜいたくにも、彼らと同じような心境になりたいと思ったね。その心境というのは、自分をありのままに出して、自分を守り、防衛しないということだったのだ。それに、人を疑わないということだった。そこに、ことばを越えた真実性があると思ったのだ。とにかく、彼らと接していると、彼らが鏡となって自分が映し出され、それも自己中心的な自分を見出し、ハッとするときがしばしばあったよ」

一息入れてから、また語った。

「その例の一つとして、手づかみでご飯を食べている子の手をつい軽く叩いてしまったことがあった。そのときから数日間、自分の手をじっと見つめたね。その子は素直に食べていたのに、こちらの瞬間的な強い思いで手を打ってしまったことを後悔したよ。もう少し自分を抑え、彼を尊重しながら、接していかねばならなかったのに」

彼女は、真剣に聴き入っていた。

「その施設には重いハンデイのある子供も多く、彼らは自ら語りかけることが少ないこともあって、問いかけるこちら側の真摯な心が、大切となってくるのを知ったよ。それは、まさに自然との出会いのなかで、自然からはことばとしての語りかけはないが、こちらから話しかけ、問いかけると、それなりの返事を得るのに似ていると思ったね。自然も彼らも、まわりと共に、懸命に生きているのだから」

さらに、続けた。

「そのような経験をしているなかで、今度はダウン症の息子を持ったよね。それはネガテ

イブなことではなく、彼を通して自分や社会を見つめるチャンスでもあるとの考えになったね。そこから自分の生きる方向性を見つけようと決めたのだ。それには、慣れ親しんだ土浦の地だと、なにかと活動しやすいのだ」

彼女は、私が話した内容を聴き終えてから、

「あなたが語った内容、よくわかった。あなたがそう望むなら、協力するわ」と、言った。

この地にくらか慣れてきた彼女だったので、私の願いを素直に受け入れるのは、そう容易ではなかっただろう。深く感謝した。

数カ月したら、土浦に引越すことになった。

第二話 おもちゃライブラリーと九さん

土浦市郊外に建つ、簡易な平屋に移り住むようになった私たち三人だった。ここでも、しゃがんで用を足す汲み取り式の便器だったので、直ちにプラスチックの簡単な洋式タイプを買い、それを取りつけた。

一歳半になったミヒヤエルは、筑波大学で開かれていたダウン症のための療育教室に通い出し、体の動作訓練などを受けるようになった。

妻は、そこでの先生たちと英語で話をし、また大学付近に二人のドイツ人女性が住んでいたの、彼女たちの家にしばしば息子をおんぶして行くようになった。ことばでのコミュニケーションは、以前ほど問題はなくなっていた。

私といえば、ハンデイのある幼児たちが遊ぶ木のおもちゃを、友人の父が運営している施設内で作りはじめ、それらを市内のデパートや地域の子供祭りなどで販売するようになった。でも、それだけでは生活できなかったの、作ったおもちゃをダンボール箱に詰めては、近くの幼稚園や保育園に出向き、売り込む活動もするようになった。

最初の頃、園の門をなかなか潜れなかったが、生活費を稼ぐにはこれしかないと思い、意を決し、売り廻った。二つ、三つ買ってくると、うれしかった。

おもちゃを作る傍ら、火曜日の午前中の二時間だけ、筑波大学に通い、宗教学の三枝先生のゼミを聴講するようになった。大学院でのこの授業は、とても学ぶものが多く、それを許してくれた妻に感謝しつつ、机に向かっていった。

彼女は生活がいくら厳しくなっても、なに一つ辛いとは口に出さないで、いつも明るく振る舞っていた。それだけではなく、近くにあるプリマハムという会社の社員たちにドイツ語を教え、その授業料を家計費にまわすようになった。

そのような日々が続き、あそぶが三歳になった時だった。私たちの生活に新局面が加わった。

おもちゃ作りの仕事を終え、家の玄関戸を開けると、妻の「おかえりなさい」とのいつもの明るい声を耳にしてから、台所に入った。

彼女は息子を背負いながら、包丁で人参を切っていた。その息子の額にキスをすると、妻が話し出した。

「今日二つの電話がかかってきたわ。一つは母からで、もう一つはテレビ局からだったわ」

「テレビ局？」

「ええ、内容をすこし話してくれたのだけれど、わたしにはよくわからなかったわ。でも、明日の朝、もう一度、電話するそうよ」

済まなそうな声で言った。

日本語がまだよく理解できない彼女は、受話器では相手の姿も見えず、話も聴き取りづらく、電話に出るのが好きでないとよく洩らしていた。ミヒヤエルが生まれてから、彼を育てるのに精一杯で、日本語を習う時間は彼女にはなかった。それに、私たちの会話はドイツ語だったので、日本語は上達していかなかった。それでも、まわりの人たちと接するうちに、日常会話はどうにかできるようになってはいたが、十分ではなかった。

翌朝、作業所へ行こうとすると、家の電話が鳴った。受話器を取ると、NHKのテレビ局からである。私たち夫婦が開設しているおもちゃライブラリーを取材したいとの申し込みだった。思いも寄らない話だったので、「明日、返事をします」と応えてから受話器を置いた。

その晩、妻と話し合った。

「どうしよう、ぼくはマスコミが好きではないのだ。断ろうか」

「でも、あなたが開いているおもちゃライブラリーは、商売でしているわけではないし、ハンディのある子供を持つ親たちが、自然と集まって、できたのでしょ。それと、あなたがいつも言っているように、この活動がここだけでなく、至るところにできてくればと願っているでしょ」

「そうだが。しかし、どのように放映されるか」

「では、あなたの希望を、そのテレビ局の人に話してみたら？」

「そうだな。よし、承諾しよう。さらに、よい活動となるように。しかし、もっと忙しくなるかもしれないぞ」

「わたしで、できることはするわ」

妻は、ハンディのある幼児のためのおもちゃライブラリー活動に協力的だった。

翌日、NHKから電話がかかってきた。こちらの希望を伝えたあと、承諾することになった。

ここに至るまでの、おもちゃライブラリーのことが頭のなかに浮かんだ。

(ハンディのある幼児たちは、市販されている一般の玩具ではなかなか遊ぼうとはしなかった。しかし、音のするおもちゃには関心を示し、遊ぼうとした。息子もそうだった。そこで、彼に音のする木のおもちゃを作っては、与えるようになった。

そのおもちゃで、私の家の三畳間は足の踏むところもないほどになった。そのことを知った近所に住むハンディのある幼児の親たちが、私の家に来るようになり、おもちゃを借りていくようにもなったのだ。

そのようなことをしているうちに、おもちゃを借りに来る親子が次第に増えて、狭い家では十分な対応ができなくなってしまう。そこで、土浦市内の古い木造アパートの一室を借りて、毎週の土・日曜日をおもちゃの貸出日として、無料で提供することをはじめたのだ。

自分たちの生活費が足りないのに、アパートの一室の家賃を払い、そのようなことをするのには勇気がいった。が、共通する悩みを持つ親たちと話し合っているうちに、どうし

でもおもちゃライブラリーを開こうと決心したのだ。

開設当初は、妻と私とで訪れてくる幼児と親に應對していた。そのことが地域の新聞に載り、訪れてくる親子の数がすこしずつ増え、二人だけでは十分に対応ができなくなってしまった。さいわい、近くの筑波大学で福祉教育を専門に学んでいる大学院生数名が、手伝いに来てくれるようになったのだ。

手作りの木のおもちゃを貸し出していたので、数を増やさねばならなかった。これもまたうれしいことに、近くに住む主婦グループの人たちがおもちゃ作りに参加してくれるようになったのだった。

学生たちも主婦たちも私たち夫婦も、皆、ボランティア。私たちはお互いに助け合いながら、おもちゃライブラリーの活動をするようになっていったのである。

息子だけでなく、他の幼児たちがおもちゃであそぶ姿を見ては、よろこびを感じるようになった自分だ。それに、新たに作ったいろいろな種類のおもちゃを、妻は必ず褒めてくれた。その声に押され、他の幼児にも薦めることができたのだ。

NHKのテレビ放映は、約十分間ほどだった。多くの人が観る朝の時間帯だったので、大きな反響を呼んだ。まして、国際障害者年でもあった。

それに、関東地区にはおもちゃライブラリーがほとんどなかったので、放映後、毎日数十件の問い合わせの電話が入るようになった。それに応じなければならなかった妻は、不自由な日本語、それも電話での対応だったので、難儀していた。

土浦おもちゃライブラリーに来る家族は、増え続け、県外からも来るようになった。また、マスコミなどの取材も多くあった。この活動が関東地区、及び全国にまで広がり、ハンディのある幼児を持つ家族が気楽に来て、遊べるような場となるようにと願いながら私たちは活動を続けていた。

ありがたいことに、安田火災保険会社から援助金として五十万円を頂くことになった。それで市販の木のおもちゃを購入して数を増やしたり、手作りのおもちゃのカタログを作成したりもした。

そのようなある日、坂本九さんが北海道の三十分番組のテレビ取材で、私たちのおもちゃライブラリーを訪れてきた。

真っ白い半袖のシャツと紺のズボンの九さんは、私たちが作ったおもちゃ一つひとつを手にとつて、感心しながら見ていた。その表情には、あのテレビで観るような優しさがあつた。

ライブラリーでの二時間ほどの取材が終わつたあと、九さんが私たち夫婦に、

「このような活動が広がるといいなあ」

と、微笑みながら言った。

「ええ、おもちゃを媒介にして、親は自分の子供と遊び、会話もできます。また、ここにあるおもちゃは、子供たちの発達を助長するように作られていて、ほとんどが木の手作りのおもちゃなのです」

さらに、説明した。

「ハンディのある幼児たちは、家からなかなか出られないのです。でも、このようなどころで、同じ悩みを持つ親たち同士が、お互いに会話をしたりするなかで、励まされたり、

不安なども軽減されたりして、両親、とくに母親が元気になるのです。連帯意識が自然と生じてくるのです」

そう言うってから、また続けた。

「ここに来るには、父親が車で運転して、父親も養育の役割を知っていくのです。ハンデのある子供を育てるのは、母親だけでは無理です。ストレスが溜まってしまいます。それを和らげるためにも、父親及び地域の人たちの協力が必要なのです。このおもちゃライブラリーは、そのようなことを考慮に入れながら活動しているのです」

それを聴いた九さんは、私の目を見ながら、

「なにか書くものはありますか」

と言ったので、一枚の紙とペンを渡した。と、その紙に、

どの花にも

草にも

どのおもちゃにも

ひとつのいのち

と、筆を運ばせた。

それを読んだ時、九さんはなんと優しい心を持った人なのだろうと思った。花や草にいのちを見出し、おもちゃにもいのちを見出している九さん。一つのおもちゃは孤立してそこにあるのではなく、そのおもちゃとそれで遊ぶ子供との間に、いのちの繋がりをみている九さん。

彼の澄んだ瞳を見ながら、

「ありがとうございます」

と感動した声で言いながら、手を握ると、しっかりと握り返してくれる。

二時間ほどいてからの別れ際、九さんはニキビの跡が残っている顔で、にっこりして私たち夫婦に、

「わたしの祖母は茨城に住んでいるのですよ。また、このライブラリーに来るよ」

と、言ってくれた。

それからというものの、妻は九さんの歌、「幸せなら手をたたこう」をしばしば口ずさむようになった。

おもちゃライブラリー、それに九さんと出会う機会を得たのも、息子の存在があったからこそだと思った。

第三話 二人のおばあさん

九さんがおもちゃライブラリーを訪れて、二年が経とうとしていた。

関東地方に台風が上陸するだろうとのニュースがラジオから流れた。それを台所で料理

していた妻に伝えると、彼女は不安そうな顔を浮かべた。

「母があさって日本に来るというのに、飛行機は成田に到着できるのかしら？」

「台風が上陸するまでには、まだ四日もあるし、そう心配することはないよ」

「でも、母が来るときに、台風が襲ってくるなんて」

そう言いながら、彼女は息子の好きなカレーライスを作っていた。

その姿を目にしながら、真剣に思った。もし強い台風が来たら、今住んでいる家の屋根は吹き飛んでしまうだろう。ブリキ張りの木造建ての簡易な貸家だったので、大型の台風が直撃されたら、一溜まりもないだろう。裏はピーナツ畑になっている。屋根が飛ばされたら、三人をどこへ連れて行こうと考え出した。

さいわい、台風は速度を緩め、上陸は五日後との予報をラジオから聞き、ホッと胸を撫で下ろした。

二日後、つくば学園都市に住んでいるドイツ夫人の家へ、ひとり車で向かった。その夫人の母と義母は同じ飛行機に乗ってきたので、彼女が成田空港で二人を迎え、連れてきたのである。私の古い車だと、成田に着くまでの間にエンストする可能性があった。

そのドイツ夫人宅で、義母との再会となった。長い飛行機の旅にしては、義母の頬は赤みがさし、以前とあまり変わりのないように見えた。

エンジンをかけてから、走り出した。

「遠いところから、よく訪れてくれました。日本に来るのに、一大決心がいったのではないですか」

「そうね。でも、あなたたちに会いたかったから。それにミヒヤエルの姿も見たかったし、彼は元気なんでしょう？」

「はい、四歳となって、やつとひとり立ちができるようになりました。今は、近くのキリスト教系の幼稚園に通っています」

「早く会いたいわ」

そう言うてから、義母は私のほうに顔を向けた。

「ヒデジと会うのは、何年ぶりになるのかしら？」

「五年ぶりです。お義母さんは以前とそう変わりが無いように見えますが」

「ええ、大きな病気はしませんでしたね」

義母はにこやかな顔でそう応えたあと、初めて目にする日本の風景を眺めはじめた。

十分足らずで家に着き、玄関前で車を止めると、妻が格子戸をガラガラと開けながら出てきた。母と娘の久しぶりの再会である。娘は背の高い母を抱くようにして、お互いに頬と頬を合わせ、数秒間抱き合ったままでいた。

私たちが六畳の居間に入ると、ミヒヤエルは畳の上で寝転びながら、木のおもちやを手にして遊んでいた。その彼を、私が抱き上げ、

「おばあさんが来たよ」

と言うと、おばあさんのほうに顔を向けた。

義母は、孫の小さな手を取り、

「こんにちは、ミヒヤエル」と言うと、妻が、

「ここにいる人が、あなたのおばあさんなのよ」

と、声を出した。すると、ことばがまだ出てこないでいた彼は、「アー、アー」と発し

ながらおばあさんの顔を見た。義母は、孫の頬に自分の頬を重ねた。ちょうどその時、外のスピーカーから、こんにちは赤ちゃんのメロディーが流れはじめた。

「あの音は何なの？」
母が、娘に訊いた。

「あれは果物や野菜、それに牛乳などを車に積んで売り歩いている人が来たことを知らせるメロディーなのよ。新鮮な食べ物一杯あって、わたしも時々、買ったたりしているわ」
日本の生活に慣れてきた彼女が、母に説明した。義母はコートも脱がずに孫を抱きながら、娘の言うことに耳を傾けていた。

少しすると、義母は居間にある簡易ソファに腰かけ、コーヒーを飲みながら、飛行機内で起こったことや二人の息子たち家族のことを語り出した。

元気とは言え、七十歳を越えている。一時間もすると、欠伸をするようになった。それを目にしたので、義母に、

「疲れていませんか？」

と訊くと、

「ええ、そうですね」

と、答えた。

「時差の違いもあるし、少し休んだほうがいいですよ。お義母さんは、いつも昼寝を欠かさずにしていましたし、機内では、それもできなかったでしょうから」

「それでは、そうさせてもらおうかしら」

押し入れから蒲団を取り出し、それを敷きはじめた。と、義母が低い声で隣にいた娘に、「寝るといつても、この部屋で横になるの？」

と、囁いた。

「ええ、そうよ。そこに四枚の襖があるでしょ。それで仕切るから、向こうが寝室となつて、こちらが居間になるのよ」

彼女は、続けた。

「食事のときは、この居間が、こんどはダイニングルームにもなるのよ。そればかりでなく、ここが教室にもなるのよ。今、近くのプリマハム会社の社員に、週に一回ドイツ語を教えているわ。社員六名がここに来て、ドイツ語会話の時間となるのよ」

母は娘の話に耳を傾けていた。ドイツの暮らしとはまったくかけ離れた生活に、驚いたに違いない。でも、彼女はそのような表情を少しも見せずにいた。

義母は、一日目と二日目は娘と絶えず話をしていた。

三日目の夕方から、土浦が台風の暴風雨圏内に入った。大型の台風だったが、日本に近づくとつれて小型となった。が、それでも強い風と雨である。木枠で作られた窓がガタガタと音を立てて揺れ出し、横なぐりの雨が窓を沫くようになった。

台風がさらに接近してくると、窓の隙間から、水と風が部屋に漏れ出し始める。急いで、トタン製の雨戸を閉めたが、それでもどこからか水と風が侵入してくる。しかし、義母は心配そうな表情を少しも見せずに、夜が更けるまで娘と話を続けていた。さいわい、屋根は吹き飛ばされずに済んだ。

台風一過の翌日は、澄んだ青空となった。秋晴れの下、妻と義母はミヒヤエルをベビーカーに乗せ、数カ月前から通い出した地域の幼稚園へ向かった。その幼稚園は、イギリス

の牧師が運営していて、妻はその人と英語で話をしていて。

あそぶはひとり立ちができてはいたが、排便はまだ一人ではできず、保育士たちを何かと悩ませていた。家のなかではドイツ語、外では日本語の日々だったので、彼の頭のなかは混乱していたに違いない。まして、筑波大学の先生が私たち夫婦に、「ダウン症のなかでも重たいほうで、動きが多いですね」と話してくれたことがあった。

無断で幼稚園の門から出たことが何回もあった。そのような彼だったが、妻は自転車の前座席に乗せて幼稚園へ行き、他の子どもたちと一緒にいる息子の姿に目を細めながら見守っていた。それに、片言の日本語で、他のお母さん方とよく話をして楽しそうだった。また、彼の誕生日には、お母さんたちと子供たちを家に呼んだりもしていた。

その幼稚園へ、妻と義母は送り迎えをしていた。

義母に、「どこかへ行きましょか」と訊ねると、「娘と孫と家にいるのが一番いいわ」と静かに答える彼女だった。

義母は、私たちの貧困な生活を見てとっただろう。私たち夫婦がドイツを発つ前、彼女からもらったチェロを生活費に困って、先のドイツ夫人に二十万円で売ってしまったことも知っているに違いない。それで遠慮しているのだろうと思った。あそぶを含めての四人で、京都に連れて行きたかったが、それができず、私の母が住んでいる東京に一度、それに筑波山に行っただけに終わってしまった。

日本を発つ前日、これから寒くなるからと言って、義母は娘に自分の二枚のセーターを手渡し、孫には、ここ一カ月の滞在中に編んだ毛糸の靴下を、テーブルの上に置いた。

それを見て、義母を遠くに案内できずにいた自分の不甲斐なさを思い、生活を安定させていかねばと意を強くした。

それから半年が経った時だった。リュウマチとパーキンソン病に患って、自分一人では歩けない状態だった私の母が、土浦に四週間の予定で遊びに来ることになった。私と妻は、よろこんで母を迎えた。

その母が、東京の家に戻る一週間前、

「よかつたら、あなたたちと一緒に暮らしたいのだけれど」

と、言った。直ぐに返事をするのができなかった。というのも、息子がいるからで、さらに妻に負担がかかると案じたからだった。

その夜、妻に母の願いを伝えると、彼女は躊躇もなく、「いいわよ」と答えた。そこで、母と一緒に暮らすことになった。父は、二年前にすでに亡くなっていた。

今まで住んでいた狭い家から、今度は母のベッドが置けるような、やや広い住宅に移るようになった。

妻は母を車椅子に乗せ、あそぶが家にいない午前中は、毎日外に散歩に出かけるようになった。近くに住む主婦たちが、

「お宅の奥さんえらいですね。感心するわ」

と言ったのを、何度も耳にした。また、母を連れて週に一回ほど通う国立霞ヶ浦病院の

婦長さんも、

「親孝行のお嫁さんね」

と、褒めた。妻に感謝した。

多くを語らない母は、大変苦労した人だった。私の少年時代は、父が不在だったので、

母は兄と姉、それに私と妹を育てるために、朝から夜遅くまで、着物の仕立てをしていた。学校から戻ると、母はいつも四畳半の居間兼仕事場で、長い裁縫台を前に座っていた。私の「ただいま」の声を耳にすると、母は少し顔を上げ、「おかえり」と優しい声で返事をして、手を休めずに着物を縫い続けていた。私たち子供四人が布団に入ってから、隣の四畳半部屋には、明かりがずっと灯っていた。

私たち子供が起きる頃は、隣で寝ていた母の姿はなかった。台所のトントンという音でいつも目が覚めた。子供を育てるのが、生き甲斐とも語った母だった。

裁縫を毎日していたせいか、指が変形してリュウマチに悩まされてしまった。その母から、妻は赤飯の作り方や魚の焼き方を、「おかあさん、おかあさん」と言いながら教わるようにもなり、体重三十六キロになってしまった寝たきりの母を抱えながら、三日に一度は、お風呂に入っていた。

仕事から戻ると、先ずベッドで伏せている母の部屋に行った。そのあと、妻とあそぶが部屋に入ってきて、家族四人で今日何が起こったかを話したり、テレビを観たりの日々が続いた。

その母は心身ともに衰え出し、高齢者ホームに入ることになり、私たち三人は毎日のようにそのホームを訪れるようになったのである。

第四話 ドイツからの手紙

ミヒヤエルが土浦支援学校に通うようになって、一年が過ぎたある日のことだった。夕食を済ませ、彼を寝かせたあと、居間でお茶を飲みながら新聞を読んでいると、妻がドイツの母からの手紙を見せた。

そこには、義母の住んでいる五階建ての家の三階が数カ月したら空くとのことが書かれてあった。遠回しに私たちが、そこに住んではどうかとも記されてもあった。それを読み終えたあと、彼女に言った。

「お義母さんは、体が弱ってきたのだろうか」

「そんなことないと思うわ。ただ、その手紙に書いてあるとおり、三階に住んでいる家族が引越しをするそうなの。その家の大家さんが、母の娘夫婦が住むようなら、家賃は半額でいいわと言ったらしいの」

いつもとは違う低い声である。彼女は、さらに続けた。

「この手紙を一週間前に受け取ってから、ミヒヤエルのことを考え続けたわ。このままここで教育を受けさせていてよいのかと。そうすると、肯定的な答えがわたしのなかで見つからないの」

ゆっくりと自分にも言い聞かせるように語った。

驚いた。今、やっとこの土浦の地で生活ができるようになって、これから本格的におもちゃの製作活動に取りかかり、ハンディを抱えながら暮らす人たちと一緒に働き、彼らのために作業所を開設しよう思っていたからだだった。

彼女の目をじっと見つめてから、「このことはよく考えてから、お互いよく話し合ってから決めよう」と伝えた。

それから数日間、考え続けた。妻は思い巡らせ末に、言い出したのだろう。

(今までグチや不満を何一つ口にせず、怒った顔を見せたことのない彼女だ。よくやってきた彼女だ。もう限界なのかも知れない。ダウン症のなかでも障害程度が重いほうに入る息子を異国の地で七年間育て、私の母を二年間介護し、経済的困窮を虐げさせた自分に、原因があるのだろう。)

義母の住んでいる家の三階が空くということは、何かの縁があつてのことかもしれない。息子を中心にして動いている私たち家族だ。彼が活動し易いようにしなければならぬ。ここ土浦での本格的な作業所づくりはできなくなるが、ドイツにいても福祉的な活動はできるだろう。おもちゃライブラリーも軌道に乗りつつある。自分がいなくても大丈夫だろし、全国に広がっていくだろう。

また、浜松で、私の願いに反対もしないで受け入れてくれた彼女だ。それに、私と知り合い、直ぐに日本行きを躊躇なく受け入れてくれた彼女でもあるのだ。未知の国に住む覚悟で来たのだ。今、ここで彼女の望みをきかなければいけない)

それから数日して、彼女と話し合った。

「向こうで暮らしはじめたら、月々の生活費をどのようにしていいのかを考えたりするよ。自分は、ドイツで通用する労働資格はないからね。家賃も払わなければならないし」

「そうね」

「ただ、行くとなったら、やってみたいことがあるのだ。ドイツの福祉事情を書いて、自分が知っている人たちや友人たちに定期的に発行したいのだ。それと、福祉関係の人が日本から来たら、その方面の関連施設など通訳を兼ねて案内したいのだ。日本とドイツの架け橋的なことをやってみたいな」

「それは、いい案ではないかしら」

「ただ、それで生活費が捻出できるかどうか」

「その際は、わたしが働くわ。心配しないでいいわよ。私たちは協力して、ミヒヤエルを育てていきましょう」

彼女は、さらに続けた。

「私たちがドイツに引っ越したら、すぐ彼を特別支援学校に入れるわ。今から学校当局に連絡しておくわ」

それを聴き、テュービンゲンに移り住むことにしたのだった。

決心してから出発までの半年間、ドイツでの生活がどのようになっていくかの不安はなかった。むしろ、新しい地での挑戦だと思おうようになった。ただ、まだよく知らない義母との一緒の暮らしが、どのようになるかと少し気にはなった。が、不安を抱くほどではなかった。

第五話 三世代一緒に生活

今度の住いは、街の中心地に建っている五階建ての大きな石造りの家である。妻が、「四百五十年前に造られたのよ」と言ったことがあった。二階には、七十六歳の義母、三階には私たち三人が住むようになった。四階と五階には他の家族が暮らしていた。

住みはじめてから、三ヶ月が経った時だった。彼女が、「ドイツではわたしが仕事をす
るわ」と主張したので、それを受け入れ、私が家事と子供の世話をするようになった。

主夫をしながら、時間があると、福祉に関するミニ情報誌を日本の知友たちに、定期的
に送る活動もするようになった。また、日本から福祉関係の人たちが来ると、こちらの
高齢者ホームや障がある人たちが暮らしている施設などを、案内することもはじめた。
二年が過ぎたある日の午後のことだった。ミヒヤエルが一人で家から百五十メートル離
れたパン屋に、夕食のパンを買いに出かけたが、十分しても戻ってこない。二十分過ぎて
も帰ってこない。心配になり、パン屋に行った。

「息子が、パンを買いに来ませんでしたか」

「あれ、ミヒヤエル君なら、もう十五分も前に帰りましたよ」

いつもの若い娘が、不思議そうな顔で答えた。

「おかしいな。家にまだ戻ってないので」

「彼なら、店から出て、マルトクのほうへ向かいましたよ」

急いで広場に行ったが、彼の姿を見つけない。その周辺をしばらく捜し続
けたが、発見できない。ひよっとしたら、家に帰っているかもしれないと思い、戻ること
にした。

居間に入ると、ソファーに浅く腰かけていた義母が立ち上がった。

「ミヒヤエルはいましたか」

「いいえ、どこにもいないのです。パンを買って、店から出たのですが」

義母は、心配そうな顔つきで窓辺に寄って通りを見た。その姿を目にしてから、妻の職
場に電話をかけようとした。が、もう一度マルトク広場の周辺を探し回ってみようと思い、
義母に、

「ミヒヤエルを捜してきます。どこからか、連絡が入るかもしれませんが、電話番号をお
願いします」

と言ってから、外に出た。

二十分ほど彼がいそうなところを歩き廻ったが、姿を見つけない。仕方な
く、家に戻ることにした。

居間に入ってから、妻に電話をかけ、ミヒヤエルが帰ってこないことを話すと、「わた
しから、警察に連絡するわ。すぐそちらへ行くわ」と声を上げた。

十分後、自転車に乗って、彼女がハアハアと息を切らしながら家に戻ってきた。事の経
緯を詳しく話すと、「自転車で、彼を見つけ出すわ」と言ってから、彼女は家から出た。
私も、再び外に出ることにした。

捜し歩いている間、頭に浮かんでくるのは、彼が車に撥ねられて今頃どこかの病院に運
ばれているのではないだろうか、ネッカー川に落ちたのではないだろうか、誰かに連れ去
られたのではないだろうか、バスに乗って遠くまで行ってしまったのではないだろうかと
いう暗いことばかりである。

ミヒヤエルはこの街に大分慣れてきたので、将来一人でパン屋へ行き、パンを買ってく
ることができるようにと半年前から訓練をしていたところだった。今まで四回試みて、成
功していたのに、今回はどうしたことか、戻ってこない。

三十分以上も歩き廻ったが、彼を見つけてことができなかった。仕方なく、家に引き返すと、妻と義母とが落ち着かない表情で立っていた。その二人に、

「どこへ行ってしまったのだろうか？」

と言うと、妻が落ち着きのない声を出した。

「ミヒヤエルが街のなかで迷子になったのは、今回で三度目になるわね。今までは、すぐ見つけたのに。あの子、どこへ行ったのかしら。もう三時間が過ぎたわね」

「警察からの連絡を待つしかないな」

「そうね。でも、もう一度を捜してくるわ」

そう声を出して、妻は再び自転車に乗って彼を見つけ出そうとして外に出た。私も、車で郊外を捜すことにした。車で見つけることは、ほとんど期待できなかったが、居ても立ってもいられなかったからである。

三十分してから家に帰ったが、どこからも連絡が入っていなかった。妻も戻ってきた。日は少しずつ傾き、夕闇が広がりはじめていた。春になったとはいえ、夜空の下はまだ寒い。私たち三人は、受話器に目を注ぎ続けた。

一時間が過ぎた。重い空気が流れ出した。と、電話のベルが、「リンリン」と鳴り響いた。私たちはお互い目を見交わした。

妻が受話器を取った。

「ハイ、ハイ、そうですか。でも、まだ発見できないですね。パトカーは一台ではなく、数台で捜しているんですね。私たちも、そちらへ行きましょうか」

私と義母は、受話器を持っている彼女を見つめた。

「ええ、わかりました。では、家で連絡を待ちます」

妻はそう言うてから、受話器を置いた。バスの車掌がミヒヤエルらしき子を街の郊外で降ろしたとの通報が警察に入り、その周辺を捜索しているとの知らせだった。

そのところへ車で行こうとしたが、妻が警察の連絡を待ったほうがよいと言ったので、それに従った。

二十分が過ぎた時だった。再び、「リンリン」と鳴った。

妻が受話器を取った。

「見つけたのですね。わかりました。今そちらへ向きます」

義母を家に残して、妻と一緒に車で警察署へ走った。あたりはもう暗い。車中、私たちはほとんど話をせずに、「よかった、よかった」とお互いに数回言っただけである。極度の心配から解き放された安堵感から、このような時は、そのことばしか出てこなかった。十分もしないで警察署に到着し、入口のインターホーンで、私たちが来たことを告げると、厚いガラス戸が開き、係りの人が私たちをミヒヤエルのいる部屋に導いてくれた。

ドアを開けると、長椅子に腰かけていたミヒヤエルがこちらを見た。妻が足早で彼のところに寄ると、

「ママ、ママ」

と声を発し、手に持っているパンの袋を指差した。寒いところにいたのか、鼻水が出ていた。その彼を、妻は体全体で包んだ。

警察官が事情を話し出した。バスに乗って終点で降りた彼は、森の入り口付近をブラブラと歩いていたらしい。もし、森のなかに足を踏み入っていたら、見つけ出すのが難しか

つただろうと語った。

家に戻ると、義母が待っていた。ミヒヤエルはおばあさんの姿を見るや、大きな声を出して駆け寄った。

「おばあさん、おばあさん」

「どこにいたの？」

優しい眼差しで、義母は彼を抱いた。ミヒヤエルはおばあさんの胸に顔を当て、にっこり笑い返した。

少しすると、義母が私たち三人に、

「お腹が空いたでしょう。今日は、わたしが夕食の支度をしましたよ」

と言ってから、キッチンへ向った。居間のテーブルには、彼女が用意したお皿がすでに並べられてあった。

ジャガイモスープの鍋を持って、義母が居間に入ってくると、ミヒヤエルは今までのことはすっかり忘れてしまったかのように、にこにこ顔となった。

湯気が昇っているスープとパンを前にしての四人の夕食となった。

妻がスープを飲みながら、

「ミヒヤエルが買ってきた今日のパンは、何か特別な味がするわね。苦かったり、甘かったり、複雑な味だわ」

と言うと、義母が、

「そうね。でも、これを飲んだら、明日はまた新たな一日のはじまりとなりますね」

と、声をいつもよりも高くして言った。その彼女に、

「夕食を作ってくれて、ありがとうございます」

とお礼をのべると、七十八歳の義母は微笑んだ。

昨日の迷子の出来事を忘れたかのように、ミヒヤエルは朝食を摂ってから特別支援学校へ行った。

午後の授業を終えて帰宅すると、勢いよく木の階段を上り、おばあさんの部屋に入ったミヒヤエル。その彼に、義母が、

「おかえり、ミヒヤエル。今日はどうだったの？」

と、訊いた。彼は、「うん」と答え、そのあとカバンを床に下ろし、テーブルに着いた。

彼の目の前には、おばあさんがいつも用意したパンとジュースが置いてある。早速、そのパンを食べようとしたので、私が、「先ず、手を洗いなさい」と言うと、彼はバスルームへ行き、洗った手を見せてから、パンを口に入れはじめた。

その姿を目にしたがら、義母の部屋から出た。

三十分ほどすると、ミヒヤエルが満足した表情で階段を上ってきた。それを待って、夕食のおかずを買うために、彼と一緒に外に出た。今晚の献立は、彼と義母が好きなマールポ―豆腐である。

近くの肉屋に行くと、いつもの娘さんが彼にハム一枚を渡した。それを手にして、「ンケ」と言った。ンケとはダンケ「ありがとう」のことで、日本での七年間の生活は、彼のドイツ語発達にかなりのマイナスとなっていた。娘さんが、「学校はどうだった？」と訊くと、ミヒヤエルは、「うん」と答えた。まだ、単語を二語以上並べて言うことができない彼だった。

買物を終えてから、いつものようにキッチンに立った。ドイツの夕食はパンにハム、チーズをのせ、火を通さないのが一般的である。しかし、日本ではいつも暖かいものを食べていたので、夕食も常に湯気が出る料理を作っていた。

一時間ほどで料理ができ上がり、居間に入ると、ミヒヤエルとおばあさんがボール投げをしていた。義母は腰を折り曲げて、ボールを取っては彼に投げ返していた。ミヒヤエルは不器用なこともあって、おばあさんのところにスポンジのボールがなかなか届かない。その二人の様子を見ながら、

「おばあさんのところに、しっかり投げなさい」

と彼に促すと、義母は笑いながら、

「いいから、いいから」

と声を出しながら、柔らかいボールを床から拾っては孫に投げ返している。相当な忍耐力がないと、ミヒヤエルの相手はできないだろう。その彼に、

「料理ができたので、ボール投げは止めにして、お皿をテーブルの上に置くように」

と言うと、おばあさんと一緒に食器を築きそうに並べはじめた。

妻がテュービンゲン駅でのミッシヨンの仕事を終えて家に戻ったところで、賑やかな夕餉となった。

妻の仕事は、テュービンゲン駅構内で助けを必要としている高齢者やハンデイのある人たちに手を貸したり、時にはカバンを持つてあげたりすることが勤務だった。その他にも、ホームレスの人やお腹を空かしている人に、駅内にあるミッシオン室でスープやコーヒーなどを出したりもする。とにかく、駅構内にいる困った人たちを援助、世話するのが彼女の務めだった。

この駅ミッシオンは教会組織が運営しているもので、妻は常に生き生きと働いていた。人の助けを自ら進んでするこの仕事に、彼女はよろこびを感じていた。「美味しい、美味しい」と声を出しながら、妻は今日一日の仕事内容を話し出した。

テーブルを囲んでの夕食が終わり、いつものように四人でゲームをすることになった。ミヒヤエルは小さい時分から、ゲームをよくしていたので、ゲーム遊びが好きだった。おばあさんがまるで恋人でもあるかのように、隣に座る彼だった。

義母はミヒヤエルと二人でよくゲームをしたり、ボール投げをしたり、また、絵本を読み聞かせ、孫の彼という時間が楽しそうで、いつも和んだ顔をしていた。そのような姿を見ていると、この人はなんて素晴らしい人なのだろうと次第に思うようになった。

しかし、ここに至るまでの間、義母のことがいくらか気になった時期があった。彼女と住みはじめた頃、三世代同居の難しさを味わったのだ。

あれはテュービンゲンに住んで、五ヶ月が過ぎたある日のことだった。家を無断で出たあと、妻に電話をかけた。彼女は、直ぐに電話口に出た。

「あなた、今どこにいるの？」

「知人宅にいる」

「急に家を出て行ったので、心配だわ」

「……」

「ねえ、早く家に帰ってきて！ あなたが家を出た理由は、大体わかるわ。お互い胸を開いて話し合いましよ。もし必要ならば、母も一緒に」

「あと二日ここにいて、考えてみる」

ミヒヤエルの様子を聴いてから受話器を置いた。そのあと、妻が言った、「ねえ、早く帰って来て！」のことが耳から離れなかった。それに、土浦でパーキンソン病とリュウマチの母を二年間看てくれた彼女の姿も浮かんだ。

ひとりではお風呂に入れない細身の母を、抱くようにして一緒に入浴し、慣れぬ日本食を母に作り、異国でハンデイのある子を抱え、よくやってくれた彼女。当時、三世代同居の暮らしは、大変だったことは確かだ。グチ一つ言わなかった妻に、再びハツとさせられた。

二日後、彼女と長時間に亘って話し合った結果、今まで一日の三食とも義母と一緒にだったが、朝食だけは、これからは義母ひとりで二階の自分の部屋で摂ることになった。

確かに、三世代一緒の暮らしはそう容易ではなかった。でも、それ以上に、主夫としての存在に意味を見出していなかった自分を、妻との話し合いで知ったのだった。これはなんとかしないといけない、自分自身が生き生き暮らすようにしなければならぬと思いい、家に戻った。

それからというものの、主夫の活動に積極的に意味を見出そうとした。と、毎日料理や洗濯や子育てをしていることが、ゴミや食物や健康の問題、それに自然環境問題にも通じていると思うようになった。家での活動は人間が生きていくうえで、根本的な活動だと気がついたのである。と同時に、義母のことはまったく気にならなくなった。反対に、彼女の私たちへの心遣いが伝わってきて、一緒にいられることに感謝をはじめたのだった。

そのような生活をしていく中で、社会および地域と結びついた自分を発見し、新たな意識を持つて、主夫としての活動を続け、それを一層深めるようとした。そうすると、自分は家族・社会・自然、それに他者との繋がりのなかで暮らしているのを知り、心が満ちてくるようになったのである。

第六話 地域の一員となる

ミヒヤエルが学校に通い出して、一年が過ぎた時だった。居間のソファアに座ってコーヒーを飲んでいる妻に話した。

「彼のクラスには、彼以外に三人の子がいて、学習能力の差もかなりあるね。だからだろうな、彼らはいつも一緒になって授業を受けてないよね。たとえば、読み書きでも、まだその段階に達していない子は下のクラスへ。とくにできる子は、上のクラスへ。それに言語治療士が、一対一で発音訓練を指導しているよね。それぞれの子供の能力に応じて、個別的に学習が行われているのだろうな。それができるのも、彼のクラスには、三人の先生がいて、週二十八時間の労働だし、土曜と日曜、また、週に一日は自由に休みを取っているからだろうな。何か、ゆったりと教えているように思えるね」

彼女は肯きながら、聴いていた。私たち親は、彼が通っている特別支援学校に満足していた。

日本にいた時、ミヒヤエルを地域の幼稚園へ通わせた経験があった私たちだったので、彼を担当している先生に、一般の地域学校へ息子を週に何回か通わせたいと願いを出して

いた。

その旨あって、彼の学校と地域学校の先生二人が話し合い、週に二回だけ、地域学校の午前中の授業に、二年間だけ参加することが可能となった。

私たち夫婦は、そのことをとてもよろこんだ。実現可能は難しいと思っていたからだった。それというのも、この州では、ハンディを有す子供が地域学校で教育を受けることは、今まで行われていなかったからである。

この地域学校の父兄会に招かれた時のことだった。集まった親たちの前で語った。

「ハンディがあるなしに拘わらず、子供同士が、お互いに遊び学ぶことは現在だけでなく、将来も意義があることです。今後、この州の学校当局が、どのような判断を下していくのかわかりませんが、ぜひ統合教育を進めてほしいのです。ただ、残念なのは、週二日の午前中だけで、果たして真の交流ができるでしょうか。先生方も、中途半端でやりづらいのではないのでしょうか。二年間で終えるのはさびしいことですが、その期間、息子は地域に住む子供たちと知り合いになれるし、お互い関係を持てることにもなれるので、親としては、そのことがうれしいのです。通りで息子に会ったら、ぜひ声をかけてやってください」大勢の人の前で、ドイツ語で語るのが苦手だったが、息子のことになるかと勇気が出るのだった。そのあと、妻も同じようなことを語った。

地域学校に週二回ほど通っていた時だった。私たち夫婦は市内にある図書館で、布の絵本展を開いた。

日本で暮らしていた時、布の絵本を作っている横浜の布のグループとコンタクトを持っていたことがあった。そのグループからミヒヤエルにと、三十種類以上の布の絵本が送られてきたことがあった。それを、妻は市内に住む子供たちにも見せようとしたのだった。また、彼女が日本で暮らしていた時分に集めた、二百冊以上の日本の絵本も一緒に展示したのである。

二ヶ月間の展示中、多くの子供たちと、その親たちが見学に来た。もちろん、ミヒヤエルが通うようになった地域学校の子供たちも来て、一緒になってその布の絵本で遊んだりもしていた。

布の絵本のようなものはドイツにはなかったので、皆、驚きの目を向け、賞賛していた。絵本に書かれた日本語を、妻はドイツ語に訳しておいたので、わかり易かったようだ。

ミヒヤエルは学校の時間だけではなく、このような機会を通して近所の子供たちと知り合いになっていった。

この絵本展以後、テュービンゲン近郊の特別支援学校や地域学校からも展示の要望があり、貸す出すことにもなった。日本のお母さんたちが作った布の絵本に、私たち夫婦はもちろん、ミヒヤエルも誇りを感じたりしたのだった。これも、インテグレーションの一つだと思った。

また、テュービンゲンでは、毎夏、六歳から十五歳までの子供たち四百名を前期と後期の三週間にわけて毎朝八時半から夕方六時半まで、一グループ二十名前後で近くの森のなかで泥んこになって遊ばせるプログラムがあった。ミヒヤエルも、もちろん、それに参加していた。

そのようなこともあって、ミヒヤエルが近くに住んでいる彼らと通りで会うと、挨拶をしてくれるようにもなった。それに、知り合った彼らとその親たちが私たちの家に来て、

一緒に食事をするようになっていった。

地域学校に通い出して二年が過ぎようとしていた頃、再び、特別支援学校と地域学校の二人の先生が話し合い、さらに一年間延長となったのである。私たち夫婦はよろこんだ。学校だけではなく、地域も動き出したのである。

市内に住む知的ハンディがある人たち五十名と、市長と数名の市議員との話し合いがある日もあった。

その話し合いの前日、妻が私に話してくれた。

「テュービンゲンの市会議員は六十四名で、そのうち女性は三分の一。それに、ほとんどの議員は、何らかの職業を持っているのよ。学校の先生とか弁護士とか医者とか。とにかく、彼らには、議員としての給料が無いのよ」

「給料がない？」

「そうなの。でも、週に一回開かれる市議会と、各種専門委員会に出ると、手当として四千円を得るけれど。ただ、市長は給料をもらえるわよ」

「それは、驚きだな。まさに市民による政治なのだ」

彼女が語る内容を耳を傾け続けた。

翌日、私たち夫婦は息子を連れて、マルクト広場前に建つ大きな市庁舎に行き、大会議室に入った。と、妻が、「前に座っている人たちは、市長と議員だわ。福祉事務所の所長さんもいるわね」と言った。いつもは議員たちが座っている席に、私たち三人も腰かけた。少しすると、五十名のうちの一人が立ち上がり、前もってノートに書いた文をゆつくりと読み出した。

「市内の真ん中に、ハンディのある人も、ない人も常に出会えるようなカフェー店を設けてほしい。市がその店の家賃を払い、残りの費用は私たちが払い、その店を運営したい」それを聞いた福祉事務所の人が、

「そのようなカフェー店は隣の街にもあって、多くの出会いの場ともなっているし、テュービンゲンでも、それを実現するようにします」

と、応えた。続いて、ミヒヤエルよりも十歳くらい上の女の人が、マイクの前ではっきりとした声を出して、自分で書いた文を読み上げた。

「わたしには、友人が一人もいません。たまには街へ出て、レストランにも行きたい。テレビばかりでは退屈です。両親は年をとってきているので、一緒には行かれませんか。時々、兄とは散歩しますが、そうすると、道行く人は、わたしをじっと見つめます。歩き方がおかしいから。周囲の人たちから変な目で見られたりするくらいなら、家にいたほうがいいのかも。それでも、街へ出たいのです。そのようなわたしに、だれか付き添ってくれる人がいるとうれしいのです。そのような人が出てくるのを待っています。市長は、私たちも正常な人であると、全ての人に言ってほしいのです」

それを聞いた市長は、立ち上がった。

「ここにはいろいろな人が住んでいます。もしそうでなかったら、街は退屈になってしまいます。もちろん、ここにいる皆さんも、この街に所属しています。私が正常で、皆さんが正常でないとだれも言えません」

今度は、二十歳くらいの人がしゃべり出した。

「今、付き合っている彼と結婚したいの。この市庁舎の戸籍室で結婚できますか。もし結

婚したら、だれも私たちを離すことはできないわ」

それに対して、市長が応えた。

「結婚するには、経済的なことも考えねばならないでしょう。そのことを考えた上で必要な書類を揃え、戸籍係に提出してみたらどうですか」

次に、四十歳くらいの人が話し出した。

「僕は夕方、それに週末にも友人の家を訪れたいが、市内以外の区域では、その時間帯は、バスが走っていないので困る。各路線バスは色分けをしてわかり易くしてほしい。また、時刻表は、文字が小さ過ぎる」

それにたいして、一人の議員が立ち上がった。

「昨年、福祉センター前にもバス停を設けました。確かに時刻表の文字は小さく、読みづらいですね。もう少し大きくするように働きかけてみます」

次に、ある人がマイクを持った。

「自分が勤めている作業所には、バス停がないので、作ってほしい。お願いします」

議員と市長は背きながら、彼の要望を手帳に書いていた。

少しすると、街のなかでよく見かける、車イスにのった人が語り出した。

「僕は市議会のなかで働き、街がつくる規則、とくに、バス運行についての協力がしたい。僕は、どこに何が欠けているかを知っているから。しかし、僕は字を読むことができない。それでも協力可能ですか。それから、市議会のなかで、私たちを代表している議員はいますか」

一人の議員が、立ち上がった。

「議会では多くの書類があつて、字が読めないと、議会のなかで働くことは難しいかもしれません。ただ、皆さんが市議員に電話して、皆さんの要望なりを伝えれば、その議員がこの議会で話をするでしょう。ハンデイのある人たちを代表している議員は、今はいません」

次に、二人が同時に立ち上がり、そのうちの付き添いである人が、紙に書いた文を読み上げた。

「市内の真ん中に、少人数制のグループホームがあるとうれしい。そうすれば、バスでも電車でも容易に乗れるし、スーパーマーケットやパン屋、それに郵便局へ一人でも行け、自立できるのだから。また、通日も、車椅子で容易に動けるようにしてほしい。それに、道路標識などは目立ち易いシンボリックなものにしてほしい」

その他にも、いくつかの要望が出た。

二時間の話し合いの最後に、市長がのべた。

「皆さんに何かの問題が生じたら、新聞などの市民の声欄に、皆さんの要望を訴えるようにしてください。だれかが皆さんのところへ行き、皆さんの願いを聞き入れるまで待つてはいけません」

市長も議員たちも、彼らの言うことに耳を傾けていた。とても良い対話時間となっていた。

次の日、この話し合いの記事と写真が、新聞に大きく載った。多くの人たちが読んだことだろう。

地域のなかで、彼らの生活ができる限り通常の生活条件に近い状態で営まれるように願

っている私と妻。彼らが地域のなかで暮らしていく中で、一人ひとりの命が光り輝くような社会となっていくようにしなければと思うからだった。

ハンデイのある人も、自分の思いを主張しなければならぬ。地域のなかで、楽しく暮らすためにも。

ミヒヤエルは皆の前で何も言わなかったが、毎日の暮らしのなかで、自分自身を出していると言えるだろう。

買物の際にもそれが言える。学校のない日は、彼は一人で家から百五十メートル先のパン屋に行き、焼きたてのパンを十個買ってきて、それを妻に渡す。と、彼女は、「ごころうさん」といつも笑顔で応える。そうすると、よろこんだ顔となるミヒヤエルである。

その他にも、学校のある日は、四時に家に帰るので、私と買物に出かける。

「今日はマーボー豆腐にするよ」と言うと、二人で自然食料店に行き、彼が豆腐を見つけ、それをレジに持っていく。お金の勘定はできない彼なので、私が支払い、つり銭は彼がもらう。

次は、いつも行く肉屋で豚挽き肉を買う。ミヒヤエルはこの店の馴染み客となっているので、娘さんから必ずハム一枚をもらう。

また、街のなかにあるスーパーで、私がレジでお金を払っている間、彼はレジ係の人からいつもアメ玉を二つ、三つももらう。でも、彼はアメやチョコレートはあまり好きでない彼なので、それを私にくれるのだった。

甘いものが好きな自分は、歯が痛くなると近くの歯医者のところによく行くが、彼は年に二回の検診でいつも虫歯がなく、褒められるのである。

彼を連れて、時々テュービンゲン駅から出る電車に乗り、隣の駅まで二人で買物に行く時もある。ハンデイのある人たちが所持している手帳を持っているので、付き添う人はドイツ国内の乗物なら、どこに行こうと無料なのである。

車内に車掌が来ると、ミヒヤエルは自分の手帳を見せる。と、車掌はもう彼のことを知っているので、検札をしないこともある。その時は、車掌のあとを追って、自分の手帳を見せる彼だった。

買物だけではなく、休暇もよるこびの時間となるのである。

第七話 夏はアルプスへ

助手席に座っていた妻が、コップに入ったリンゴジュースを私に手渡しながら、

「テュービンゲンを発って、もう五時間も走っているわね。あとのくらいで着くの？」

と、訊いた。

「一時間半はかかるだろう」

そう答えてから、ジュースを一気に飲んだ。喉もとに心地良さが走った。

車窓からは、標高二千メートル以上もある山々の頂上付近に張り付いている、いくつかの小さな雪渓がくつきりと望める。それを眺めながら、彼女は体を半ひねりながら、

「あれはウサギのようね。その隣はウシのようね」

と、後席に座っているミヒヤエルに指差した。

高速道路を出てからしばらく走っていると、土道となった。野に咲く赤や白や黄色の花々が、顔を見せはじめ出した。

それら花々に目を向け続けていた妻に、話しかけた。

「今年は、いつもよりも早い山歩きとなったね。この六月下旬は山が開く時期で、一斉に花が咲きはじめるよ」

「そうね。今年の山登りは、わたしの希望が叶ってうれしいわ。以前から、高山植物の花が咲き乱れる時期に、山に入りたかったから。胸がワクワクしているわ」

標高九九四メートルの南チロルのザイス村に到着する。早速、これから九日間宿泊するところを斡旋してもらおうと、村の観光所に行った。二つの休暇用貸住宅を勧めてくれたので、それらを見てから決めることにした。

最初の貸住宅は、村の真ん中に建っていた。買い物には便利だが、一人一日四千五百円である。あまりに高い額なので、貸主に、

「もう少し、安くしてくれませんか」

とお願いとすると、三千五百円まで引き下げてくれた。しかし、それでも高いと思い、ここはやめにして、次の貸住宅へ行った。

村外れの森に入ったところに、それは建っていた。農婦らしき人が、いかにも人の良さそうな顔で私たち三人を迎えてくれる。

住居内は広く、三つの部屋とキッチン付きで一人千六百円である。それに、見晴らしのよいバルコニーがついている。迷わずにここに決めた。

翌朝ベッドで目が覚め、腕時計をのぞくと、ちょうど五時である。至るところから、小鳥たちの鳴く声が聞こえてくる。それも、ピーピー、キューロキューロ、カッコーカッコー、ヒューヒューヒューヒと色々だ。なんと明るい音色なのだろう。耳を傾け続けた。

妻がベッドの上で、

「鳥たちがにぎやかに囀っているわね」

と、声を出した。

「さつきから聞いているのだけど、鳥たちの大合唱だ。森のなかとはいえ、こんなにも鳴き交わしているのを今まで耳にしたことがないよ」

「あら、カッコー鳥の呼ぶ声だわ」

私たちは聞き続けた。しばらくすると、彼女がベッドから身を起こし、寝室の窓を開けて外に出た。と、部屋内に冷たい新鮮な大気が漂ってきた。

その空気を吸いながら、私もバルコニーに出た。

目の前には、何本もの大きな木々が立ち並んでいる。そのうちのひと際高い松の梢に、カササギが止まって尾を振りながら鳴いているのが見えた。他の木々にも、様々な鳥たちが小枝に止まって囀っている。

ミヒヤエルもバルコニーに出てきた。

「パ、パ、ママ」

驚いたような声を上げて、木々を指差した。私たちは、ジャマ姿のまま、小鳥たちの声を聞き続けた。まるでコンサートのようだ。

朝食を済ませてから、昼食用のおにぎりを作り、ヨーロツパのなかで一番広いとされる緑の高原地サイサーアルム（標高一八〇〇メートル）へ向かった。

車のなかで、妻が話しかけてきた。

「どのような花が咲いているのかしら。天気は良いし、歩くのが楽しみだわ。あなたも花の名前をいくらか覚えたでしょ？」

「十年以上も毎年アルプスに来て、きみから教わっているので、だいぶ覚えたよ」

そう応えながら、薄暗い針葉樹の森をゆっくりと走り続けた。

五分ほどすると、急に目の前が明るくなって、草の匂いが頻りに漂いはじめてきた。車が走れるのはここまでだ。

車を降りてから、三人とも小さなリュックサックを背負って歩き出した。と、今までうつすらと立ち込めていた朝霧が飛び散っていき、青空が見え出し始める。深く息を吸うと、山の新鮮な大気が体中に流れ込んでくるのがわかり、爽やかな気分となってくるのだった。三十分ほど歩いていると、もう緑の大草原のなかである。緩やかな曲線を描いている小径を進んだ。

草原の奥のほうに目をやると、ドロミテ特有のマグネシウムを含んだ怪奇的な大岩峰群が天を突くように連なっているのが望める。どの峰々も、三千メートルの高さはあるだろう。

前を歩いていた妻が、足元に咲いている色とりどりの花たちを見ながら、

「アネモス、トリカブト、キンバイソウ、アザミ……」

と、声を上げている。彼女は立ち止まり、私に、

「あなた、見てよ。なんて澄んだ色なのでしょう」

と、言った。そこに目を落とすと、鮮やかな青紫色した身丈七センチほどのリンドウの花が咲いていた。まわりを見回すと、高山植物が競い合うように咲き乱れているのである。あたり一面が花々で膨れ上がっていて、その上を白や黄色の模様をした蝶が飛び交っている。花に優しく迎えられたような気持ちになっってくるのだった。

柔らかい土径を踏んでいると、山靴が沈み、体が浮いてくる。耳を澄ますと、牛のカウベルの音色が風に乗って聞こえる。見渡すかぎりの大草原である。視界は緑と花と岩とで独占しているのである。まるで絵本に出てくる色彩豊かな光景だ。

ミヒヤエルは、道行く人とすれ違うたびに、「モルゲン（おはよう）」と声をかけていた。相手からは、イタリア語でボンジョルノ、英語でグッドモーニング、それにフランス語、ドイツ語の挨拶のことばが返ってきた。それが愉快そうで、彼は笑顔を浮かべながら歩いていた。

私たちは限りなく続く径を、休みをとっては歩き続けていた。

夕方の五時過ぎに宿に戻り、棒のようになった足をソファに伸ばすと、外で鳴いている小鳥たちの済んだ声が聞こえてくる。自分も彼らと一緒に歌っているような気持ちになっってくるのである。

しばらくして、バルコニーに出て、長椅子に身を横たえた。すると、沈みかけた朱色の陽が、松の樹間からキラッキラッと射し込んでくる。その光を浴びながら、

「ああ、すべてがここにある。わたしのすべてがここに、解放そのものだ」

と、つぶやいた。目の前に咲いている、バルコニーに植えられているゼラニウムやペゴニアの花が輝いている。眩しいほどだ。

私たちは、広々としたこのザイサーアルムの草原に咲く花々に魅せられ、三日間澄み切

った青空の下、毎日十キロほど歩き回っていた。

そのあとの二日間は雷のともなう雨だったので、日中は部屋のなかでゲームをしたり、買物に出かけたりして過ごしていた。雷が時々鳴り響くと、ミヒヤエルは怖そうな表情を浮かべた。その彼に言った。

「明日は、晴れるぞ。きっと晴れる。そしたら、また山歩きだ」

降り続いた雨も止み、期待していたような青空の下、車を三十分走らせ、ローゼンガルテンの山麓に到着する。

これからが本格的な山登りだ。目の前には、薄ねずみ色をしたいくつもの険しい岩峰が、角を立てたように天に向かって聳え立っている。数日前に目にしたお花畑の山域とは、まったく違う光景だ。

先ず、リフトに乗って、標高二、三〇〇メートルまで行き、岩場の狭い道を南へ向かって登り出した。

周囲には樹木はなく、岩だらけである。その岩場の間には、雪がこびりついている。

朝日は反対側の岩壁を照射しているので、こちら側は日陰である。吐く息は白く、立ち止まると、ヤッケを着ていても、身震いがするほどの寒さだ。

二十分もすると、体が少しずつ暖かくなってくる。足もとに目を落とすと、ピンク色の身丈二センチほどの小さなシレネとアカウリスの花が、大きな石の上に張りついたように密集して咲いているのが見えた。草原に咲く花よりも、このような険しい径を踏みながら、ふと出遭う花により魅せられてしまう。花と交差する瞬間、

「ああ、美しい」

と、感嘆の声が自然と漏れるのである。高山に咲く花は、身丈が低く葉も小さいが、品と気高さを備え、なによりも清楚さがあって、可憐なのである。

陽が次第に高く昇るにつれて、前に立つ岩壁に朝日が照りはじめてくる。

三十分も歩いていると、赤い壁と呼ばれる直下に立った。凄みのある岩だ。直立するこの大岩壁に、落日の陽が射せば、赤みを帯びるといふ。その残照は、さぞ目を楽しませてくれることだろう。

下り道となった。今までの岩道が土道に変わり、何種類もの高山植物が目飛び込んでくる。妻はしばしば歩を止めては、

「これは、何々よ」

と、花の名前を言いながら歩いていた。

さらに下って行くと、道端に浮いていた小石に足をとられ、山側の斜面に尻もちをついてしまった。

「あつ、こんなところにエーデルワイスが咲いているぞ」

「えっ、本当なの？」

妻が駆け寄ってきた。

「自生のは初めてだわ。人工栽培で、何回も目にしたことがあったけれど」

「それにしても、ここで出遭うとは」

私と妻は、白く咲いている四つのエーデルワイスにしばらく目を注ぎ続けた。ミヒヤエルはその私たちの姿を見て、にこにこ顔である。

再び下り道を進んで行くと、松と樅の樹海のなかに入った。今までの暑さから、急に涼しくなった。樹と土の帯びた大気が肌にとっても心地良い。エーデルワイスの歌が、口から自然と出てくるのだった。

翌朝、寢室のカーテンを引くと、昨日と同様に雲一つない青空である。

「アルペンローゼが誇るように咲いているところへもう行ったの？」

と宿の女主人が言ったので、そこへ行くことにした。

車で四十分走り、リフトに乗って高さ二、二五〇メートルで降り、直ぐに歩き出した。正面には、巨大でどっしりとしたセラ岩峰群の大岩山（三、一五二メートル）が望め、右手奥には、急峻な岩山ラングコツヘル（三、一三八メートル）が雄々しく聳え立っている。まるで大巨岩が、突如平たい地盤を突き破って出てきたかのような格好である。愕きのある山容だ。

壮大な景色を眺めながら、私たち三人はゆるやかな草原の尾根道を歩いていた。足もとには、身丈十五センチの黄色い丸い花のキンバイ草と、色鮮やかな青紫色をしたリンドウ、それに小さなアザミなどが競い誇るかのように咲いている。花の匂いが漂うなか、歩き続けた。

一時間ほど進んでいると、真っ赤な色をしたつつじ科の花であるアルペンローゼの群生が見え出した。それが百メートル以上も赤い帯状に続いているのである。なんと深みのある色彩なのだろう。周囲には、登山者の姿はない。静寂そのものである。

さらに行くと、松と樅の樹で覆われた森のなかに入った。すると、急に薄暗くなった。今までの強い日差しから解放されて、肌がよろこんでいるのがわかる。木の合間に、素早く飛ぶ何かが走った。

「あ！ 鹿だ。それも二頭だ」

うしろにいた妻に、声を低くして言った。

「ええ、わたしも見たわ」

鹿は私たちの行く先を案内するかのように、時々姿を現しては消えていった。

さらに森の奥へ進んでいくと、無人の小さな丸太小屋が目に入った。昼食を摂るにはいいところだ。おにぎりを食べることにした。

小屋の前は直径三十メートルの草原が広がっていて、色々な花が咲いている。その向こうには、白い雪で覆われた三千メートル級の大岩山が聳え立っている。近くからは沢の水音が聞こえ、それがいつそう静けさを呼ぶのである。

柔らかい土の上に座って、朝握ってきたかつおぶしと梅干入りのおにぎりを食べ出した。私たち三人だった。

それが終わってから、三人とも草の上に体を横たえた。

上を見ると、青い空に、ポツカリと白い雲が浮いていた。仰向けになった姿勢から眺める花たちは、今までとは違った姿に映るのである。その上で、蝶たちが花から花へと飛び廻っている。風に乗って、松ヤニの甘酸っぱい匂いが漂い、自分の存在さえも、時の流れさえも忘れ、空っぽの心となっていくのだった。

一時間半近くが過ぎてから、再び歩き出した。

今度は今までとは違った急な下り道となった。地図にも記されていない健脚向きの山道である。ミヒヤエルの手を取って慎重に足を運んだ。登山慣れした人がいないと、危険な

ところだ。とくに、枯れた松葉が地面に一センチほど積み重なっているので、足をとられやすい。妻は、怖がりではなかったが、

「早く、この下りを終えたいわ」

と、声を出しながら歩いていった。

ミヒヤエルの手を握りながら、一歩一歩足元をたしかめて下った。

十分の急傾斜の途中、妻は一回、ミヒヤエルは二回ほど転んだ。やっと緩やかな道に出た時は、三人とも笑顔で、「やった！」「やったね！」との声を上げながら、握手をしたのだった。

何も起こらなかったのもホッとした。登山者の姿がないこの山道で、急に雨に降られたらと思ったら、ぞつとした。恵まれたと感謝しなければならぬ。

八キロの尾根歩き、それに緊張した場面も何回もあったので宿に戻ると、疲れが急にでて、両足の筋肉が張って痛みも生じてくる。

夕食を済ませてから、三人ともシャワーを浴び、早々にベッドに潜り込んだ。

翌朝起きると、昨日の疲れがまだ溜まっているのがわかる。一日中、宿でのんびりと過ごすことになった。

最後の日となった。宿から歩いて十分ほどの丸太造りの山小屋風のレストランで食事を摂ることにした。今回の山旅で、初めての外食である。

中庭に置いてある分厚い木の丸いテーブルを囲んでの夕食だ。

妻が、ワイングラスを手をしながら、明るい声で、

「目の前のシュレーンの大きな岩山に、夕陽が射して美しいわ。岩壁が時間を追うことに、オレンジ色から淡い赤に変わり、今は濃い赤色になったわね。なんという色彩の演出なのでしょう」

と、言った。

「光が醸し出すスペクトルだ」

私と彼女は、グラスを重ねた。と、その音色があたり一面に響き渡っていった。

彼女がグラスを手をしながら、

「アルプスの三大花といわれている、エンチアンとエーデルワイス、それにアルペンローゼと出遭ったわ」

とにこやかな顔で言い、陽に焼けた顔にワイングラスを近づけた。満足そうな顔である。その彼女に、

「明日から、また、チュービンゲンでの生活になるね。ミヒヤエルは学校へ、きみは職場へ。わたしは主夫の活動だ。三人ともここでエネルギーを得て、戻るのだ」

と、言うと、彼女は、

「そうね。自然からエネルギーを得たわね」

と応えて、またワインを一口飲んだ。

「このような大自然のなかにいると、自分が素直になって、調和した、平和的な気持ちになるね」

「そうね、ありのままを出している彼のようになるわね」

彼女は、ミヒヤエルを見た。

「楽しかった？」

「ヤアー(ウン)」
と、笑顔で答えた彼だった。

第八話 冬は雪の森へ

昨夜から降り続けている雪で、車窓に映る景色は白一色である。高速道路に入ったと、どういうわけか、車の速度が時速百二十kmから百、八十、六十kmに落ち出した。アクセルをいくら踏んでも、一向にスピードが上がらない。妻が、

「変な臭いがしてこない」

と、こちらに顔を向けて言った。

速度が一段と落ちて、何かが焼けているような臭いが強くなってくる。焦りにも似た気持となった。こんなところで止まったら一大事だ。ギアを変え、アクセルを踏むが、テンポは下がる一方である。

時速三十kmとなった。五キロメートル先に休憩所の標識が目に入った。あそこまで辿り着きたい。ミヒヤエルも異常に気づき、前に体を乗り出すようにして「パパ、パパ」と声を上げ、妻は真顔でギアを変えたりしている私の動作を見ながら、「停まったほうがいいわ」

と、声高に言った。

しかし、ここで停車するわけにはいかない。緊急用ランプを点滅した。妻も私も、いのちに関わるような危機感を抱き出した。このまま走って、火でも噴いて爆発でもしたら……。

カタツムリのような動きになった。休憩所まであと四キロメートルはある。祈るような気持でハンドルを握り続けた。火薬のような臭いが、一段と鼻に突いてくる。今にも、車はパタリと止まりそうである。と、三十メートル先に車が四台くらい停まれそうなどころが見えた。あそこまでたどり着きたい。

エリア内に入った。モーターを止め、外に出て、ボンネットを開けたが、車に詳しくないのでわかるはずがない。再び座席に戻り、エンジンをかけた。モーターは回るのだが、車は動こうとはしない。

妻と話し合い、会員となっている自動車クラブADACに連絡することが、一番いいだろうとのことになった。が、私も妻も携帯電話を持っていない。周囲は、畑地が広がっているだけである。さて、困った。と、彼女が、

「わたしがアウトバーンを出て、どこかの人家から、ADACに電話を入れるわ。あなたとミヒヤエルは、ここで待っていて」

と声を出して、ヤツケを着てから雪の降るなかに消えた。

三十分が過ぎた。時速百五十km以上で走っている何台もの車が、私たちの横をヒューンヒューンうなるような音を出して飛ぶように走り過ぎて行く。そのたびに、車はグラグラと揺れた。彼らの車が少しでも触れたら、木っ端微塵となってしまいうだろう。ADACの救助車が早く来ることを願った。

五十分が過ぎた。妻はまだ戻って来ない。車内はモーターを切っているので、暖房は

効いていない。エンジンはかかるのだが、爆発でもしたらと思ひ、かけないでいた。外では雪が降り続けている。

ミヒヤエルと話をしていると、吐く息が白く見え出した。ふとバックミラーをのぞくと、何かが動くものが映った。妻だ。こちらへ向って歩いて来る。ミヒヤエルに、「ママが来たぞ」

と言うと、彼は笑顔になった。

雪を払いながら入ってくる彼女を迎えた。

「二キロ先の民家から電話をしたわ。A D A Cの車が来てくれるわ」そう言いながら、ティッシュで鼻をかんだ。

車内は震えるような冷たさである。私たちは、スキー帽を被り、毛糸のマフラーを首に巻きつけ、手袋を身につけて一刻も早くA D A Cの車が来るのを待った。

彼女はミヒヤエルに歌を聞かせていた。と、一台のパトカーが私たちの前で止まり、警察官が出てきた。二人とも腰のところに手をおき、すぐにでもピストルを抜けるような姿勢である。一人は車五メートル前で立ち、もう一人はこちらに歩み寄って来た。

「どうして、こんなところで停まっているのだ？」

厚着している私たち三人をじろじろとのぞきながら、不審そうな顔で言った。

私が今までの経緯を話していると、黄色の車がランプを点滅しながらうしろに止まった。A D A Cの車だ。警察官は、それを見て了解したらしく、その場から立ち去った。

こんどは黄色い服を着た人が近づいて来て、ボンネットを開けて点検をはじめた。

「ギアチェンジが壊れている。これで走るのは無理だ。レッカー車を呼ぶ必要がある。三十分したら、来てくれるだろう。しかし、ここに車を停めておくのは危険だ。次の休憩所まで引張るので、ハンドルの操作をしながらついてくるように」

高速道路上で、綱に引かれての時速八十kmの運転である。それも、雪の降るなかでの四キロメートルだ。休憩所に着くと、ハンドルを握っていた手の力が抜けたようになった。

自動車クラブの会員となっているので、ありがたいことにコストは無料である。一枚の紙にサインをするだけで済んだ。

レッカー車が来るまでには、まだ時間がある。モーターを回しても危険はないと知ったので、暖房を入れた。

「なんと言うことだ。クリスマスの日に」

「でも、ヒデジ、車が火を噴いたり、事故にならなかつたりしてよかつたわ。感謝しなければね」

私たちは、レッカー車が来るのを待ち続けた。

四十分が過ぎた頃だった。大型のレッカー車が来て、車はうしろに積まれ、私たち三人は運転者の後席に座った。

レッカー車がチュービンゲンへ向けて走り出すと、五十歳くらいの運転手が話しかけてきた。

「どのくらい乗っている車？」

「二十万キロメートルほど走っています。十六年前に製造された車で、あと数年は乗っていいように思っていたのですが。もう限界でしょうかね」

運転手は答えないでいた。しばらくして、彼は数時間前に扱った車のことを話し出した。

「家族全員で乗った車がスリップして十メートル下に転落し、皆病院に運ばれたよ。あの車も古かったな。このような雪が降るときは気をつけることだ」

それを聴いた妻が、

「私たちは、幸運だったわ」

と、声を上げた。

テュービンゲン市内の自動車修理所に着いたのは、夕方の六時過ぎだった。今日はクリスマス祭日なので、どこも休みである。とりあえず、車はレッカー車から降ろされた。私たちは自宅に戻ることにした。

雪道を歩きながら、妻に話しかけた。

「修理に一日はかかるだろうと、ADACの人が言ったが、二、三日以上要するようなら、今回のシュバルツバルト（黒い森）での休暇は止めましょうか」

「そうね、無理することはないわね」

「でも、義兄さん二人が君の誕生日の贈り物として、休暇用住宅を一週間予約してくれたものだし、なんとか実現したいな。とにかく、明日、修理工場に行つて、その様子を見てから決めよう」

翌朝七時半、ひとり自転車に乗って工場へ向かった。雪の積もった道は走りづらい。とくに、坂道の多いテュービンゲンの街なので滑りやすい。慎重に走った。

十分足らずで事務所に着き、昨日のことを話すと、あまり感じのよくない中年男性が車を点検するために外に出た。そして、しばらくしてから戻ってきて、

「一日では直せない」

と、顔の表情を変えずに言った。その彼に、

「動いたら、すぐにでも休暇地に行きたいのです。明日までに修理してくれると、ありがたいのですが」

とお願ひするように言うと、「ナイン（NO）」との事務的な冷たいことばが返ってきた。

家に戻ると、ミヒヤエルが近くのベーカーから買って来た焼き立てのパンが、食卓に並んでいた。それらを食べながら、さてどうしようかとの話し合いとなった。

「それでは、その工場で車を修理してもらっている間、そこにある代車を借りることにしたら？」

「うん、それはいい案だ。すぐに電話して訊いてみよう。でも、事務所のあの人は感じがよくなかったな」

「では、わたしが電話をするわ」

妻は受話器を取り、相手の人に私たちが休暇へ行きたがっていることを話した。五分したら、連絡してくれることになった。彼女と会話をした人は、どうも私が話した人とは違うようだ。

電話のベルが鳴った。

「では、今日の三時半までには、修理がおわるのですね。ありがとうございます」
そう言つて、彼女は受話器を置き、にっこりして、

「四時にはシュバルツバルトへ向けて、再び出発できるわ」と、声を上げた。

三時半になったので、車を取りにひとりで事務所に行った。三名の人が机に向かって仕事をしていた。そのなかに、朝対応した人もいる。その人に声をかけようとする、奥から六十代の品の良さそうな人が出て来た。

「ヨコイさんですね。朝、奥さんから話しを聞きました。車は修理しましたから、どうぞ休暇へお出かけください」

胸にかかつてある名札を見ると、工場長と記されてある。朝対応した人は、下を向いて何かを書いていた。

「ありがとうございます」

そう言つて、工場長と握手をし、下を向いていた人を一瞥してから事務所を出た。修理してもらった車で家に戻り、三人で再び目的地へ向かった。

二時間ほど経った夕暮れ、千人が住む小さな村サイクに到着する。あたりは雪が五十センチ近く積もっている。一分もしないうちに、私たちの滞在する休暇用住宅が見え出した。

あと百メートルの坂道だ。かなり急だが、上れるだろう。が、三分の一までくると、車輪が凍った雪上で空転をはじめた。前へ進もうとするが、タイヤは滑って空回りするだけである。バックもできない状態となった。何度もアクセルを踏むが、動こうとしない。二人に車を押しってもらうが、びくともしない。まわりに人家はない。

途方に暮れていると、黒いオーバーコートを身につけた一人の女性が私たちの前に現われた。

「この坂は凍っているので、一度下まで降りて、バックで一気に上るしかないでしょう」暗くて顔は見えないが、月の光で髪は金色なのはわかった。

「そうしたいのですが、タイヤが空回りするだけで、下にもいけないのです」

「わたしが、代わりに運転しましょうか」

その親切なことばに、即、「お願いします」と答えた。

彼女も一度はタイヤを空回りさせた。が、二度目に試みたときだった。車輪が少しずつ動いて下まで降りて行き、こんどはバックで一気に上ってくる。それもかなりの速さである。妻はそれを見ながら言った。

「あの人、自動車教習所の先生ではないかしら」

「巧いものだ」

私も、圧倒されて眺めていた。その女性にお礼をのべると、

「この車のタイヤは、わたしが今までに走った冬タイヤのなかで一番悪いものだったわ。これで雪のあるところを、走らないほうが賢明だと思うわ」

と、忠告してくれる。四年前に買った中古の冬タイヤ、それも最も安いものだった。

彼女の言う通りだ。この車で、雪の道进行するのはもう止めよう。彼女に感謝した。

森の入口前に建つ三階建ての大きな家の前に駐車してから、これから六日間に必要なものを車から運びはじめる。黒いオーバーを着た女性が現われなかったら、一体、どうなったかと妻と話し合いながら、三階の貸住宅に入った。

翌朝、ベッドから起き出して居間のカーテンを開けると、雪を被ったタンネ（樅の木）

が十五メートルほど先に何本も見える。どの先端にも、白と黒色をした尾の長い鳥が身動きもしないで止まっている。その向こうに、針葉樹であるタンネの森が雪に被われて、緩やかなカーブを描きながら続いている。夏と違い、小鳥たちの鳴き声はまったく聞こえない。森閑とした雪景色だ。

標高千メートルの、それも高台のここからは下に村が望め、点々と建つ民家の三角形屋根には雪が厚く積もり、レンガ造りのエントツからは煙が立ち昇っているのが見える。それらの家々の小さな窓からは、灯りがこぼれ、庭を囲んでいる木柵にも数センチの雪がのっている。

昨日、現われた女性はあの家々のどこかに住み、今ごろは朝食を摂っていることだろうと想像しながら、外を眺めていた。と、野生の鹿が、ピョンピョンと雪を蹴飛ばしながら森のなかへ消えた。窓から見る景色は、まるで雪のメルヘンの世界だ。

朝食を済ませてから、三人は雪用の装備を身につけ、ストックを持って外に出た。森の入口に建っている貸住宅なので、一分も歩けばもう森のなかである。上を仰ぐと、薄灰色の雲が空を覆い、雪が今にも降ってきそうな気配だ。

一時間ほど歩いていると、想像していたように雪がバラついてくる。それにつれて風も吹き出した。でも、私たちの歩きには支障のない風だ。

新雪を踏んでの道は、体が沈むようで気持ち良い。木と木の間に、雪がふつくらとした餅のように積もっている。その雪面に風があたると、キラキラと輝きながら渦となって宙に舞っていく。

私たちは、雪が枝からバサバサと落ちる音を聞きながら、雪道を四十分ほど進んでは十分近く休みを取り、サクサクと歩き続けた。

翌日、翌々日も同じような天候の下、大体平均して七、八キロメートルの雪道を歩き廻っていた。

十二月三十一日になった。今までの三日間とは違い、青空の広がった天気である。歩き出して一時間もすると、大気は暖かくなり、木々の梢に積もった雪が音を立てながら落ちはじめ、そのたびに粉雪が光と交差しながら舞っていく。目映いばかりだ。

昼食の時間となったので、宿で作ってきたお握りをリュックから取り出して、食べ出す私たち。夏山のお握りもいいが、雪の上でのこの味もなかなかのものだ。妻がお握りを口に入れているミヒヤエルに、

「ほら、あそこを」

と、十メートル先の梢を指差しながら小声で言った。二匹のリスが見えたので、直ぐにリュックからカメラを取り出して、撮ろうと構えると、もうリスの姿はない。残念がつていると、妻が、「ほら、あそこにも」と言ったが、もうその姿はない。

雪道を七キロ歩いてのワンデリングを終え、三人とも赤く焼けたような顔で宿に戻り、ソファーに腰かけ、熱い紅茶にこの地で採れたタンネの蜂蜜を入れて飲んだ。と、甘酸っぱい香りと味が口から胃に伝わり、体がしだいに暖かくなってくる。私たちは足を伸ばして、今日歩いたコースの話し合いとなった。

そのあと、妻が、

「今年、最後の礼拝に出席したいわ」

と言ったので、私たちは、再びストックを持って下の村へ向って歩き出した。

しばらくすると、彼女が立ち止まった。

「雪明りであたり一面、薄青になっているわ。神秘的な色だわ。それに、両側に立ち並んでいる菩提樹と楓の枝には、氷柱が垂れ下がっているわ。木全体が裸のまま、堂々としているわ」

「そうだね。自分の存在を、あるがままに出しているのだよ」

「一本、一本の木々、それぞれ違っているわね」

「同じ姿でないのが、素晴らしい。どの木も、個性を出しているからだろうな」

「ミヒヤエルのように」

「そうだね」

私たちは、再び歩き出した。雪を踏む度に、サクツサクツと音がする。私の横で歩いてきたミヒヤエルに、

「凍ってしまった雪の上は滑るから、ストックを慎重に突きながら、歩くように！」

と言うと、肯き、愉快そうに歩いていた。

私たち三人以外に、雪道を歩いている姿はない。凍ってしまった雪の上に、ストックを突きながら慎重に進んだ。

百メートル先の教会の灯りが見え出した。教会の鐘が静寂なときを破るかのよう、カーンカーンと鳴り出した。その音に誘われるようにして堂内に入ると、十五名の人たちが椅子に座っていた。

ギターの演奏で式がはじまり、一人の若い牧師がすべてを司り、この地方独特のことで、十二月三十一日の礼拝が行われていった。ミヒヤエルはギターに合わせて、体を動かしていた。

一時間足らずの素朴な式が終り、外に出て、再び雪道を登り出した。と、一家族が向こうから歩いて来るのが目に入った。四人とも、手にたいまつを持っている。

「良い新年を！」

お互い、声をかけ合いながらすれ違った。しばらくしてから振り返ると、四つのたいまつが星月夜に照らされながらゆらゆらと消えて行く。なんとという幻想的な青い美しさなのだろう。私たちは眺め続けた。

宿に戻り、遅くなった夕食の支度に取りかかった。

一時間間ほどで、白菜と椎茸、それに薄い豚肉の入った鍋を囲んでの食事となった。

三人が好きな水炊きである。家から持ってきた箸でそれらをはさみ、レモン入り醤油につけ、ご飯の上のせて食べ出すと、体が少しずつ暖まってくる。

湯気が昇る白菜を口に入れながら、妻に言った。

「今日の夜は、日本にいたときはそばを食べたね」

「そうね。でもこれもお醤油の味よ」

彼女はにっこりした顔で応えた。私たちは、「おいしい、おいしい」と連発しながら、残った汁をスープ替わりにして飲み干した。汗が額から出てくるほどとなった。

その食事も終ると、もう十時過ぎである。夜中の十二時まで起きていようと、三人でゲームをはたが、今日の疲れが出てきたのか、三人とも欠伸をするようになった。

しばらくすると、カーテンの隙間から光が差し込んで、大きな音が聞こえてくる。

腕時計をのぞくと、ちょうど夜中の十二時である。爆竹がはじまったのだ。村外れに建

っているこの家周辺は、大晦日の夜は静かだろうと思っただが、ここもドイツ、近くに住む人たちが打ち上げる花火で賑々しい。

日本では除夜の鐘がなり、静かな時のなかで新年を迎えるが、ドイツでは違う。爆竹の勢いで新年を迎えるのだ。三十分ほどで音は鳴り止んだので、私たちはベッドに入った。

翌朝、目が覚め、起き出して窓から外を眺めると、雲の切れ目からひと筋のオレンジ色の光が見えた。それがしだいに黄色に変わっていった。と、「ありがたい」とのことばが私の口から漏れた。その瞬間、あの光景が浮かんだ。

知的ハンデイのある人たちが暮らしている施設で働いていた時のことだった。当直勤務を終え、老人ホームの前を通ると、一人のお年寄りがホームの前で日の出に向かって、「今日も一日、ありがとうございます」

と、かしわ手を打っていたのを見かけた。

それを思い出しながら、私も朝日の方を眺めながら手を打った。横にいたミヒヤエルも、真似して手を打った。

第九話 父子日本旅

あと一年したら、特別支援学校を卒業して、ハンデイのある人たちが働く作業所へ通うことになっていくミヒヤエル。そうなれば、学校のような長期の休みを取ることが難しくなるだろう。そう思ったので、彼を連れて日本に行くことにした。その日が来るのを待った。

機内の小さな窓から下をのぞくと、いくつもの川が濃い緑で覆われた山々の合間を縫うように走っているのが、くつきりと望める。あの山並みはどこだろう、越後の山だろうか、谷川岳付近だろうか。小さな模型のように広がっている山域を眺め続けた。

ミヒヤエルはイヤホンを耳にあてて、好きなメロディーを聞いている。彼にとっては、九年ぶりの日本訪問である。これから、父と子のリュックを背負っての十八日間の旅が始まるのだ。

成田に着くと、小雨が降っていて、止みそうにない。傘を差しながら、今夜宿泊する千葉の妹の家へ向かった。

浜松で生まれ、七歳まで日本に住んでいたミヒヤエル。その彼が来るとのことで、叔母や叔父などが集まってくれる。その人たちとの夕餉となった。テーブルの真ん中には、にぎり鮎が置いてある。それを食べながらの歓談となった。

久しぶりに口にする酢の効いた米の味、舌と胃が悦びあっているのがわかる。ミヒヤエルはまわりの人たちの顔と名前をまったく忘れていたが、「ウン、ウン」と肯きながら、会話の輪に加わっていた。

ふと気がつくと、夜中の十二時過ぎである。明日は、ミヒヤエルが一歳から七歳まで暮らした地へ行くことになっている。欠伸をはじめた彼と一緒に、隣の部屋に行き、畳

の上に敷かれてあった布団に潜り込んだ。昔を想い出すこの感触。隣のミヒヤエルはもう寝入っている。柱時計の音を耳にしながら、私も眠りに就いた。

翌日、皆と一緒に朝食を摂ったのち、二人ともリュックを背負って妹の家を出て、電車を三回ほど乗り継ぎして土浦駅に到着する。改札口を出ると、友人が待っていてくれた。これから彼の家へ行き、ここで六年間お世話になった人たちとの再会だ。

大きくなったミヒヤエルを見て、寄り集まってくれた二十名ぐらいの人たちは、皆驚きの声を上げた。当時のモヤシのようなひよろりとした体つきから、今はがっしりした体格となっていたからだろう。

その彼は、日本語をまったく忘れてしまっていたが、終始笑顔を浮かべ、会う人と握手を交わし、楽しそうにしていた。その姿を目にして、ここまでよく育ったとの思いとなつて、私の顔から自然と笑みが零れるのだった。

翌日、私たち二人は以前住んでいたところへ向かった。田圃が見え出して、トタン屋根の簡易木造貸住宅が今も六棟建っているのが目に入ってくる。あの左端の家で暮らしていたのだ。

玄関前に立つと、四歳でやつとひとり歩きができたミヒヤエルの姿、それに七十一歳になる義母が、ドイツから一人で訪れて来て、ここで一か月間滞在していたことが浮かんでくる。もう十六年前のことだ。

周囲はほとんど変わっていない。家の裏にあったピーナッツ畑は今もある。あの周辺を、私たち家族はよく散歩をしていたのだ。立ち尽くして見続けた。

しばらくしてから、ミヒヤエルと一緒に再び歩き出した。と、小さなスーパーマーケットが見え出してくる。あそこへ、妻はパーキンソン病とリュウマチを患っていた私の母を車椅子に乗せて、二年間毎日のように買い物に出かけていたのだ。よく見てくれた彼女だった。当時のことが、止めど無く浮かんでくる。歩き続けた。

土浦に三日間滞在してから、二週間の旅に必要なものが詰まっているリュックを担いで、ミヒヤエルが生まれた地へ向かった。

夜の九時過ぎ、静岡県浜松駅に到着する。昔よく乗っていた三方原行きバスに揺られながら、窓から暗くなった商店街の通りを眺めていた。車内に流れてくる放送は以前と同じだ。昔のような空気の匂いだ。懐かしさを覚えながら座り続けた。

バスを降りてから、これから二泊する高齢者ホームへ向かって歩き出した。数分もしないうちに、新築の高齢者ホームが目に入ってくる。

ホームの前に立つと、私たちの宿泊するところを探してくれた知り合いの女性が玄関口から出て来る。私たちは彼女に案内されて、ゲストルームに入った。と、二人とも疲れが出てきたので、すぐにベッドに入った。

翌朝、朝食を摂るためにミヒヤエルと一緒に食堂に行った。お年寄りたちと一緒に食事である。

朝食はいつもパンを摂っていた彼だったので、ご飯が口に入るかどうかと気にはなつた。が、それを吹き飛ばすほどのお代わりぶりである。日本にいた時のことを思い出したようだ。

朝食を済ませてから、私たちはまず以前住んでいたところへ向かって歩き出した。

小川に沿っての道をしばらく行くと、昔働いていた知的ハンデイのある子供たちが住

んでいる施設が見え出して来る。さらに進むと、私たちが暮らした職員寮の赤い屋根が目飛び込んできた。あたりを見回すと、濃い緑の葉をつけた木々が立ち並び、近くの牛舎からは、小鳥の囀りと一緒に牛の声が聞こえてくる。当時のままだ。木々に囲まれた、簡易な木造作りの寮舎前に立った。

「ここで、きみは生まれたのだぞ」

と、隣にいるミヒヤエルに言うと、彼は、

「モウ、モウ」

との真似声を出した。その彼を家の前に立たせて、スナップ写真を撮った。と、十八年前のあのシーンが浮かんでくる。

出産予定日の二週間前に、二千五百グラムで生まれたダウン症のミヒヤエルは、母乳をほとんど飲まなかった。吸う力が弱かったからだ。妻は自分の乳をしぼって哺乳ビンに入れ、

「今日は、これだけ飲んだわ」

と、言いながらノートに書き記していた。少しでも飲むと、よろこんだ顔を浮かべながら息子を見つめていた彼女だった。異国の地に来て、言葉もわからず、見知らぬ文化のなかで行き詰まることもなく、よくやっていた彼女だ。当時のことを思うと、今でも頭が下がってくる。あとで、電話でここにきたことを伝えよう。

浜松で三日間を過ごしてから、こんどは京都府の山間の村に住んでいた友人宅に行き、そこで二泊して、今回の旅で、私が最も訪れたかった山口県の萩へ向かった。

三回ほど列車を乗り換えて、やっとのことで萩駅に到着する。あたりは薄暗い。まず、これから四泊する宿を捜さなければならない。駅前の観光案内所で、斡旋してもらおうとした。

「安い民宿を捜しているのですが、どこかにありませんか」

「民宿は一泊二食で、どこも六千五百円ですよ。今の時期は観光客が少ないので、直接行って訊くとよいでしょう」

係の人から街の地図をもらい、それを見ながらの宿探しとなった。ミヒヤエルは歩くことには慣れている。ドイツに住むようになってから、毎夏スイスの山々に登っていたので健脚でもあった。

「ミヒヤエル、平気か」

「ヤーア、パァ」

との明るい声が返ってくる。地図を広げ、どの宿にしようかと迷っていると、地元の人が話しかけてきた。

「どうなさいました」

「泊まる場所を捜しているのです。それも安い宿を」

「それでは、近くにあるユースホテルがよいでしょう」

それを聴き、そのユースへ向かった。

六月上旬の今は、夏の観光シーズン前である。泊り客は、私たち二人以外にだれもない。大きな部屋で、二人だけで眠ることになった。

翌朝、ガランとした食堂で、朝食を摂ってから外に出た。

江戸時代には城下町として栄え、明治維新には多くの志士を生んだ萩。ここには日本

のふるさとが今も脈々と生き続けていると何かの本で読んだことがあった。ぜひ訪れたかったところだ。そこに、今息子と二人でいるのだ。信じられない気持ちであった。

武家屋敷を感じさせる佇まいの道を、彼と一緒に歩いていた。大きな石垣と白い土塀からは、夏みかんが顔をのぞかせている。それらを目にしてしていると、日本の昔ながらの風景のようにも思え、心が静かに満ちてくるのだった。

しばらく行くと、緑の濃い静かな地になった。目の前には、吉田松蔭が弟子を教育した松下村塾の建物が建っている。数多くの志士たちが指導された塾だ。

志半ばにして、二十代後半で死んだ吉田松蔭や高杉晋作などの生き方は、どのようなものだったのだろうかとの考えとなった。彼らは仲間と共に信頼し合いながら社会を変革しようとして、そのなかで自分の生きる意味を見出していたに違いない。木造建ての家を眺め続けた。

さらに歩いて行くと、伊藤博文旧宅が見えてくる。その前を通って、黄檗宗東光寺へ向かった。杉と檜の大樹が左右に並び、うっそうとした緑に包まれた道を、私たちはゆっくりと歩いていった。時々初夏の陽光が、緑の葉の隙間から漏れるように射し込んでくる。樹と土の織り成す湿った冷たい大気が、日本で暮らしていた時の自分を蘇らせてくれるのである。

「これが日本だよ」

と、ミヒヤエルに言うと、彼は、

「パパ、パン、パン」

と、声を上げた。お腹が減ってきたようだ。朝食から何も口に入れていない。ちょうど二十メートル先に木のベンチがあったので、そこに腰かけ、途中で買った餡パンとオレンジジュースをリュックから取り出した。

食べ終えてから、ベンチから腰を上げ、しばらく行くと、東光寺境内前に出た。と、整然と立ち並ぶ約五百基の石灯籠が目に入ってくる。それらを見ながら近くをぶらつきっていると、遠い歴史を偲ぶ思いとなつて、気持ちがゆったりとしてくるのである。のんびりと歩き続けた。

萩の町を三日間、足に任せて過ごしたあと、こんどは日本海の澄みきった青い海に浮かぶ青海島周辺へ向かった。

一車両の電車に乗って、長門市で降り、仙崎湾まで来ると、二十人乗りの小船が今出るところだった。私たちは、即船に飛び乗った。

船席からは、日本海の荒波によつて少しずつ削られた断崖・石柱・洞門などが見える。波が壁を打ち砕いている様は、まるで長州の志士たちのような男性的躍動さだ。それを眺め続けていると、彼らのかならずやり遂げるといふ心意気が伝わってくるのだった。

ミヒヤエルは、小船が揺れながら白い飛沫を飛ばして走っているのが面白いように、たえずニコニコ顔である。海を目にするのも、船に乗るのも初めての彼。目を丸くしての新たな体験だ。

ユースに戻ると、毎日お風呂に入る私たち。日本の湯船は大きくていいものだ。

「今日も、パパの背中を流してくれるか」

「ヤーア」

彼のぎこちない手が、背を走る。

「もっと力を入れて洗ってほしいな」

両手で力いっぱいゴリゴリ洗うミヒヤエル。痛いぐらいだ。でも、快いものだ。父子でお風呂に入ることには、ドイツではないので、この肌と肌の触れ合いは二人の気持を一つにしてくれる。共同の湯はいいものだ。

湯に浸かったあと、夕食を摂り、下着などを洗い、九時過ぎに床に入る私たち。

ユースを発つ朝も、ウグイスの鳴く「ホー ホケ キョ」の声で目が覚めた。いにしえから続いている澄んだ音色の三語を聞きながら、私たち二人は、再びリュックに衣類などを詰めはじめた。

あと一週間、父と子の旅を心ゆくまで満喫して行こう。

第十話 別れ

義母の部屋に入ると、彼女はソファアに座って、いつものように郵便箱から取り出した新聞を読んでいた。その前で、私たち三人は声を合わせて誕生日の歌を唄った。そのあと、娘は母を抱き、頬と頬を合わせた。

自分は義母の手を握りながら、

「八十七歳の誕生日、おめでとうございます」

と言うと、とてもうれしそうな顔を浮かべた。

それから二ヶ月が過ぎた時だった。義母の体調が急におかしくなって、家から救急車で大学病院に運ばれてしまった。

病院の医師から、「八十七歳のお母さんは、心臓が極端に弱くなっています。明日、何が起ころうとおかしくない容態です」と告げられた。

「家で介護したいのです」

との私たち夫婦の願いで、彼女は四週間後、家に戻ってくるようになった。

私たち夫婦と二人の義兄たちが、毎晩交代で看ていた。

彼女が家に戻って、一ヶ月が過ぎた時だった。妻が、私の目を凝視しながら言った。

「昨夜、母を看ていた兄は、聞いたらしいの。母が二十五年前に亡くなった、父の名前を何度も呼んだのを。今まで父の名前を口に出したことがなかったのに。それに、母のお母さんと亡くなった、わたしの姉の名前も呼んだらしいの。そのあと、咳も出て、熱も上がったと言ったわ」

「また、肺炎に罹ったのかな」

「そうかもしれないわ。心配だわ。母はここまでよく生きていると思うわ」

「そうだね。医者も看護師も心臓が弱い、お義母さんがここまで生きているのが、奇跡だとも言っていたからね。昨日は、ほとんど意識のないなかで、『上を開けて、上を開けて』との声を聞いたな」

「そうなの」

この会話をした翌日、義母は天に召されたのだった。

義母が急に倒れ、容態が悪くなったことを、私が年に六回ほど発行しているテュービン

ゲン便りに書いたり、義母を知っている人たちに知らせたりした。

そしたら、私宛てに日本から何通もの手紙が届いた。

テュービンゲンに長く住み、クリスマスの時はいつも家に来て、義母を含めて一緒に食事をした人からは、

「ご無沙汰しています。久しぶりのお手紙、拝見いたしました。お義母さんの具合が悪いようで、大変心配しています。看病をしていらっしゃる皆様も、さぞ心配で辛い毎日だと思います。

私も最近、考えるようになりました。誕生して、学校へ、それから結婚、家庭生活、初老の月日、老年の体調の変化、そのなかで今までいろいろと心配したり、苦労したり、喜んだり、悲しんだり、その時その時に人間が生きて行くと云う事は、大それた感と居りました。でも、最後の死と云うことが一番大切で、その大切さをはっきりと身にしみて感じるようになりました。

自分は信仰も無く、子供もいません。お義母さんはしっかりした信仰も有り、子供たちにも恵まれて居られるので、羨ましく思います。

神の御心のまし、自然の成りゆきを、お義母さんは感じていらつしやると思います。遠く日本の空より、一日でも長く生きてくださるようにお祈りして居ります。心残りの無いように、しっかり看病して上げて下さい。………

だれにも訪れる死の瞬間は、静かで、安らかにしたいものと、考える年齢になりました。奥さんをしっかりと慰めて上げて下さい」

また、テュービンゲンに三回ほど訪れてきた人からは、
「夕暮れと共に秋の虫がうるさい程鳴き、秋を実感しております。

昨秋は、大変お世話になりました。その後、大変ご無沙汰しております。とは申しますものの、私はテュービンゲン便りにて、ご家族のご様子を伺っているので、とても身近に感じておりました。

お母様の具合はいかがでいらつしやいますでしょうか。案じております。テュービンゲン便りでの人間の真理をついた、しかも哲学的な物の考え方をする横井さんの原点はどこにあるのでしょうか。毎回、文章を読ませて頂くたびに、それを思うのです。奥様でしょうか。それとも息子さんでしょうか。それとも、思考の構築のなかに組み込まれていらつしやるのでしょうか。宗教家のような感じさえ致します。

私は少し前に「地球交響曲」という映画を、一番から三番まで見る機会がありました。この映画は、人間をひきつけて離さない魅力があり、根強い人気を持っております。三回ほど見ました。

オムニバス形式なのですが、そのなかで佐藤初女という日本女性を取り上げられています。彼女は三十年位前から社会的弱者とされている人々に、自宅を開放している人です。ある時、彼女は「あなたにとって、祈りとは何ですか」と訊かれ、とっさに「生活です」と答えたのです。生活全てが祈りで、手を合わせるのが静の祈り、動いて働くのが動の祈り、だと言うのです。

私は日本人の多くがそうであるように、いわゆる無宗教に近いのですが、このことばは心のなかにスーと入ってきました。spirit, body, mind, の三つの調和が、人間本来の姿であるとも解説しておりました」

私の学生時代の山仲間で、一年間テュービンゲンに滞在した人からは、「過日、グロースムターが逝去されたことを知りました。心からおくやみを申し上げます。奥さんも悲しまれたことと思っております。」

グロースムターは良きヨーロッパ文化を体現していた方だと思っております。聖書のなかに、隣人を愛せよという句がありますが、常にそのことばの意味するところを体現されていた方だと思っております。

人生は時として、苦しみや悲しみに出会い、耐え忍ぶしかないという時があると思いません。むしろ人生の実相としては、苦しみや悲しみのほうが多いのかもわかりません。

ただ、死と生とは断絶ではなく、継続しているものだと思います。生者は死者のためにあり、死者はまた生者のためにあると思います。悲しみの極にあっても、何か見守っていただけの大きな力といったものを信じたいと思います。

奥さんも悲しまれたことでしょう。どうぞ、心からのお悔やみを申し上げると、お伝え下さい。

また、家族と一緒に日本にお越し下さい」

私が親しくしていた人からは、

「お義母様のご逝去に心よりお悔やみ申し上げます。

天寿を全うされたお義母様は、充分に人生を生きた事と存じます。亡くなられた方には『ありがとう』と『長い人生、おつかれ様でした』の二つのことばに集約されるような気がいたします。

当分はお忙しい日々が続くと思われませんが、お体をお大切になさって下さいませ」

母が亡くなってから、妻は元気がなかった。そこで、彼女を慰めようとして三人で日本を訪れる計画を企てた。

日本へ行く日となった。旅に必要なものが入っているリュックをそれぞれが背負い、家を出た。

十二時間、飛行機に揺られ、関西空港に朝早く降り立った。直ぐバスに乗り、妻が行きたかった京都へ向った。

私たち三人は、桜の花が咲きはじめてのを眺めながら、市内を六日間歩き廻っていた。最後の日、妻に言った。

「市内のお寺やお城、それに祇園や三千院などを見て歩いていると、日本の情緒を色濃く感じたよ。とくに、『都おどり』に観にいったとき、舞台で舞い踊る着物姿に魅せられたね。それに笛・小太鼓。三味線から奏でる音に、ミヒヤエルは体を動かしていたね」

「そうだったわね。わたしも、ここに来てよかったわ」

彼女は背いた。

次は、ミヒヤエルが生まれたところへ向った。

列車のなかで、妻が話し出した。

「浜松は、二十年ぶりの訪問になるわ。懐かしいわ。これから、当時の人たちと会おうのね」
「きみが日本に来て初めて暮らしたところだ。それに、未熟児すれすれの体重だったミヒヤエルを産み、乳をまったく飲まなかった彼に、なんとか飲ませようとして一生懸命に尽くしていたね」

「そうだったわね」

駅前からバスに乗って、私が以前勤めていた学園の近くの宿へ向った。リュックを下ろしていると、妻が声を出した。

「わたしたちが住んでいた家へ、これからすぐ行きたいわ」

「よし、そうしよう」

歩き出してから少しすると、彼女が、

「私たちが住んだ家、二十年前とまったく変わらずに、建っているわ。五十メートル先の牛舎から、モウ、モウの声も聞こえるわ。昔と同じね」

と言い、しばし立ち尽くしていた。

家周辺を歩き出すと、妻が、

「土と木の匂いがするわね。あなたの休みの日は、ミヒヤエルを乳母車に乗せて、三人でこの周辺をよく散歩したわね。その彼、こんなに大きくなって」と、言った。

私たちがここに来たのを知ってか、知り合いの人や隣の住いに住んでいた夫婦が会いに来てくれた。彼らと別れ、バスと電車で揺られながら浜名湖へ向った。

乗り物が好きミヒヤエルは、窓に映る景色を眺め続けていた。

湖に着くと、

「桜の花が、半分近く散っているわね」

と妻が声を出した。ところどころに黄オレンジ色の夏みかんがなっているのを目にしなから、歩き続けた。

次の日、バスに乗って、浜松駅向かった。

少しすると、妻が私に言った。

「信号前で停車するごとに、同じメロディーが流れてくるわね」

「そうだね。懐かしい歌だ。感傷的になるな」

と応え、しみりした小さな声で、「うさぎ追いし、かの山、……」と口ずさんだ。

想い出深い地から、次は姉が住んでいる家に行き、親戚の人たちと会い、一泊してから、長く暮らした土浦へ向かった。

駅の改札口を出ると、友人夫妻が待っていてくれた。妻にとっては十四年ぶり。ここにこしながら握手を交わし、日本語で話をはじめた。日本に来て十日間ほどいたせいだろう、日本語を想い出したようだ。

これから二泊する友人宅に行き、大きな間に入った。と、ここで親しくしていた十五名ほどの人たちが待っていてくれた。

ミヒヤエルは六年間、ここに住んでいたが、皆の顔はもう忘れていた。妻は懐かしそうな顔を浮かべ、皆と握手しながら話をしていった。

皆、彼を見て、「こんなに大きくなって」と驚きの声を上げた。ミヒヤエルは日本語が口から出なかったが、自然と生じる笑顔で楽しそうにしていた。

私たち三人は、皆と一緒にお鮓を食べ出した。妻は、「おいしいわ」と何度も声を出していた。当時の味を想い出していたのだろう。醤油味が好きなミヒヤエルは、おすしにたっぷり醤油をつけ、口に運んでいた。

夕食を終えると、目を瞑り出したミヒヤエル。そこで、彼を蒲団の敷いてある部屋に運

び、そのあと私たちは話しに花を咲かせ続けた。

次の朝、夫妻と一緒に朝食を摂りはじめた。ミヒヤエルは、ご飯を美味しく三杯お替りした。日本にいた時、私たちはパン食だったが、ご飯を食べていた時期があった。というのも、私の母と二年間一緒に暮らしていたからだだった。

朝食を済ませてから、昔、住んでいた家へ向った。

バスに乗って、停留所で降りて歩き出すと、妻が、

「田圃が見えはじめてきたわね」

と言い、さらに、

「ほら、あの先を見て！ 当時住んでいた家が、今も建っているわ」

と、声を上げた。

その家の前に立つと、彼女が話し出した。

「ドイツから母が来たとき、この家で一ヶ月間、過ごしていったわね。家周辺の景色は、ほとんど変わっていないわ。裏のピーナツ畑は、今もあるわ。母とあの周辺をよく散歩したことがあったわ」

「きみは日本にいた八年間、ミヒヤエルとわたしの母とを看っていたので、日本を旅したことがなかったな。きみには感謝しているよ。今回、京都・浜松・土浦を訪れ、本当によかった。このような旅になったのも、義母がそうさせてくれたからだと思うね。義母のことが、心のなかに今も生き続けているのを知るね」

「そうなの」

そう声を出してから、

「昔の知人たちとも会えて話しもできたし、日本にいたときのことを確認できたわ。ありがとう」

と言い、私の手を握った。ミヒヤエルは、にこにこ顔である。

第十一話 作業所へ

特別支援学校を卒業したミヒヤエル。今度は、知的ハンディのある人たちが働く作業所に通うようになった。

そこへ行きはじめての一年間は、いくつかの職種、たとえば、木工・金工・陶芸・園芸などの一つひとつに挑戦し、やっと彼に合った仕事が見つかったようだ。そこで、その作業内容がどのようなものかを知ろうとして、見学に行くことにした。

家から十分ほどしたところで車を止め、ミヒヤエルが働いている作業室に入った。すると、彼がこちらを見ながらにっこりして、「こっちへ こい こい」と手招きをした。今朝、「仕事場へ行くからね」と伝えてあったので待っていたのだらう。

机上には、山のように積まれた八色の粘土が置いてある。それを小さなプラスチックの箱に色分けするのが、彼の仕事のようだ。でき上がった箱を、誇らしげに示すミヒヤエル。その顔は生き生きして、街で働いている若者の姿とそう変わりはない。その彼の作業ぶりを見ていると、指導員が寄ってきた。

「ミヒヤエルは、よく働きますよ。根気があって」

私とミヒヤエルを交互に見ながら言った。

「そうですか。いつもこの箱詰めをしているのですか」

「いいえ、一週間ごとに作業替えがあつて、この室にある七種類の仕事のどれも上手にこなしますよ」

「それはたいしたもんだ」

そう言つて、ミヒヤエルの隣に座りながら、箱詰めの手伝いをはじめた。

三十分ほどすると、廊下でベルが鳴った。休憩時間である。妻が数時間前に作ったリングパイを、このグループで働いている九人とテーブルを囲んで食べることになった。四十年代半ばの男性職員も一緒である。その人の動きを目にしていると、もし自分が日本で暮らしていたら、同じような仕事をしていただろうと思つた。やりたかつた職種でもあつたらだ。

ここにいると、皆個性のある人たちなので、ついこちらも楽しくなってくる。これほどまでも、自分を素直に出している人たちはいないだろう。明るさをもろう思ひとなつた。三十分の休憩時間が終わると、皆再び働き出した。それを見て、ミヒヤエルとグループの人たちに別れを告げ、作業室から出た。

ここで働いている人たちは、月々の給料を得ている。ミヒヤエルの場合は、手取りで一萬六千円である。初めて現金入りの給料袋を目にした時は、「すごい！」と感嘆したものであつた。

毎朝六時には起き、七時には家を出て、作業所のマイクロバスに乗っていき、四時半に帰宅する彼。直ぐには家に入らずに二十分近く玄関の前に立つて、ゆつくりと前を走る車を眺めている。時々近所の知り合いの人が通ると、誇らしそうにその人と握手を交わす。仕事をしたあとの寛ぎの時間なのだろう。もう一人前の労働者だ。

居間に戻つたミヒヤエルに、

「ご苦労さん。今日はどうだった？」

と訊くと、にっこりした顔で、

「グート(よい)」

と、答える彼。それを耳にするたび、(今日の夕食も美味しいものを作るぞ)という気持ちになるのだった。

作業所のマイクロバスに乗つて家に戻るようになった彼を連れて、週末になると、森のなかを散歩したり、車で遠出をしたりする私たち家族。その他にも、最近では自転車乗りをするようにもなつた。

「さあ、ミヒヤエル、走るぞ！」

「ヤアー、パ、パ」

それを聴き、彼と一緒に漕ぎ出す。

通りで知り合いの人が、「ハロー」と手を上げる。それに応えてベルを鳴らす。子供たちの、「あつ、タンデムだ！」との声を耳にする。

二人乗り用のタンデム自転車をも妻の知人から安い値で買ったのは、夏がはじまる前だつた。それ以来、週末は街郊外やネッカー川に沿って設けられてある自転車道を走るようになった。

平坦な道の両側には、麦畑が延々と続き、所々に咲いている身丈二メートルほどの大きなヒマワリの花たちが、笑っているかのように私たちを歓迎してくれる。それらを眺めながらの走行である。

大人と子供用に作られたタンデムなので、脚力が異なる二人にはピッタリである。

「もっと漕げ！」

と促すと、

「ヤー」

と声を上げて力強くペダルを踏む彼。

走りながらの会話もでき、何よりもまわりに映る景色を二人で共有できるのである。それ

に、うしろで漕いでいる彼の息づかいが伝わってきて、まさに共にといった感じとなるのだった。

二人で乗りはじめた頃、家から十キロメートル離れた郊外の起伏のない道路を走り回っていたが、少しずつ慣れてくるにしたがい、遠出するようにもなった。時には、電車に自転車を乗せ、丘陵地で降り、そこから走り出すこともあった。限りなく続く緑の草原に、たわわになっっている赤いリンゴの実を目にしたがらの走行である。ゆったりとした気分となつて、心が自然と躍ってくるのだった。

かなり上向き道となると、うしろで漕いでいるミヒヤエルに、

「もっと力を入れて！」

と声を高くして言い、背を丸める私と彼。その時は、周囲の景色を楽しむ余裕はない。が、下り坂となると、風を切つての走りとなる。その心地良さは、ことばでは表現できない。

「ヒュー、ヒュー」

ミヒヤエルは声を発してよろこぶ。景色が飛んでいく。これを体験したらもう止められない。

ある時、急に空が暗くなり、風雨に打たれながら走ったこともあった。

また、ある時はガラガラと照りつける太陽の下、休みなしで二時間も走り続け、咽がカラカラとなつて、村の食堂でジュースを飲んだこともあった。

あの味を、今も思い出すことはできる。このようなことを、二十歳を越えた息子と一緒に体験できるとは思ひも寄らぬことだった。

一人では自転車に乗れないミヒヤエルにとって、このタンデムは気に入ったようで、日曜日になると、自分のヘルメットを持って、

「さあ、走ろうよ」

と、催促してくる。

「漕げ！」

「ヤー」

うしろから、妻の「気をつけて！」の聲が飛んでくる。

第十二話 笑顔

最近、ミヒヤエルは、しばしば下痢をするようになってしまった。そこで、家庭医のところに行き、下痢の原因を調べてもらった。

その結果、ミルクアレルギーとのことわかった。が、治療方法はなく、医師から、「食べ物に気を配るしかないですね」と言われただけだった。それ以後、私と妻は、彼がバターやチーズやヨーグルトなどのミルク製品を食べないように気をつけるようになった。

私もミルクアレルギーで、彼と同様に二十代半ば頃から、チーズやヨーグルトなどの乳製品を食べると、下痢になってしまった。

ミヒヤエルが下痢をするようになったのは、私からの遺伝なのだ。妻の消化器官を継げば、少しの黴菌でもびくとはしなかっただろうに。

しかし、食べ物のことで、私たち二人はこのところ楽しくなることがあるのだ。それは、二人で夕食をいつも作るようになったことだ。

「さあ、今日も、先ずお米を研いでほしい」
掌で米を握るようにして研ぎ、何回も水を替えたあと、炊飯器にスイッチを入れる彼。

「冷蔵庫から卵を二つ取り出して、それを割って」
力加減に気をつけながら、器に入れる彼。

「そのなかに、砂糖を入れてかき混ぜてほしい」
「ヤアー、パァ」

「フライパンが熱くなったので、それを入れて」
溶けた卵を少しずつ落としていく彼。

「固くなったね。今度はそれを包丁で細長く切ってほしい」
大きなまな板の上で、切る彼。

「次はキュウリだ。卵と同じぐらいの大きさに切って」
「なかなか手が器用だな。その調子で、次はアボガドとシヤケを切ってほしい」
「ヤアー」

「切り終わったら、今までのものを全てお皿にのせて」
丁寧の一つひとつを盛っていく彼。

「さあ、炊き上がったご飯に、酢と砂糖と塩を合わせたものを混ぜるよ」
「ヤアー」

「これで、でき上がりだ」
そこで、私たちはハイタッチをする。

テーブルにでき上がったものが並んだ頃、妻が仕事先から戻り、三人での夕食となる。私たちが掌に海苔をのせ、その上に酢の香りのするご飯とアボカドと薫製のシヤケ、それにキュウリをそえて包むように巻き、わさびの入った醤油に、それをつけて口のなかに入れる。三人とも好きな手巻き寿司だ。

妻が彼の顔を見ながら、
「今日のお鮨は、とくに美味しいわ」
と言うと、彼はにっこりした。

二人で夕食作りをしたからといって、彼の下痢の回数が減りはしないが、にこにこ顔と

なるミヒヤエルである。

その彼の笑顔から、先日癒されたことがあった。

郵便受けを開けるが、目指す封書はない。翌日ものぞくが、入っていない。数日間、このようなことを繰り返していた。が、とうとうその通知を手にした。

早速居間に入り、祈るような気持ちで封を切った。

「誠に残念ではございますが、あなた様の作品は選外となりましたのでお知らせいたします」

それを読み終え、深い溜め息が出た。と同時に、暗澹たる気持ちになった。

一年近くかけて一つの物語を書き、それをある文学賞に応募したのは半年前のことだった。よく書けたと自負していたので、大賞は無理でも、佳作には入るだろうと想像していたのだったが、甘かった。

ソファで新聞を読んでいた妻に、そのことを伝えると、

「それは残念ね。書きはじめて、すぐに賞はもらえないのではない？ 何回も応募して、やっと賞に値するものが、でき上がるのではないのかしら」

と新聞から目を離し、慰めるような表情を浮かべて言った。

彼女は自転車に乗って仕事へ出かけた。

自分は窓越しに映る垂れ下がった雲を眺め続けていた。胸が塞がったような気持ちのまましていると、一日の仕事を終えたミヒヤエルが作業所から戻ってきた。

帰宅すると、いつもは私が作ったおやつを食べるのだが、今日はそれがテーブルの上はない。がっかりしたような表情を浮かべていたミヒヤエルを連れて、いつものように夕食の買い出しに出かけると、彼の歩き方が変なのに気づいた。しかし、それにお構いなく歩き続けた。

家に戻ってから、ミヒヤエルをバスルームに連れて行き、シャワーを浴びさせようとしたが、いつものように立とうとはしないで座ろうとする。

「どうした？」

と訊くが、答えないで、また座ろうとする。

奇妙に思い、彼の足裏をのぞくと、一センチほどの黒いトゲが皮膚に刺さっているではないか。驚き、ミヒヤエルを連れて、直ぐにバスルームから出て、彼をソファに横たわらせた。そして、焼いた針の先でトゲを抜こうとした。が、深く入っているのだからなかなか引き出せない。

針で突き刺すたびに、痛そうな顔をして、何も言わずにじっとこちらを見ているミヒヤエル。「痛いか」と訊いても、黙っている。その表情からして、痛いのは明らかだ。なんとかこのトゲを取り出さねばと思いつつ、何度も試みるがだめである。仕方なく針で皮膚を切りさいて、やっとのことで引き抜くことができた。と、その瞬間、血に混じった白い膿が勢いよくパツと飛び散った。助かったと思った。

「出たから、もう痛くないぞ」

と言ったが、彼の顔はなおも歪んだままである。消毒液を塗って、早く寝かせることにした。

ミヒヤエルがベッドに入ってから、思い続けた。作業所から戻って来たときから、不自

然な歩き方をしていたが、それを気にしなかった私。選外の通知に胸が塞がれ、そのことばかりに心が執られていた私。トゲが刺さった足で、歩いていたので、さぞ痛かったろう。主夫として、父親として、これは落第だと思った。

それと同じようなことを、以前勤めていた日本の知的障害児収容施設で経験したことがあった。一人の少年がいつもとは違う足取りをしていたが、気に止めずにいた。入浴をさせようとしてズボンを脱がせると、大腿部に深い切り傷があつて、そこからまだ血が滲み出ていた。それを三時間以上も気づかずかずにいた自分は、彼らをお世話する職員として、失格だと思った。それを今、再びやってしまったのだ。こんどは最も身近にいる我が子に、情けない。

翌朝体温を計ると、平熱である。足裏の痛みは消えたようで、立たせて歩かせても足を引きずらない。これなら作業所へ行けるだろうと思ひ、玄関まで送り、

「痛くはないか」

と彼の顔をみながら訊くと、

「パ、パ、パ、パ」

と、甘えたような高い声を上げながら、足先を指差した。

その姿を見て、共に生きるとはこのことだと思つた。賞を得られずに気落ちしていた心が、一転して晴れた。

作業所のマイクロバスに乗ろうとしている彼の姿を目にしなが

ら、「ミヒヤエル、ありがとう」

と、つぶやいた。

第十三話 命の尊厳こそ

テュービンゲンから車で四十分走ったところに、マリアベルグという施設がある。日本から、福祉の仕事に携わっている人たちが訪れてくると、先ずそこへ案内することになっている。

その施設で、最初に行く場所がある。ナチ政府下で、六一名の知的ハンデイのある人たちが殺害されたことを刻まれた石碑の前である。

当時、多くのハンデイのある人たちが、「生きるに値せぬ生命」という名のもとに、殺されてしまった歴史がドイツにはある。その史実を知ればしるほど、これから問題となってくる生命倫理について、真剣に考えざるを得ないのである。

一九三九年に、第二次世界大戦が勃発した。と同時に、ヒットラーは、ある秘密命令を出して、精神病患者を中心とした心身にハンデイのある人たちを抹殺する計画（安楽死作戦）を企てた。それによって、戦争中に十〜二十万人が殺害されてしまった。

この作戦は、綿密かつ組織的に実行されていた。それを可能にさせた社会的背景には、戦争という非常事態があつたとはいへ、ヒットラーが政権を取ってからこの作戦を思いついたわけではなく、ヒットラーの青年期、もつと遡れば、一九世紀の後半から社会のなかで少しずつその芽生えが生じていたからだつた。

それは、ダーウィンによる進化論の考えからはじまり、生存競争から自然淘汰が起こり、

優生学への考えと進んで行き、有用性と業績能力による人間価値序列の考えが浸透していたからだ。

そのようになったのも、第一次世界大戦に敗れたドイツでは、経済的困窮も加わり、多額の費用と労働がかかるハンディのある人たちを、経済的な視点から捉えようとしたからだ。

その一つの例として、一九二〇年の秋、ある施設長がホームに住んでいる知的ハンディのある子供たちの親たち二百名宛てに、アンケートの手紙を送った。その内容は、次のようなものだった。

「あなたの子供に学ぶ能力がなく、治る見込みがないとわかった場合、その子の生命に痛みのない死（生命短縮）をもたらすことに同意しますか。親のあなたが、もし自分の子供の世話ができなくなった場合、たとえば、あなたが死んだときなど、子供の生命短縮に同意しますか。あなたの子供がかなりの身体的苦痛を伴ったとき、その子どもの生命短縮に同意しますか」

百六十二通の返答のうち、七十三%が生命短縮に同意すると書き記したのだった。この施設長は、まさに反対の数字を期待していたのだったが、結果は生命短縮に同意する親が多かったのである。

当時の社会では、ハンディのある人は、親からの遺伝が主な理由として挙げられていた。そのようなことで、ヒトラーが政権を握った一九三三年、すぐに遺伝病子孫予防法なる断種法（男女の不妊手術）を制定し、翌年からそれは施行された。それによって、三十万人以上のハンディのある人たちが断種（不妊手術）されてしまったのである。

このように、ヒトラーによるハンディのある人への安楽死作戦、別名、「恩恵死作戦」は第二次大戦から始まったのではなく、すでに一九世紀後半から、その動きはあったのだ。ヒトラーにとっては、有用性と業績能力のある人が健康な人間で、その他の人は抹殺へと通じていたのである。

では、ここでマリアベルグ施設に住むハンディのある人たちが、どのようにして殺害されて行ったのかを書いてみることにする。

一九三四年一月に施行された断種法によって、マリアベルグに住む約二百名の人たちの多くが、強制的に不妊手術を受けさせられた。とにかく、遺伝的要素の強いとみなされた精神的ハンディのある人の生殖機能を絶つことが、ヒトラーは重要だと考えたからだった。これを契機に、人工妊娠中絶の法および精神病のある人の結婚を禁止する法へと進んでいった。

一九三九年に戦争が始まるや、不治の患者には恩恵死をもたらしてもよいとする安楽死作戦が秘密のうちにはじまり、その年の一〇月、早速ベルリンからマリアベルグ施設に、調査用紙が送られてきた。

そこには、ハンディのある人の一人ひとりの名前と病状と労働能力達成が、どの程度なのかを詳しく書いて、ベルリンへ返送する旨が記されてあった。計画経済上の理由でと付け加えられてあった。

それを受け取ったマリアベルグでは、計画経済上の理由で、その調査は必要なのだろうと思った。そこで、労働業績などを、その本人の能力よりも低く記入した。というのも、彼らが戦場、または軍事工業に送られてしまい、その結果、今まで彼らがしてきた施設内

の掃除や洗濯や料理などを十分にできなくなってしまうと案じたからだだった。これはマリ
アベルグだけではなく、多くの施設でも同様だった。

その調査用紙を記入し、ベルリンへ返送してから少し経った一九四〇年九月二一日、ハ
ンデイのある人たちの名前が連記されたリストが、ベルリンからマリアベルグに送られて
きた。

そのリストには、九十七名を他の収容所へ移動すると書かれてあった。が、どこへ移動
するかは告げられてはなかった。くわえて、今着ている服だけでよく、他の衣類は保管す
るようにと書いてあった。親や家族には、一切知らせてはならないとも。

しかし、この時には、ハンデイのある人たちがすでに抹殺されているという事実は、各
施設の責任者などには伝わっていた。

マリアベルグの施設長も、リストに載った九十七人たちは、抹殺収容所へ行く候補者だ
と知っていた。そこで、彼は数名の人と一緒に、そのリストに連記されたハンデイのある
人たちを救おうと、シュツットガルトの内務省に駆けつけて抗議をした。

しかし、国の態度は硬いことがわかった。それでも、粘り強い交渉により、わずか三時
間のうちに新しいリストが作成され、施設で労働できる者は死のリストから外されること
になった。それによって、死の候補者九十七名が五十六名になったのである。

死の抹殺収容所へ連行される一〇月一日、施設側の粘り強い交渉で、さらに十五名の人
がリストから外されることになった。しかし、四十一名はナチ当局の用意した灰色のバス
で、抹殺収容所グラーフネックへと連行されてしまったのである。

この時のマリアベルグで働いていた職員たちや同居していた人たちは、どのような心境
に陥ったことだろう。想像を絶する。

私自身も、重度の知的ハンデイがある施設で働いていたこともあり、またダウン症の息
子ミヒヤエルと一緒に暮らしているなかで、この時の場面を想像しただけで、怒ともいえ
ぬ、深いむなしさと悲しさで、地に立っていることはできなかっただろう。

それから二か月経った一二月三日、こんどは一人の医者がマリアベルグに訪れてきた。
死のリストから外されたハンデイのある人たちを、再度調べに来たのである。

その結果、一二月一二日に再び三十名の連記された死のリストが送られてきた。そこに
は、明日移送バスが来るとも書かれてあった。こんどは、シュツットガルトの内務省に行
って交渉する時間がなかった。

翌日、灰色のバスがマリアベルグに来た。ここでも職員たちはなんとか交渉して、三十
名のうち、十名を死のリストから外してもらうことに漕ぎつけた。

彼らが連行された特別（抹殺）収容所グラーフネックは、マリアベルグから車で一時間
行ったところにあつて、以前はお城であった。そこで毎日数十名の人が殺され、煙突から
は絶えず煙が出ていたのである。

殺された人は、名簿でわかっただけでも一万五六四名にも及んでいる。彼らのほとんど
が、南ドイツ地方の施設と病院から、灰色に塗られたバスに乗せられ、グラーフネックに
運ばれたのだった。

二十五人乗りのそのバスは、窓ガラスがペンキで塗られ、タオルなどで覆われていて、
外からは内の様子をうかがうことはできないようになっていた。車内には、大抵運転手二
名と二人の介護人、それに女性を移送する場合は看護師が付き添い、介護人たちは反抗を

する人を押さえるための手錠を持っていた。

収容所に着くと、彼らはまず長さ六十八メートルの簡単に造られたバラック小屋に入れさせられた。もし騒いだり落ち着きがなかったりしたら、すぐに注射が打たれ、裸にされ、そこで数時間待ったあと、自分の名前が呼ばれたら、バラック小屋内の小さな室に入ることだった。

その室には一人の医師と三、四名の人がいて、一つの机の上には一人ひとりに関する書類が置いてあって、検査されていた。が、検査されたといっても、書類に記されてあることを確認する程度だった。

それが済むと、直ぐに他の小屋に移され、騒ぐ人にはモルヒネが投入され、真っ裸にされてから、

「シャワーを浴びるように」

と介護人から告げられて、毒ガス室に入るのだった。ガスをひねる人は医者に限られ、二十分間の密閉である。ガス室の隣は解剖室になっていて、脳解剖の場ともなっていた。死体はすぐに焼却炉に運ばれ、何人も一緒に焼かれ、わずか数時間で死の灰になってしまったのだった。

たしかに、バラック小屋には百のベッドがあつたが、それらはほとんど使用されなかった。また食事も摂る時間もなかったのである。

そのようにして、マリアベルグに住む人の二一〇名のうち、六十一名が生きるに値せぬ生命の名のもとに殺されてしまったのである。

彼らが連行されてから数日して、着用していた衣類がマリアベルグに送り返されてきた。同時に、家族には通知が届き、そこには適当に書かれた病名、たとえば、肺炎とか脳炎とか風邪、ひどいになると盲腸などで死んだと書かれてあつた。

しかし、盲腸を以前手術した者が再び盲腸で死んだという例もあつて、まったくでたために死んだ病名をつけていたのだった。本当は、毒ガス、モルヒネ、ルミナール、餓死で殺害されていたのだが。

この時の親の気持ちには、いかなるものか。自分の息子や娘がこの世に生存していなかったように扱われ、死亡通知が突然届き、狂うばかりだっただろう。ある親が、マリアベルグ宛に次のような手紙を書いた。

「愛する神様、一体このようなことが、なぜ可能なのですか。いつもにこやかで我慢強い我が子が、たちまちのうちにどこか知らないところへ連れ去られてしまい、私たち親さえも知ることができないなんて。世界が荒れ果ててしまったのでしょうか。わたしは病気になるってしまいました」

親の一部には、彼らが抹殺収容所へ連れ去られたと知っていた人もいた。

この安楽死作戦が一時中止になる一九四一年八月までに、判明している人だけでも、幼児や子供を除いて、ドイツ国内で七万二七三名が殺されてしまったのである。

一時中止になったとはいえ、この作戦はそのあとも実行されていた。その犠牲者は、少なくとも十万人以上と推定されている。ハンディのある人へのこの安楽死作戦は、六百万人とも言われるユダヤ人大量殺害への前段階だったのである。

このナチ政権下による、健康的ではなく、価値のない有用性のないと見られたハンディのある人への抹殺は、やっと一九八〇年代になって明らかにされはじめた。それ以前は、

タブー的なこととして公にされなかった。

一九八五年、ヴァイツゼッカー大統領が演説のなかで、第二次世界大戦中に殺害された精神病者および非人間的不妊手術について触れ、それがきっかけで、翌年の一九八六年に初めて、ナチ時代に断種を受けた人たちに、一時金五千マルクが支払われるようになった。安楽死作戦から五〇年経った一九九〇年には、多くの施設で、記念碑が建てられて、今までに公にされなかった当時の記録が公表されるようになり、人々へ語り継がれるようになったのである。

それによつて、市民はナチ政府下のハンデイのある人たちへの抹殺は、戦争中にだけ起こったことではなく、一九世紀後半からその芽生えはあったことを知ったのだった。

歴史が語っている意味は大きい。

ヒトラーによる安楽死作戦を、戦争を経験していない世代が知ることは重要だ。なぜなら、現代のようにバイオテクノロジー（生命工学）と遺伝子工学が発展するなかで、優生学的な考えである、美しく有用的な新しい人間が作りだされるようになったら、社会が混乱するからだ。それは、ナチ時代の安楽死作戦が示したように、社会が精神的混乱を迎えることになってしまう。

そもそも、いろいろな苦しみ、悩みを各自が持っているからこそ、私たちは他の人への思いやりが生じてくるし、そこに真のよろこびと生きる意味を見出すことができるのだ。一九八〇年代後半からドイツにも広がってきた、ある学者が考える生命倫理の思想に危険を感じる。そこには、自己決定意識や他の人へ働きかけるコミュニケーション能力、及び理性的能力を持つという人格（パーソン）の人だけが、生きるに値する価値を持っているとする考えが、あるようにも映るからだ。これこそ、ヒトラーのもとで行われた安楽死作戦に共通するように思えてならない。

それは、ハンデイのある人たちへの敵対行為ともいえる。彼らだけではなく、これは認知症の人や意識がなくなった人間や胎児にも適用されてしまう可能性がある。

以前、知的ハンデイのある人たちが暮らしていた施設で働いていた経験からして、どんなに重いハンデイがある人でも、他の人に働きかける能力を持っていると思っている。

それを感じないということは、その人が他の人に働きかける力が足りないからだ。人格ではなく、一人ひとりの命それ自体に、そうした働きかけが、どんな人にも潜んでいると、思うのだ。

この国で長く暮らしていると、歴史が社会と人間を創っていくという考えになるのである。テレビなどでは、頻繁にナチ時代に何が起こったかを市民に詳しく放映し、学校では、当時のことを、隠蔽することもなく生徒に教え、議論をさせているのを知る。そのようにしながら、この国は過去を克服してきたのである。

今のドイツの民主主義は、この暗い負の歴史から学んだところが多いだろう。歴史は、その時で終わるものではないし、生き返らせてこそ、私たちに明るい未来をもたらすのだ。なぜなら、歴史は生きているのだから。

ミヒヤエルと歩いていると、子供たちがよく彼を見つめる。ダウン症特有な顔付きをしているからだろう。

しかし、彼はそれにおかまいなく歩いて行くのだ。そればかりでなく、音楽好きで彼は、時々、出逢うストリート・ミュージシャンが奏でるメロデーに合わせて、気持ち良さそ

うに身体を動かして踊りだす時もある。

そうすると、まわりの人やミュージシャンは彼を見て、にこやかな顔になる。彼が自分の感情を素直に出し、周辺の人に安らぎを与えたとと言えるだろう。

しかし反対に、その情景を嫌う人もいるかも知れない。そのような人は、ハンディのある人を身近に見慣れてないこともあって、社会のなかにいる彼らの存在に、気づいていないからだろう。

私など彼らの存在に気づけば気づく程、関わり合えばあう程、そのことを通して社会のなかで、自分がどのように生きるべきかとの生きる意味を自分に問うことが多くある。とくに、ハンディの重い人は自らの語りかけが少ないこともあって、問いかけるこちら側の真摯な心が大切となるからだ。

彼らを目にすると、とかくその人の全体が、あたかもハンディを負っているかのように捉えられがちだが、決してそうではないのを、彼らからよく学んでいる。とくに、彼らの生きる力強さに、畏敬の念を抱く時がしばしばある。

それは日常生活のなかで、自分に出来得る限りの可能性を積極的に追及して、よろこび、幸せ、生きがいを見つけ、そこに生きる意味を見出している姿なのだ。私の友人で、脳性マヒの彼が、

「ハンディが、自分の生きる源泉だ」

と語ったことを、聴いたことがあった。

その姿から、成績、能力、競争などの目に見える価値に重きを置く現代社会で、目に見えない、その人固有の生きる意味を、自分のこととして考えさせられてしまったのである。

とくに、現代は自己の欲望を果てしなく無限に追い求め、他者との交わりのなかで、自分を制するコントロール力が弱くなってきているとも言えるだろう。そうしたなかで、彼らとの出会いは、大きな意味がある。

先日、テュービンゲン駅で、次のような光景に出遭った。

車椅子に乗った両足のない人が電車から降りようとしていた。それを見て、思った。彼は足のハンディと共存して、自分のありのままの姿で、己をコントロールして生きているのだ。彼からすると、私たちこそ、ハンディを持っていてと映っているのではないだろうか。なぜなら、自分の欲望、それに自己中心的な己を強く持つ私たちは、それに振り回されているからだ。

毎日一緒に暮らしている息子を通して、いろいろと自分を省みることが多くある。

妻が以前、私に語ったことがあった。

「わたしの姉は、あなたと知り合う二年前に三十八歳で生涯を閉じたわ。そのことは、あなたにも話したことがあったわね。その姉は、七歳までは普通の子供のように成長していたけれど、それ以後、急に筋肉の発達が止まり、今度は、反対に筋肉が縮まって不自由な身になり、車イスの移動となってしまったわ。でも、頭の働きは一般の人と同じだったので、学校を卒業したあとは、本屋に勤めるようになったわ。しかし、体の痛みと車イスに乗っての仕事だったので、長く続けることはできなかったわ。姉はユーモアに長じ、チェンバロに似たスピネットを弾き、きょうだい仲はよかったわ。その姉と暮らす中で、いのちの輝きと尊さを学んだわ」

「自分の場合も、彼らとの出会いから、一人ひとりのいのちの尊厳と相手を敬う心を学ん

だよ。それは、今も続いている、生きる源となっているね」

第十四話 あるがままの彼ら

ある日、ミヒヤエルと妻を車に乗せ、目的地のフィルダーシュタットへ向った。三十分ほどで着き、独特の形をした建物内に入ると、受付で五十歳くらいの人が私たち五名を待っていてくれた。

その人から、この建物についての簡単な説明を聞いたのち、二百五十名ほどの知的ハンデイのある人たちが働いている授産施設を見学することになった。

十四種類のどの作業室もあたたかい雰囲気は漂うなかで、彼らは働いていた。

その見学も一時間ほどで終わり、三百席近くはあるだろう椅子に私たちは座り、これからはじまるうとするイベントを待つことになった。ここに来た目的は、それを見るためだったのだから。

ホールの壁には、人智学の創設者であるルドルフ・シュタイナーの顔写真がかかっていた。ここは、アンソロポゾフィーの思想で運営されている作業所なのである。

今日の仕事を終らせた約二百五十名の人たちと一緒に、私たち三人は舞台上に目を注ぎ続けた。少しすると、幕が上がったと同時に、勢いのあるメロディーが流れ出した。

それが一分も続いていると、椅子から立ち上がって体を前後に横に動かしたり、飛び上がったたり、手を強くたたいたり、音に合わせて自分の体を動かす人たちが出てきた。

二曲、三曲とテンポの速いポピュラーソングが流れるにしたがい、大半の人が椅子に座ってはいないで、個性のあるアクションで自分を表現しはじめた。

舞台では、ドラムやキーボード、アコーディオン、エレキギター、バグパイプなどの楽器をもった十三名の人たちが力強い音を出して、演奏をしている。

マイクからは張りのある歌声も聞こえてくる。彼ら十三名のうち、十名は知的ハンデイのある人たちである。そのなかには、ダウン症の青年も二人いる。また、彼らに混じって、ジーパンをはいた牧師と高等学校の校長、それにTシャツ姿の養護学校の先生もいる。

演奏をしている人も、聞いている人も本当に楽しそうである。これほどまでも、ありのままの自分を出している人たちはないだろう。常に、ホンネのままで生きている彼らの姿だ。

以前、知的ハンデイのある人たちが住む施設で働いていた私だったので、この雰囲気とこの人たちと一緒にいると、過去の経験が一気に蘇ってきて、目が自然と潤んでくるのだった。

(ここには真の触れ合いがある。真の触れ合いがある)

心のなかでそう呟きながら、ビートの利いた音に合わせて、私も手をたたきはじめた。観客の多くは立ち上がって、リズムに合わせて手足を動かしたり、カップルでダンスをしたりしている。すばらしい情景だ。私自身ディスクで踊ったことはないが、ここにいる人たちは今それをして、体でよろこびを表現しているのである。

ここはドイツ国、ポップスの曲の合間に、モーツアルトそれにベートーベンの第九も歌われ、それに合わせて体を動かしている。

一時間の予定が、「アンコール、アンコール」の声に押されて、何曲も演奏されていた。

ここに居る人たち一人ひとりを知っていたら、さぞ楽しさも増しただろうと思った。私たちが案内してくれた人も、手をたたきながら横に座っている。この人が羨ましい。

忘却していた過去の時間、胸は熱くなってくるのだった。時間は昔に戻らないが、以前経験したことが新たな感動をもたらしてくれるのである。これが自分の原点だと思った。ミヒヤエルも立って体を動かしている。最高の時間をもらったと思いつつ、私も立ち上がって手をうち続けた。

第十五話 グループホームに移り住む

夕食を済ませてからソファに腰かけると、ミヒヤエルがテレビのスイッチを入れて、私の観たいニュース番組を回した。そのあと、彼はテーブルに置かれてあったお皿などを台所に運び、自分の部屋へ戻った。好きな歌のテープを聞くためである。

夕食後、私たち家族はよくゲームをして遊んでいたが、ここのことろしくなくなってしまった。果たしてこれでよいのだろうかと思うようになった。

そのようなある日、一通の封書が家に届いた。ミヒヤエルが月に数回、通っている福祉センターからで、知的ハンディのある人たちが自立を目指すグループホームをテュービンゲン市内につくる計画なので、関心があるようなら連絡してほしいとの知らせだった。

五年前から、ハンディのある人九名が街のなかで暮らせるようにとのプロジェクトがあるとは聞いてはいた。しかし、ミヒヤエルはまだその年齢ではないと思っていた。が、最近の彼の行動を目にしていると、そろそろ親から離れる時期がきたようにも思えるのだった。

昨秋、福祉センターが企画した一つのプログラムがあった。それにミヒヤエルは参加した。障がいのある人たちが大学生の学生寮に住み、約一か月の間、親から離れて、自立するための生活訓練をしたのである。

「ミヒヤエルは、結構たのしんでいましたよ」

指導してくれた人があとで話をしてくれた。ただ、自分で何を着たらよいのかわからない、髭剃りができない、トイレのマナーが十分ではない、自由時間に何をしたらよいのわからないなどの問題点もいくつかあったが、初めての経験にしては上出来とのことばももらった。

その実習を終えてからというもの、ミヒヤエルの行動に変化が見られるようになった。そのようなときに、センターから届いた手紙だった。

妻と話し合い、説明会に行くことにした。ミヒヤエルも一緒である。

センターまで行く途中、妻が、

「この説明会に、どのくらいの人に来るのかしら？」

と訊いたが、そのことよりも、ミヒヤエルがいなくなった生活を思うと、風船に針が刺さって、空気が次第に抜けていくような自分を感じはじめたので、返事をしなかった。

夕方の八時過ぎ、センターの小ホールに入ると、七十名ほどの人がすでに座っていた。

私たちが椅子に腰かけると同時に、説明会がはじまった。

まず、このプロジェクトを推し進めているセンターの責任者が、今までの経緯を話し出し、来年の秋にグループホームをオープンするので、それまでに親と専門指導者とが話し合って、よりよいものをつくっていききたいと抱負を語った。街の議員と行政官も出席していた。

センター側と親との質疑応答となった。もちろん、私たち親はいくつかの要望を出した。妻は地域の人たちと共に仲よく暮らしていけるような、そんなグループホームにしてほしいとのべた。

二時間の話し合いのなかで、私が感じ入ったことがあった。それは、七十歳のある母親が三十八歳の娘について語った内容だった。

その娘は五年前に、隣の街のグループホームで月曜から金曜日まで暮らすようになった。最初の一年間は、土曜に自宅に帰り、日曜の夕方にホームに戻るのを娘は嫌がっていた。しかし、父親が病身なのを見て、自分はホームで暮らさねばならないとわかった。

母親は語った。

「娘は今ではホームに戻るときは、また来るねと私たち親に笑顔で言うようになりました。これも娘の自立の一つなのです。娘が自立するようになれば、親も自立します。三十八歳の娘がミニロックをはきたいと希望すれば、以前のように、そんなものを着てとは言わずに、それを受け入れる親に、今はなっています」

正直に思っていることを話しているこの母親から、私は勇気と希望をもらったようになった。ミヒヤエルが親から離れて、そろそろ自立をする時期なのだ。

二十七年間、息子と一緒に暮らしてきた私たち家族。ミヒヤエルがいなくなったら、私と妻との生活が今後どのようなのかは、今はわからない。でも、ミヒヤエルは週末には家に戻って来ることだし、親としての新たな役割があるに違いない。子を持つ親の心に変わりはないし、息子との関係が続いていくことはたしかだ。それをありがたく受け入れよう。

それから半年して、彼は家から歩いて十五分ほど行ったところにある、三階建ての一般家族が住む三十所帯のアパートで暮らすようになった。

彼は一階で、同居人は五十七歳と二十四歳の二人。二階には、女性の仲間たち三人。三階には、男性の仲間三人。それぞれ階を違えてのグループホームなのである。

彼の部屋は十五平米の広さ。そのなかにベッドとソファ、それにタンスと机も並んでいる。それらは、妻と私、それに彼とで家具屋で選んだものばかりである。

赤色系統が好きなミヒヤエルなので、ソファと掛け布団の色は赤、カーテンも淡い赤色となっている。同居している二人とも、自分好みの家具を部屋に持ち込んだの暮らしている。

住居のなかには、トイレが二つあって、広い居間とキッチンが一緒になっていて、庭には、妻が植えた花が咲いている。

垣根の向こうには、ゆつくりと車が走っていて、どんな乗り物でも好きな彼はそれらの車を飽きもせずに見ることができるのである。

近くには、パン屋、肉屋、それに歩いて二分したところには、スーパーマーケットもあり、買物にも行ける。

ミヒヤエルがここで月曜から金曜日まで暮らしはじめた頃、彼はここでの生活になかなか慣れ親しむことができなかった。

自分の意思をことばでなかなか表現できないでいる彼なので、このホームに移り住んだ最初の数ヶ月間、時々、真夜中に起きては、部屋の電灯を朝まで点けっぱなしにした。居間の椅子をひっくり返したりする行為もあった。

また、土曜日に親の私たちの家に帰り、日曜の夕方にはグループホームへ戻ることになるのだが、ホームの手前百メートルまで来ると、彼の足は自然と止まり、動かなかったことが何度もあった。そのような時、一緒に歩いている妻が、「待つよ」と私に言うのだった。

彼と一緒に家で料理ができないし、食事と一緒にではないので、なにかと落ち着かない日々となった。食事中にフォークとナイフが止まり、何度もため息をついた。

その姿を見ていた妻が、言うのだった。

「ミヒヤエルの自立のためよ。あなたがそのような気持ちでいると、それが彼に伝わって、自立していかないわよ」

「それはわかるけど、寂しいものはさびしい」

声を落として言う私だった。

そのような日が数ヶ月続いた時だった。彼に新しい変化が生じてきたのである。

それは、土曜日に家に戻ると、彼の同居人とお世話してくれる人たちの名前を、よく口に出して言うようになったのである。その時は、上機嫌なのである。

また、グループホームに戻る時も、以前のように足は止まることもなく、テンポがより速くなってホームへ行くようになった。ホームでの暮らしが楽しくなってきたのがわかったのである。

作業所からホームに戻る四時半以後は、彼らを世話してくれる人たちと一緒にゲームをしたり、スポーツ活動もあるし、木曜日の午後には、いつも私がホームに行き、一緒に買物に出かけたりもする。

それに、九人の仲間のひとりが誕生日になると、皆が集まり、一緒にテーブルを囲んでケーキやジュースを飲んだりもする。その他にも、年に二回ほど近くに住んでいる人たちを呼んで、パーティも開く。学生ボランティアもよく来てくれるし、退屈しないのだろうと思った。なにしろ楽しそうだった。

それからしばらくして、ミヒヤエルの三十歳の誕生日となった。

彼は一年前からグループホームで暮らしていたので、そのホームの仲間たち八名と世話をしている人たち、それに彼の叔父や叔母や従兄弟たち総数三十数名を招くことになった。そうになると、家に全員を招くことは難しいので、もっと広いところであることになった。

マルクト広場に面した教会のゲマイデハウスの小ホールで、私と妻とミヒヤエルとで準備に取りかかり、招待した人たちが寄り集まって来たのは、日が暮れかけた六時過ぎだった。

夕食の支度は、妻が二日前からこの地方の郷土料理であるマウルタアシユを家で作っていたので、それを暖めるだけでよかった。サラダと食後のケーキは、参加者が持つてくることになっていた。

皆が揃ったところで、妻が一人ひとりを紹介し、続いてホームの職員たちの自己紹介と

なった。

そのあと、妻と私とで壁に映し出されたスライドの画像を見ながら、ミヒヤエルが生まれた浜松や六年間暮らした土浦の日々、それに彼が十八歳の時に、私と二人で十八日間日本を旅したことや、毎夏アルプスの山々に登っていることなどを語った。

ミヒヤエルが山道を一日十キロメートルは歩き、それも一週間続けていたと話すと、皆驚きの声を上げた。

夕食となった。妻が作った料理と、何人かが持ってきたサラダを食べながら、グループホームで世話をしている人がビデオで撮った、ここ一年間のミヒヤエルの生活ぶりのフィルムを観ての時となっていた。

それが終わると、今度は皆で歌を唄たり、ゲームをしたりしての時間となった。ミヒヤエルは、終始ニコニコ顔で各テーブルを回り、誇らしそうに、皆からもらった贈り物を披露していた。

九時過ぎ、ミヒヤエルたちがホームに戻る時刻になった。最後は全員で、彼のために歌を唄い、それもアンコールになった。ミヒヤエルは両手を上げて、「やった！」とのポーズである。

皆が帰り、私たち夫婦、それに知り合いの女性一名が残ったの後片付けとなった。

それも終わり、家に戻ったのは、夜も更けた十二時だった。ミヒヤエルはグループホームへ帰ったので、家のなかには私たち夫婦だけである。

「このような誕生日会が終わって、ここにミヒヤエルがいないのはすこし寂しいな」

妻にそう言った時、娘の結婚式で、育てた子が嫁いで行く際に抱く父親の気持ちは、このようなものではないのだろうかと思っただ。その私に、彼女が言った。

「ミヒヤエルは、すこしずつ自立しているわね」と。

第十六話 小指一本が

三十歳の誕生日から一年が過ぎた時だった。彼に一つの事件が起きた。それは、私が日本に滞在している間に生じたのだった。

夜の十一時過ぎである。ミヒヤエルがグループホームの自室で眠っていると、ある人が入ってきて、彼を起こし、急に顔を殴ったり、爪で彼の顔を何ヶ所も引っ掻いたりしたので。それに加え、右手小指を骨折する暴力を受けたのだった。

その人というのは、ミヒヤエルと同じ作業所で働いている青年で、グループホームの三階に住む友人の部屋を訪れ、夜遅くまでいて、十二時を過ぎても彼の家に戻らなかったのだ。

そこで、ボランティア活動をしている学生から、「自分の家に、帰るように」と言われたのでカッとなって、その友人の部屋を出て、一階で寝ているミヒヤエルの室に入って、意味もなく暴力を奮ったのだった。

グループホームには、夜の九時以後は、世話するはいないし、当直者もない。ただ、ボランティア学生二名が同じアパートの独自の部屋に住み、夜中の十二時と四時の二回だけホーム内を見回っているだけである。そのうちの一人が、ミヒヤエルの傷

ついた顔を見て、救急車を呼んだのだった。

彼は大学病院に直ぐに運ばれ、そのあと妻が家から駆けつけたのだった。

妻は警察官と学生から、その時の状況について聴き、ミヒヤエルと一緒に家へ午前四時過ぎに戻ったのだった。

その妻から事の経緯を電話で聴き、あと二週間の日本滞在を取りやめて、直ぐにドイツへ帰ることにしたのだった。

日本から家に戻った私に、妻が詳しく話してくれたあと、

「三週間ほど、彼はグループホームではなく、家にいることになったわ」と、言った。

翌日、ホームの職員であるフェーシングさんから詳しい事情を説明してもらったが、なぜこのようなことが、起きたかを十分に知ることができなかった。

それから二週間して、フェーシングさんに、

「二十三歳の青年、それに彼の親からも何の謝りのことばもないので、その青年及び彼の両親と話がしたい」

と、申し入れたのだった。

四日後の夕方、私たち夫婦とフェーシングさん、それに暴力を振るった彼と、彼の両親と会う機会がもたれた。ミヒヤエルは、家にいることになった。

その話し合いが終り、家に帰ると、妻が話しはじめた。

「なぜ暴力を奮ったかを、彼に直接訊いたが、自分ではわからないと返事をしたね」
「そうね。彼の父親が、高血圧の息子は精神病の薬を飲んでいて、よくカツとなると話してくれたけど」

「彼は、数回警察沙汰になるような暴力を奮ったことがあるのだね。注意人物だと警察官には、知られているらしいね」

「そうね。親も大変だと思っわ」

「父親は赤ら顔をして、アル中らしい話し方だったな。母親は一言二言のべたあととは、ずっと黙り続けていたし、病身のように見えたよ」

「かも知れないわ」

「フェーシングさんが彼に、『ミヒヤエルに謝ったほうがいいよ』と勧めたけれど、彼は黙り続けていたね。と、父親が、『謝ったほうがいいぞ』と声を出したら、彼は、『お詫びします』と私たちに言ったよね」

「そのほうが、二人にとつていいわよ。これから、作業所で会ったりするのだから」
「最後に、きみが、『半年したら、再び会いましょうよ』と言ったら、彼は肯いていたね。フェーシングさんも、それはいい案だと賛成したし」

「あなたは、彼にセラピーを勧めたけど、フェーシングさんが、『知的ハンディがあって、なおかつ精神病に罹っている人の場合、セラピーは難しいところもある』と応えたわね。とにかく、彼は一年間グループホームに来てはいけないことになったわ」
「そうだったね。幸いなことに、ミヒヤエルはなにことも引きずらない性格なので助かるよ」

「でも、気持ちの切り替えが難しいところもあるので、気をつけていきましょう」
私たちが会話をしている間、ミヒヤエルは未だ腫れ上がった顔で、パズルをしていた。

その彼のところに寄って、私たち夫婦は彼がパズルを完成するまで見ていた。

第十七話 小さなよろこび、大きな幸せ

グループホームで生活すようになって四年が過ぎた時だった。私が以前働いていた土浦にある学園の理事長から、

「息子さんが暮らしているグループホーム、それに、日本に来て、感じ、思ったことを職員の前で話してくれませんか」

と頼まれて、よろこんで日本へ行った。

マイクを手にして、皆の前で語った。

息子のミヒヤエルは、グループホームで月曜から金曜日まで暮らし、土曜日の昼になると家に戻り、日曜の夕方になると、歩いて十五分のホームへ行く日々となりました。

グループホームで生活しはじめた半年間は、日曜の夕方になってホームが近くなると、彼の足は止まり、前へ進まないことが何度もありました。しかし、半年が過ぎた頃になると、足取りは軽く、テンポも速くなってにこにこしながら、うれしそうに行くようになったのです。

その姿を目にして、グループホームで楽しく暮らしているのがわかったのです。一体、何がそうさせるようになったのだろうかと考えました。

彼は、はじめの半年間一緒に住む同僚の名前と、世話をしている人の名前をめったに口に出さなかったのですが、しばらくすると言うようになったのです。その時の顔は、いかにもうれしそうなのです。それを見て、また、ひとつ学んだようになりました。

一般に自立というと、身辺自立、経済的自立、職業的自立となりますが、それだけではない自立もあることに気づいたのです。

彼の住居には、あと二人の同居人がいます。三人の知的能力はさまざまで、年齢も六十二歳、三十四歳、二十五歳と異なっています。その三人が一緒に暮らす姿に、共生という語が当てはまると思ったのです。

ハンディの程度を異にしている三人が共に暮らすには、お互い許し合い、支え合うという寛容の気持ちが必要でしょう。そうしたなかで、ミヒヤエルは同居人と世話をしている人に積極的に働きかけて、関係を築いていたのです。

仲間との繋がりのなかで、楽しく暮らしている息子の姿から、人は共に生きることによって、よろこびを味わえるのだと思ったのです。他者との関係を持つことが、彼の自立だと知ったのです。

彼の場合、身辺自立や目に見える自立は未だできていません。しかし、他者との関係を持つことで心が安定し、今では家よりもグループホームでの暮らしに、よろこびを得るようになったのです。

日本でもドイツでも介護保険があります。しかし、ドイツでは介護を要するなら、高齢者だけに限らず、ハンディのある人たちにも、介護保険が適用されます。と同様に、介護をしている人が、年金をもらう年齢になったら、介護保険から年金を得ることが出来るのです。つまり、介護が仕事と見なされているからです。その恩恵を、わたしは享受してい

ます。

それに、息子が暮らしているグループホームにかかる費用約三十数万円は、全て公から出ていて、親の負担はまったくありません。また、夏や冬の長期に、グループでどこかに行く費用は、介護保険から出ます。

それら全て、ホームの財源となる金額は全てガラス張りとなっていて、息子本人の口座手帳に支払われ、それを親が管理しているのです。ですから、親の責任と役割は、以前と同様に大きいものがあります。でも、それがプラスとなっているのです。

また、親が亡くなったあとの、法的な手続きとして後見人制度もあって、息子の場合、きょうだいがいけませんので、妻の姪がそれを引き受けてくれることになっています…。

余談になりますが、今回の日本滞在中、わたしが生まれ育った東京、それにいくつかの地を訪れ、毎日様々な人たちと会い、若い人たちとも語り合う機会がありました。その際、あることが気になったのです。それは、『個』ということでした。

わたし自身、長い間ドイツの社会で暮らしているので、この個を深く意識しながら生活しているし、また、妻がドイツ人なこともあってか、多くのドイツ人とコンタクトを持っている。そのような状況下にいますと、一人ひとりの『個』についてよく考えさせられるのです。

だれでもどのような人にも、その人独自の存在があつて、それは他の人が決して代わることはできません。そのことを自覚すればするほど、毎日の日常生活のなかで自然とよろこびが湧いてくるものです。よろこびは、自分自身に近づけば近づくほど大きくなります。

今のドイツの民主主義の礎になっているのは、人権を個の権利として尊重しているからで、そこには自立という、『自己実現へ向けて、主体的に生き、実践をする』との考えが軸にあります。

また、実践をするからには、幾つかの選択肢から自分で判断し、責任を引き受け、多少の冒険も伴うなかで、行動することにもなります。それだからこそ、身も震えるようなよろこびを肌で感じ取ることができるのです。今の状況下で、尻込みをしないで生きていくことは大切です。

わたしは今も主夫をしながら、それを体験しています。それに、自分の『個』を大切にしながら暮らしていくと、他者の『個』をも大切にしようになるのです。多分、そこには、苦しみや悲しみの人間的共感が存在するからだと思うのです。

さらに、考えたことがあります。それは、日本では至るところモノと情報が溢れ、過剰気味だったことです。そうしたなかで、自分で選択し、自分にあつたものを判断するのは大変なことです。人の不幸は欠乏から生じるのではなく、過剰によって起るのではないかと思つたほどです。

それに、携帯、スマホを歩きながらも、また、電車のなかでも操作しているのを目にしていると、これで果たしていいのだろうか。人との真の触れ合いができるのだろうか。人間は社会的存在だし、これで触れ合いのある社会となっていくのだろうか。人との関係を浅く広くとはなっても深くはなれずに、自分の心の内をこの触れ合いのなかで表現していけるのだろうかと思つたのです。

わたしの家族は携帯もスマホもない暮らしをしているから、そのような考えに至つ

たのかも知れませんが。

もう一つ、考え続けたことがありました。それは、若者たちのなかで、数は多いとは言えないでしょうが、暮らしのなかで、自分の役割と目標を見つけていないように思えたのです。自分独自の『個』を、表現してないように見えたのです。ドイツに住んでいる男女の青年とは、違うように映ったのです。いつもまわりを、また、見られる自分を気にして、自分の考えを表現してないように思えたのです。

そのような青年、とくに、男性に言えることは、生育する過程で、家庭での父親の存在意義を感じ取っていなかったからではないでしょうか。

日本の父親は、家庭のなかで自分の存在意義をしっかりと捉え、それにパートナーシップをしっかりと築き上げる必要があると思ったのです。

親同士が仲良くハッピーなら、子供も幸せを感じ、自分の将来に肯定的なものを見出すのではないのでしょうか。

女性と子供が、伸びやかに穏やかに暮らしていくためにも、父親のしっかりとした意識が大切です。

それに、日本では地域創生、少子化問題、女性の地位向上の問題などが問われていますが、そのどれにも関係しているのが男性の意識変革だと思うのです。

男性、および父親が家庭生活及び地域生活のなかで、居心地良い場を創っていけば、女性と子供が暮らし易い社会となるのではないのでしょうか。

働いてお金と地位を得ても、それがその人の幸せになっているのかどうか。『もっと、もっと』という思いになるのではないのでしょうか。

わたしはそれよりも、その人の独自の存在が「在る」ということに生きる意味があると考えるのです。一人ひとりが生きるなかで、苦しみや悲しみを共感し合うためにも、『個』を自覚することが大切に思えるのです。

そのような考えを持つ男性が多くなっていくためにも、国や政治家は人間を長時間働かせないシステムや社会保障制度を充実させてほしいのです。

わたしは、ハンデイのある子と暮らしています。そのなかで、今も常に思っている自分なりの思いがあるのです。それは、短いことばで言えば、

『小さなよろこび、大きな幸せ』

です。身近に体験していることに、何らかの意味を見つけ出し、それに感謝の心を持つば、それが幸せとなると信じているのです。

第十八話 寄り添う親たち

私の家に一年間に、日本から数名の人たちが訪ねてくる。そうすると、彼らと一緒に食事をしたり、どこかへ案内したりする。

先日も一人のある若い女性が来て、五週間滞在していたことがあった。ちょうど、ミヒヤエルが仲間と一緒に、二週間のギリシャ旅行をしていた時だったので彼の部屋で寝泊りをしていた。

ミヒヤエルが旅行から家に戻ったあとも、彼女は家にいたので、彼は居間のソファアを

ベッド替わりにして寝ていた。

彼女が次の目的地へ向ったあと、私と妻は話し出した。

「日本から来たあの女学生、もうすでにある種の国家認定資格を持っていると、誇った様子もなく語ったわね」

「そうだったね。大学に通いながら、よく取得したと思うよ。まだ、二十歳そこそこだよ。たいしたものだ。一般の人とは違う、知能指数が高いのを感じたね。それも、脳のある一部が、とくに、優れているように思えたよ」

「わたしも、そう感じたわ」

「家に来たとき、『自分は、アスペルガー症候なのです』と、先ず言ったよね」

「そうだったわね」

「彼女と話をしていると、会話が、何か噛み合わなかったところがしばしばあったよ」

「そうだったかしら？」

「きみには、彼女が話したことをドイツ語で伝えていたが、訳しづらかったところがしばしばあったね。多分、彼女は聞く側の身になって話しをせず、相手の言うことに耳をそう傾けなかったようにも見えたよ。そのようなことで、コミュニケーションが、スムーズにいかなかったところもあったように思うのだ」

「自分の存在を、そのまま出しているだけよ。あなたが困惑を感じたら、それはあなたの問題よ」

「そうかもしれないな」

「そう言ってから、続けた」

「ミヒヤエルを含めて、私たちがパズルとか、絵合わせゲームを彼女と一緒にすると、ものすごく強かったね。特別な能力を感じたよ」

「そうね。その能力を磨いていけばいいわね」

「それには、まわりの人たち、とくに、親や兄弟たちが彼女の存在を見守り、後押しをするのが大切なのだろうな」

「そのことは、ハンデイの子を持つ私たち親にも言えるわ。先ず、親がわが子のマイナ斯的なこともプラス的なことも認め、受け入れることよね」

「きみの言うとおりだ」

「私たちは、アスペルガー症候群という語を知らなかったわね。彼女が私たちの家に来る前、彼女の母親があなた宛に長い手紙を送り、そのなかで私たちは、初めてそれを知ったわよね」

「その長文の手紙に、娘が半年間ドイツのフライブルク、テュービンゲン、ハイデルベルクでドイツ語を学びたいとの趣旨が書かれてあって、娘の希望をぜひ叶えさせてあげたいと記されていたからね」

「わたし自身、アスペルガー症候群の人と接するのは初めてだったので、家に滞在してどうなるかと心配したわ。でも、あなたが彼女のお母さんが書いた手紙を、一語洩らさず、わたしに伝えてくれたことがよかったわ」

妻は、さらに続けた。

「昔、おもちゃライブラリーで、ハンデイのある幼児や自閉的傾向のある子供を持つ親たちと話したりしているうちに、お互い共感しあい、支える気持ち、より増してきたこと

があつたわね」

「そうだったね。その親たちと、今も年賀状などで連絡を取り合っているよ。日本に行ったとき、会ったりもしているからね。当時を想い出すと、おもちゃを通して子供たちと遊び、コミュニケーションをとろうとしたよね。そのようにして、彼らが居心地のよい場、寛げる場となるようにと、親たちとよく話し合ったりしたね」

肯いた彼女に、さらに言った。

「彼女が家に滞在するようになって数日後、彼女の母親と二回ほど電話で会話をして、さらに、よくわかったことがあつたよ」

「何が？」

「娘の願いを叶えさせてあげようとするには、相当な勇気が必要だったことをね。たしかに、彼女とのコミュニケーションには、ちぐはぐさはあつたが、娘のより優れた特性を生かそうとしていた母親だと思つたね。娘を受け入れ、あなたは今のそのままでもいいから、その思いで外国へ行ってらしゃいと言つたものを感じたよ。勇気がないとできないことだよ。と同時に、娘にも勇気がないと、外国に半年に亘って滞在できないだろうし」

「そうね」

「真摯に、真剣に生きていこうとする娘に寄り添う母親だと思つたね」

「親と子が、お互いに認め合っている姿とも言えるでしょうね」

「彼女は、『ミヒヤエルさんの気持ちだが、よくわかる』と何度もいつたね」

「ええ、そうだったわね。何か共感するものがあつたのかしら？」

「よくわからないけれど、二人とも感受性はより強いね。ミヒヤエルの場合、人の動作などをよく見ている、物まねがうまいよね。彼女の場合、絵合わせゲームなどの視覚的記憶力は抜群だったね。反対に、二人とも、耳から入ったことを理解する力は弱いね。そこに共通点があるかもしれないな」

さらに、続けた。

「とにかく、彼女は自分を素直に出しているのだろうか」

「そうね」

「ハンディのある子を持つ親として、私たちはわが子が暮らし易いよう行動しているが、大切なことは、わが子が何を必要として、どんな支援ができるかを知ろうとすることだよ。愛情の強さのあまり、子を理解しない親もいるだろうし。親というのは、わが子がハンディがあるうがなからうか、弱い立場の存在のようにも思えるのだ」

「そうね。でも、そうだからこそ、そのなかで生じるよろこびも一層大きくなるわね」

「実際、ミヒヤエルを通して、また、社会のなかでなかなか適応することができない人たちによつて、私たちは生かされていることを知るし、救われているのを年齢とともに感じたりするね。まわりにいる困った人を世話したり、援助したりしていると、こちらが彼らから力をもらい、生き生きとした気持ちにさせてくれるから不思議だね」

「そうね」

「ミヒヤエルと暮らしていると、ありがたさを感じるよ」

「それは、わたしも同じよ。そういえば、以前、あなたを頼って、癩癩の発作をもつた人が、日本からひとり訪れてきて、テュービンゲンに八ヶ月間滞在したことがあつたわね」

「ああ、自分より一歳年上の人だったね。私たちの家に二週間過ごしたあと、歩いて数分

のところにあつた、きみの知人宅の貸し部屋で暮らしていたよね。夕食は大体私たちと一緒に摂っていたけれど」

「夏の休暇も、私たち家族と一緒に過ごしたわね」

「そうだったね」

そう言つてから、続けた。

「テュービンゲンに滞在中、彼は、何回も発作を起こしたね。ネッカー橋の上で二回ほど意識がなくなり、大学病院に運ばれ、また、自転車に乗っていたとき、交差点のところで他の自転車とぶつかつて救急車で運ばれたりもしたね。病院で意識が戻つても、ドイツ語がそうできなかつた彼だったので、自分で説明するのに苦労していたね。私たちが病院へ迎えにいくと、ホツとした表情を浮かべていたからな」

さらに、続けた。

「癲癇発作の身で、あこがれのドイツに住みたたく、やつて来た人だったね。東京の山谷で暮らすホームレスの人たちに、数年間奉仕活動をしていた時期もあったとも語つたよね。困つた人を助けようとする熱意に、頭が下がつたよ」

「人は、困つた人に援助するようになつてきているのよ」

「そうだろうな。彼の勇氣と強い意思がないと、こちらに来られなかつただろうし」

そう言つたあと、続けた。

「八ヶ月間の滞在中に、日本から老いた母親が二回ほど訪ねてきたよね。わが子を見守る姿に、胸が打たれたよ」

「それは、わたしも同じだったわ。彼、無口な人だったけれど、よく笑顔を見せていたわ」「そうだね。以前、ミヒヤエルと二人で日本を旅したとき、彼の住んでいる九州の家にも寄つたことがあつたよ。そのとき、ご両親から大歓迎されたね。そのご両親から、数年前わが子が他界したとの知らせが入つたね」

「そのことは、あなたから聞いたわ」

「とにかく、彼は自分に正直に、誠実に自分の生を生き抜いた人だったと思うよ」

彼女は、耳を傾けていた。

「ダウン症候群の人を、アスペルガー症候群の人を、ハンディを負つていたりとか病気を有しているとかで捉えるはなく、一人ひとりの尊い命を有す、特徴のあるキャラクターを持つ人だと捉えるべきだね」

「そうよね」

「その人を尊厳のある存在として受け入れ、その人に寄り添うことが大切だね」

「同感だわ」

妻は、肯いた。

第十九話 広島からのメッセージ

テュービンゲンの平和運動グループで活動しているドイツ人から、電話がかかつてきた。「昨年の八月六日も、日本の人たちが鶴を折つてくれて、道行く人にそれらを手渡してくれましたね。今年は何をしようかと考えているところなのです。いい案がありますか」

それを聴き、ある一つの考えが浮かんだ。それを実行するために、再び広島へ行って、あることをお願いしてみようと思った。

広島駅から市電に乗って、原爆ドーム前で降り、少し歩いて行くと、無残な姿になったドームが見え出した。その前で立ち止まってから、平和記念資料館に行き、地下一階の啓発担当室に入り、その職員に私の望みを伝えた。

「ええ、それはできますよ。ドイツ語に訳した大きなポスター三十枚がありますので、それを持っていつてみてはどうですか。ドイツ語でのDVDもありますし」

「本当ですか。それは、ありがたいです」

「毎年、それらを使用してもいいですよ。返還する必要はありません。それらのポスターがドイツの人たちの目に留まってくれれば、私たちはうれしいのですから」

対応してくれた女性は、にっこりした顔で言った。

「ポスターを包装するまでには一時間半はかかるので、もう一度ここに来てください」

「そうですか。それでは資料館内を歩いてきます」

以前、広島を訪れているので、何がどこに展示されているのかを知っている。関心が強くあったところを再び見て廻ってから外に出て、原爆死没者慰霊碑の前に立った。

ハニワ型の屋根の下に置いてある石棺には、「安らかに眠ってください 過ちは繰返しませぬから」と刻まれている。

その文字をじっと見つめた。と、これは一体、誰が主語となっているかとの考えとなった。主語がない文でも通用する巧みな日本語。先ほど、対応してくれた女性に訊ねてみようと思った。

一時間半が過ぎたので、資料館の啓発室に戻ると、ポスターは包装されてあった。先ほどの女性に訊ねた。

「『過ちは繰り返しませぬから』との文の主格についてなのですが」

「あれは、全世界の人たちを指します。米国ではアメリカ人が、日本では日本人が、他の国ではその国の人が、未来を含めての声を出しているのです。英語で言うところ、Weとなります」

「では、米国では、このような資料館みたいな建物がどこかに在るのでしょうか」

「アメリカに在住の日本人が、そのようなものを造る計画を企てようとしたが、建てるまでには至っていません」

「そうですか」

「そう言うことから、また、訊ねた。」

「それでは、日本人によって実行された真珠湾攻撃に関する詳しい資料館みたいなものが、米国には在るのでしょうか」

「ハワイに建っていると聞いています」

「日本にはないのですか？」

「さあ」

彼女は首を横に振った。

「そうですか」

彼女にお礼をのべて、三キログラム以上はあるポスターを両手で抱えて外に出た。

平和記念公園を歩きながら思った。やった方の加害者は、その行為を正当化して、忘れ

がちになりがちだが、やられた方の被害者は、その行為を何かと憶え、次の世代に伝えていこうとしているのだ。

その点、ドイツではどの考えとなった。

ドイツのように強制収容所を今も残して、ナチ政府が犯した残忍な悪の行為を、次の世代にしっかりと伝えていく国もあるのだ。

ドーム付近の近くから、妻に電話をかけた。

「ポスター三十枚とDVDを、手にすることができた」

「ほんと、よかったわね」

妻の弾んだ声だ。ここまで足を運んだ甲斐があったと思った。八月六日教会前の広場で、これらのポスターをパネルに貼って、道行く人に見てもらおう。戦争のない、核爆弾のない世界を願うがゆえに。

一九六七年に、日本政府が公表した非核三原則がある。

「核兵器をもたず、つくらず、もちこませず」

今も国是としている私たち日本人だ。

戦争を避けるためにも、広島と長崎に落ちた原爆のことを、世界に伝えていかなければならない。と同時に、加害者体験をも伝えていかねばならない。

テュービンゲンに戻ると、妻が、

「いつか、わたしも広島を訪れてみたいわ」

と、言った。

第二十話 三人で日本滞在

ミヒヤエルが三十九才の誕生日を迎えた日だった。

「三人で二週間ほど日本に滞在しよう。広島にも行こう」

と妻に言うと、彼女はよろこんだ顔を浮かべた。

その日が来るのを、私たち待った。

三人とも必要なものが入ったリュックサックを背負ってから、家を出て日本へ出発した。十二時間で関西空港に着き、荷物検査場を出たあと、学生時代だった頃の山仲間と会い、大阪で二泊してから妻が希望した広島へ向った。

新幹線の列車に乗って三十分ほどすると、三人ともお腹が減ってきたので、新大阪駅構内で買ったお弁当を食べ出した。

ご飯を口に入れながら、

「お弁当を食べて、日本人を知る」

と私がつぶやくと、妻も、

「ご飯の上ののっている様々なおかずの色合い、きれいかわ」

と、言った。食べ終わると、彼女が、

「このお弁当箱、気に入ったわ。ドイツに持っていくわ」

と、声を出した。

広島駅に着き、インフォメーションセンターで宿探しをはじめたが、地元チームの野球試合があるので、広島市内の安いホテルはどこも満室である。ただ、東広島駅にあるのを知り、そこで三泊することにした。うれしいことに、夕食に出るカレーライスが無料なのである。

夕方、そのホテルに着き、ミヒヤエルの好きなカレーライスを食べ出した。お腹が減っていた私と彼は、お替りだ。そのあと、三人で近くを散歩して過ごした。

翌朝、ホテルで食事を摂ったあと、広島駅へ向った。

近代的な建物内の駅舎で降りてから、路面電車乗り、目的の停留所で降りた。

歩き出すと、前もって妻に公園内に何かがあるかを知らせていたので、それが目の前に現われることもあって、彼女は弾んだ足取りである。

私たちは、少し行ってから立ち止まった。隣にいた彼女に、

「これが、原子爆弾によって大破し、全焼したドームだよ」

と、説明した。彼女は肯いて聴いていた。

そこを通り過ぎて、さらに進んだ。川に架かっている橋の上に立つと、向こう三メートル先で、一人の女性が通り過ぎていく人たちに何かを渡していた。ミヒヤエルはその人から、シッポを引くと羽が動く折り紙の鶴を一羽貰った。

私がそれを動かしていると、妻が

「今年の八月六日は、この鶴を、テュービンゲン市民と一緒に折りましょう」

と、言った。さらに歩いて行くと、一つの像が見えた。

「高さ九メートルの上に、折り鶴を捧げ持つ少女ブロンズ像だよ。千羽鶴の塔と呼ばれているね」

そう言うってから、その像のモデルとなった佐々木偵子さんについて妻に話した。

さらに進んで行くと、石造りの小さな屋根前に出た。

立ち止まり、手を合わせ、目を瞑った。隣にいた妻に、

「あの奥に、燃え続けている炎は、『核兵器が地球上から姿を消すまで、燃やし続けよう』との願いを託しているのだよ」

と伝えたあと、今度は大きな建物前に立った。

「ここが、平和記念資料館だよ。平和の尊さを考えさせられるところなのだ。今は工事のため、全館見ることができないが」

私たちは、館内に入り、壁に展示されている写真や資料のパネルを目にしながら歩いていた。

少しすると、妻が被爆者証言ビデオコーナーのところで立ち止まり、テレビの画面に目を注ぎはじめた。

映し出されてくる生き証人の話しに興味を持った彼女は、いくつも並んでいる椅子にひとり腰かけ、耳を傾けはじめた。ミヒヤエルは日本語も英語も理解できないので、妻が画面を覗いている間、私と一緒に館内を廻ることになった。

二十分ほどしてから、妻がいるところに戻ると、彼女はまだ画面を覗き続けていた。私たちが来たことを知った彼女は、椅子から立ち上がり、再び三人で館内を歩き出した。

一通り見学してから外に出ようとすると、彼女が、

「生き証人たちが話す内容に、心が動いたわ。あそこで、もっと話を聞き続けていたか

ったわ」

と言い、さらに続けた。

「館内のいくものパネルを見ていたけれど、以前、あなたがわたしに話してくれた、なぜ原爆が落とされたかを詳しく説明したパネルがなかったように思うの。わたしは、そのことをもっとよく知りたかったのに」

「いや、あったよ。きみが見落としたのだろう。それなら、案内所にいた人に、きみの知りたかったことについて、訊ねてみてはどうだろうか？」

「そうね」

早速、案内所に行き、妻が知りたがっていた内容を話すと、英語を話すボランティアの人が、彼女に詳しく説明してくれることになった。

彼女は椅子に腰かけ、その人と英語で話しをはじめた。ミヒヤエルは退屈になったので、また、私と一緒に館内を歩き廻ることになった。

三十分して、妻のところに戻ると、彼女はその人とまだ話をしていた。

その二人の会話が終わったあと、私がその人に、

「アメリカにも、このような資料館があるのですか」

と、訊ねた。

「いや、ありません。今まで、アメリカは正しいことをしたとの認識で、ずっといましたので。でも、ここ十年来、原子爆弾を落とすことは、愚かだったと思う人も、出てきたようですが」

彼は、さらに続けた。

「昨年の追悼式には、アメリカのオバマ大統領が、はじめて出席しました。戦争は無くなりませんが、核戦争はなくなると、私は信じているのです」

それを聞いた妻は、その人に、

「毎年八月六日、私たちが住んでいるテュービンゲンでは、この日を『広島の日』として、街の広場で平和運動をしています」

と、言った。

「それは、よい活動ですね、続けてください」

それを聞いた彼女は、力強い声で、

「ここに来て、また、新たな気持ちで、やっつけていきます。戦争のない世界を目指して。このような悲惨な出来事を、世界のどこでも再び繰り返さないように」

と、言った。

その二人の会話に、私も加わった。

「核兵器廃絶を訴え続けていきます。世界でこのようなことが、再び生じないように願います」

私たちはかなり長い時間、この公園にいてから、再び電車と列車に乗り、ホテルに戻った。

翌日、食朝を済ませ、広島駅前から再び路面電車に乗り、潮の香りがするところへ向かった。

少ししてから、電車を降りると、目の前に大きなフェリーが浮かんでいた。

それに揺られながら、向こう岸まで渡り、海岸沿いに歩き出した私たち。と、何頭もの鹿が食べ物欲しさに、こちらに寄ってくる。ミヒヤエルは犬が近くに来ると、避けるが、鹿は怖くないようだ。

「それにしても、鹿の数がなんと多いのだろう」

妻にそう言ったあと、

「海に浮かぶ大鳥居、それに朱色に囲まれた回廊の厳島神社など、この宮島には、伝説に残る史跡がいくつもあるよ」

と伝えると、

「島全体が、歴史なのね」

と、言った。

しばらく三人でのんびりと歩いていた。

隣の妻に、話しかけた。

「昨日の見学のことが、頭から離れないのでは？」

「ええ、朝早く目が覚め、それからというものは、広島でのちを落とした人たちのことを、考え続けていたわ。あそこで、苦しみ、悲しみを体験した人の生を」

「歴史の鏡には、苦しみや悲しみの姿が、まざまざと映り出されていたよね」

「そうね。それを、今度は未来にも伝えるためにも、あの公園は、尊いものとなっているわ」

彼女は立ち止まってからそう言い、再び歩き出した。

「どこを歩いても、大勢の人ね」

「そうだね。今日は日曜日、それに母の日なので、家族連れが目立つね」

私たちは島周辺を歩いたあと、再びフェリーに乗った。

海をほとんど見たことがなかったミヒヤエルは、風に揺られて輝いている海面を眺め続けていた。どんな乗り物でも好きな彼ので、それだけで楽しいのだろう。

船から降りて、広島駅へ向っている電車内で、隣に座っている彼女が私に言った。

「日本の車掌さんは、お客さん一人ひとりに親切だね。優しいことばかけをしているわ」
ホテルに戻ったあと、二人に、

「さあ、明日から、東京だ」

と、いつもよりも高い声で言った。

朝食を摂ったあと、新幹線に乗り、生まれ育った地へ向った。私の胸は、高鳴りはじめていた。

東京駅に着くと、日本から年に一回は私たちの家を訪れていたマリが、ホーム上で笑顔を浮かべながら手を振っているのが見えた。私たちは手を振り返した。妻はマリと頬と頬を合わせた。

再び、リュックを背負い歩き出した。隣にいるミヒヤエルに、

「今日から三泊する東京セントラルユースホテルへ行くよ」

と伝えると、彼は肯いた。

今度は地下鉄線の電車に乗り、飯田橋駅で降りると、目の前に高層ビルが見えた。そこに入り、エレベーターで十八階にあるユースホテルの受付へ向った。

カウンターで白いシートを手にしてから、部屋に入った。

正面には、大きな窓があつて、そのわきに置いてあつたソファアに腰かけた私たち四人、窓から外に目を向けると、眼下に東京の景色が望めた。まさに大都会の展望である。

四人ともその景色を眺め続けたあと、二段ベッドにシールをかけはじめた。ミヒヤエルと妻は下、自分は上だ。ミヒヤエルのベッドを整えるのに、マリが手伝ってくれる。

それが終わると、マリがユースの食堂へ行き、数分後、熱いコーヒを持ってくる。それを飲みながらの会話となつていった。

しばらくすると、ミヒヤエルのお腹がグーと鳴った。それを耳にしたマリが、私たち三人に、

「少し早いですけど、どこかで夕食にしましょう」

と言ひ、妻に、

「何か、食べたいものはありますか」

と、訊いた。

「まだ、おそばを食べてないわね」

「では、ビル近くにお蕎麦屋さんがあるから、そこに行きましょう」

私たちをその店に入り、トロロそばを食べ出した。「美味しい、おいしい」と声を出しながらの食事である。

夕食を終えたあと、マリは自分の住いに帰っていった。

私たちは十八階の部屋に戻り、ミヒヤエルに、

「寝るまでには、まだ時間があるから、これから一緒にお風呂に入ろう」

と言うと、彼は肯いた。

十九階にある広い浴室には私たち二人だけである。

広い湯船に浸かりながら、目を瞑り続けた。そこから出て、ミヒヤエルに、

「背中を流してほしい」

と言うと、「ヤア」と応えてから、私の背を撫でるよう洗った。

「もっと強く」

そうすると、ゴシゴシと力を入れる彼だった。

再び、湯気が昇っている湯船に入った。

「やはり、日本の風呂はいいな」

自然と声が出た。

私たちが部屋に戻ると、妻はいなかった。

少しすると、戻ってきた。

「このビルの下に、本屋があつたので、そこに行つたわ」

いつもより大きな目をしてそう言い、さらに続けた。

「三十九年前に、日本に住んでときに買った五冊の絵本が、今も売られてあつたのには、驚いたわ。それらの本をかうかどうか迷つたわ」

「もちろん、きみが購入したいなら、そうすればいいのでは」

「そうね。その本は、発行して一九七刷、九八刷など、今も日本の子供たちに読まれていのよ。いい絵本なのね」

そう声を出してから、部屋を出て、また本屋へ向かった。昔、幼稚園の先生をしていた

彼女だった。

翌日、ユースの食堂で朝食を摂ったあと、私の兄が住んでいるところへ三人で向った。兄夫婦と会ってから、今度は姉と妹、それに八十九歳になる伯母さんたちとの昼食となった。

その食事を終え、私たち三人は父と母が眠っているお墓を訪れた。手を合わせ、ずっと目を瞑り続けたあと、隣にいた妻に言った。

「二人とも、七十歳を前にして亡くなってしまった。自分の歳には、もういなかった。もつと生きていてほしかった。残念でならない」

墓地を出たあと、二人を連れて近くにある浅草の雷門を訪れた。

そこに着くと、外国人が多く、至るところで写真を撮っていた。その姿を見ながら妻に、「歩いている人の九割近くは、欧米人や中国人や韓国人、それに南アジア人だろうな」と言うのと、

「わたしが、日本に住んでいた時分とは違うわ」と、応えた。

彼女は、通りで軒を出しているお店の前で立ち止まっては、日本模様の大きな財布をいくつも買っていた。私といえば、好きなせんべいや饅頭の匂いを嗅ぎながら歩いていた。三十分ほどすると、ミヒヤエルは疲れたようで、ゆつくりと歩くようになった。それを目にしたので、「ユースに戻ろう」と二人に言った。

宿に着いたあと、私ひとり夕食の食べ物を買うために外へ出た。

大きな窓に映る夜景を見ながら、先ほどコンビニで購入したおにぎりと稲荷寿司を食べはじめた。それが終わると、妻が言った。

「このビルの下で、百円ショップの看板を見たわ。ちょっと寄ってみたいわ」

「よし、それでは三人で行ってみるか」

彼女は、うれしそうな表情を浮かべた。

お店に入ると、妻が声を上げた。

「ここは食料品から文房具、その他、どれも百円なのね」

ミヒヤエルはおにぎり用のパック五つ、彼女は小さなカップを買った。

お店から出ると、妻が言った。

「こういうお店はいいわね。一つひとつ、手にとって見ているだけで、楽しくなるわ」

翌日も昨日と同様に五月晴れである。ユースを出る前に、ミヒヤエルに話した。

「今日は、数名の人と、時間を違えて会うことになっているよ。その人たちは、テュービンゲンを訪れたことがあったので、顔を見ると、きみはわかるかもしれないな」

合わせて七名の人たちと会ったが、彼は名前など忘れていた。でも、二人の顔は覚えていた。それというのも、そのご夫婦は、家に何回も来たことがあったからである。

そのご夫妻と別れたあと、私と妻は立ち止まり、今も手を振り続けている二人に、何度も手を振り返した。妻に、言った。

「八十四歳と八十六歳のあのご夫妻と、花を媒介にしてコンタクトが今も続いているね。テュービンゲンの植物園にも一緒に行ったし。日本から花に関する本が、数冊送られてきたこともあったし」

「そうだったわね」

「日本で会うたびに、ドイツで咲いている花の種を、渡したりもしていたからね。もうドイツには、もう行けそうにもないとも言ったね。ご夫妻がこちらを見続けていた姿に、なんとも言えぬ気持ちになったよ」

彼女は肯いた。

翌日、再び列車に乗った。

しばらくしてから、窓に映る景色を眺めている妻に話しかけた。

「あと三十分で、私たちが暮らした土浦だ。きみにとって、思い出の多い地だね」

「もちろんよ。彼が幼稚園に通い出し、特別支援学校には一年半近くいたし。合計六年半もいたところだわ。それに、あなたのおもちゃライブラリーに、彼を連れて、週末には行っていたし」

「そうだね。そこで、坂本九さんとも会ったりもしたね」

「『幸せなら、手をたたこう』の歌を、今も覚えてるわよ」

彼女は、小さな声で唄い出した。

「土浦の地は、わたしにとってもいろいろな思い出があるよ。昔の知人たちと話しをした
りするのが楽しみだ」

「それは、わたしも同じよ。幼稚園や支援学校で知り合ったお母さんたちと会えるし、とくに、ミヒヤエルと同じダウン症の子を持つお母さんから、何度も家に招かれたことがあったでしょ。そのお母さんに、当時、なにかと助けられていたわ。再会できるのがうれし
いわ」

「E夫人のことだね」

「ええ、そうよ」

彼女は、Eさん家族と会うのを楽しみにしていた。

土浦で二日間お世話になった人たちと会ってから、タクシーに乗ってEさん宅へ向った。家の前に着くと、玄関先でEさん家族三人が迎えてくれた。ミヒヤエルは、R君を覚えていなかったが、笑顔で挨拶を交わしていた。

靴を脱いでから居間に行き、ソファアに座りながら、昔のこと、それから今の私たちの暮らしなどの話に、花を咲かせ続けた私たちだった。

しばらくすると、R君がミヒヤエルを連れて、彼の部屋に行った。

数分もすると、二人の歌声が聞こえてきたので、私たち親は、その声のするほうに向った。と、二人はお互い肩を組みながら、家庭用の小さなカラオケから流れて出てくる日本童謡のメロディーに合わせて、マイクを持って声を張り上げていた。

その様子を見ながら、私がEさん夫妻に、

「ことばが通じなくても、コミュニケーションができる二人。とてもいいですね」

と言うと、夫人は、

「二人がひとりになったようだよ」

と、応えた。

今度は、妻が私たち三人の顔を見た。

「二人は、それぞれの個性を出して、それがまさに溶け合うようになっていいるわ。二人に何か共通する心があるからでしょうね」

「そうだね。お互いが素朴なまでに、受け入れあっているのだよ。彼らの笑顔、最高だね。彼ら二人だけでなく、私たち親たちも、お互い共有できる心を持ち合わせているよね」

そう言うてから、さらに続けた。

「ハンデイのある子を育て、その過程のなかでいろいろな心労や気苦労を体験している私たちだ。と同時に、あるがままに生きている彼から希望を得、よろこびを知った私たち親でもあるのだ。その源になっているのは、やはり、わが子が愛おしいからだろう。また、最後まで彼のこと、気になる私たち親でもあるね」

「そうだね」

終 話 再 び、 共 に 暮 ら す

今まで住んでいたグループホームを出ることになってしまったミヒヤエル。そのことについて、妻と話し合い続けた。

「ミヒヤエルと再び家で一緒に暮らすようになって、ちょうど一年が過ぎたわね」

「そうだね。彼がグループホームで、生活ができなくなるとは、夢にも思わなかったよ」

「それは、わたしも同じよ」

「彼を長年ケアしていた担当の人が、お産のために辞め、それと同時にホーム長が替わり、今までのように彼をケアすることが難しくなると、責任が持てなくなったと判断したのだろう」

「残念だわ。たしかに、四十歳を過ぎてからのミヒヤエルは、寝る前に紙おむつをするようになったし、時々大声を発したりするし、今までとは少し違ったような行動を見せはじめたわね」

「そうだね。午後九時から 翌朝の六時までケアする人も当直者もいないので、ホームに負担が増してきたことは、たしかなのだが」

そう言うてから、さらに続けた。

「彼と同居している仲間たちは、皆ことばでのコミュニケーションは十分にできるけれど、ミヒヤエルはできない。彼らと較べたら、知的能力が極端に低い彼だからな」

「でも、そうしたなかで、ミヒヤエルは十四年間一生懸命よくやってきたと思うわ」

「同感だね。ホーム側の言い分も、わかるところがあるが、それでもと言いたいね」

「とにかく、こんどのホーム長は、ミヒヤエルのような知的に重いハンデイがある人たちが住んでいるところを推薦してくれたけれど、そこは家から三十キロ先のところだったわね」

「きみは、最初からそこには行かせないと断ったね。同じ意見だったよ」

「テュービンゲン市内には、知的に重いハンデイのあるグループホームはあったけれど、そこは待ちリストがあつて、数十名がすでに申し込んでいたわ」

「そのことを、きみはテュービンゲン郡の行政機関に手紙を書いたら、四日後に返事があつたよね。二年後には、夜の当直者がいるグループホームを新たに建てる計画があるので

それまで待つてくださいとのお返事だったね」

「ええ、そうだったわ」

「ミヒヤエルと一緒に再び暮らすのも、また、いいものだと自分は思ったね」

「でも、あなたは三年前、高安病に罹って、大学病院で一週間入院し、そのあともステロイド薬を飲み続けている身だし、果たして彼と一緒に暮らせるかと心配したわ」

「いや、反対に、彼との暮らしをよるこんだね。それよりも、きみは膝の関節炎を抱えていたので、なかなか自由に歩けない体だから、それを案じたよ。でも、二人でやることは、していこうと話し合ったよね」

「そうね」

「ここ一年間、彼と暮らしていたが、紙おむつは必要なくなってきたし、大声を出すこともなくなってきたね。たしかに、心身の衰えを見せはじめたが、毎日浮かべる笑顔は、以前よりも増してきたね」

「ええ、そうね」

「いつもあるがままにいるミヒヤエルだ。その彼のよって、よろこび、生かされている自分たちだ。それがあるがままに見ていこう。先のことは、予測つかないが、父親として母親としてやることをさらに続けていけば、なんとかなるよ」

「そうね。ポジティブにね」

私と妻の会話は、さらに続いた。

「十日前に作業所から連絡があつて、ミヒヤエルが乗っている定員九名のマイクロボスのなかで、新型コロナウイルスに感染した人が三名出たので、ミヒヤエルも感染している可能性が濃いので、すぐにPCRテストをしてくださいとの知らせがあつたね」

「そうね。彼らのなかには、マスクをしない人もいたし。ミヒヤエル自身、なぜマスクをするかの意味を十分にわかっていないでしょう。とにかく、彼と一緒に暮らしている私たちも、街の市庁舎前で毎日行っている検査を受けましょう」

「そうしよう」

それから、二週間が過ぎたある日のこと、妻に言った。

「ミヒヤエルは二回、私たちは一回検査をした結果、三人とも感染してはいなかったね」

「ホッとしたわ」

この会話をしてから、一カ月半が経った五月二十八日、私たち三人は二回目のワクチン接種を済ませたのだった。